

英雄兵士の物語

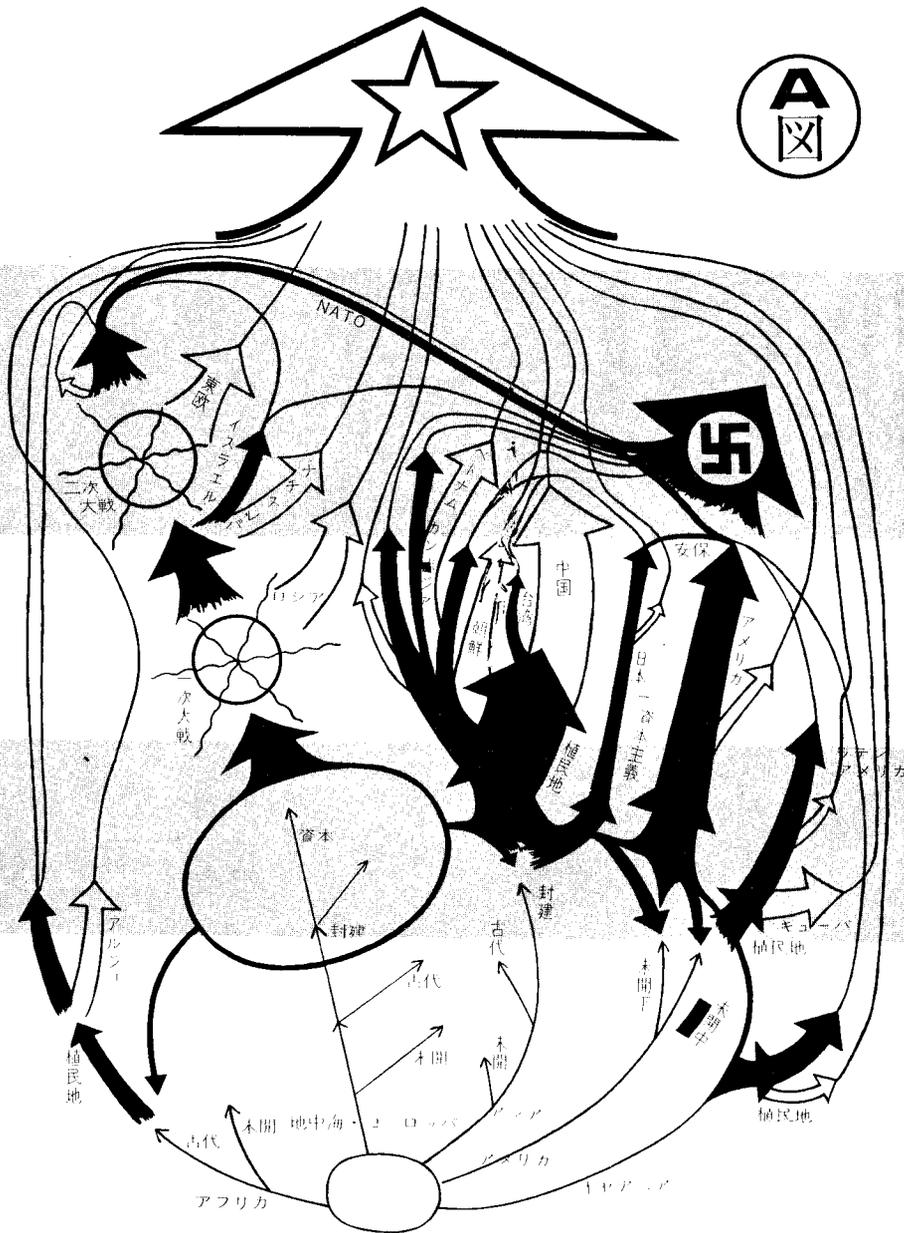
——国家論の発展のために——



上野勝輝

英雄兵士の物語

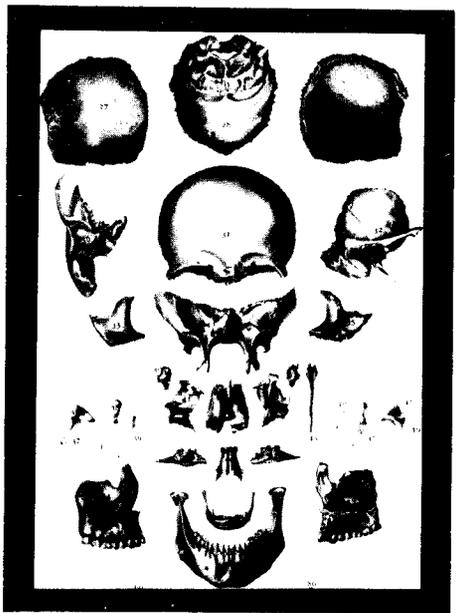
——国家論の発展のために——



A
図

国家の形成過程と、物語に登場する
英雄兵士達の位置の概観図

- 5 世界革命戦争と国家
- 4 過渡期世界と国家
- 3 帝国主義戦争 国家と革命
- 2 地理上の発見の時代と国家
- 1 自生的多極化の時代と国家



英雄兵士の物語

——国家論の発展のために——

上野勝輝

査証出版

序文

このメモは、世界革命戦争を生き抜く、無名の戦士たちのために、書くものである。ここに登場する無名の戦士たちは、過去の人類史数千年、数万年を代表するものであり、これからの人類史を生み出す教訓が、その中に秘められている。

これは、単なる物語ではない。マルクス・レーニン主義の国家論を過渡期世界において発展させるための創造的意欲に燃えた歴史の概説である。

これは、まだ、豊かな物語ではなく、固くて、つぎはぎだらけの、メモではない。だが、このメモの中を流れるものこそ、英雄兵士の魂であり、英雄兵士の物語である。

英雄兵士の物語 目次

I 国家の形成過程と英雄兵士たち

- 1 自生的多極化の時代と国々 8
 - ホミニゼーションの過程における家族の折出について
 - 集団の構造について
 - 家族について
 - 人類最初の大革命—母権制の転覆
 - アジアの共同体
- 2 地理上の発見の時代と国家 55
 - 地に呪われたる者
 - 攘夷
 - アメリカ
- 3 帝国主義戦争—国家と革命 65
- 4 満洲国世界と国家 72
 - 朝鮮労働党のプロレタリア独裁論

○反米愛国病患者を手術する

○イスラエル国家

○キューバとソ連

○国境

II 世界革命戦争と国家

- 1 「農村から都市へ」についての再考 130
- 2 中国共産党にももの申す 148
- 3 廃貨 154
- 4 地下の兵士 167
 - 1 地下活動
 - 2 自主独立と世界共産党、日本革命戦争と世界革命戦争
 - 3 兵士間の共産主義的団結について
 - 4 真の革命党を建設してゆくために

あとがき 181

英雄兵士の物語

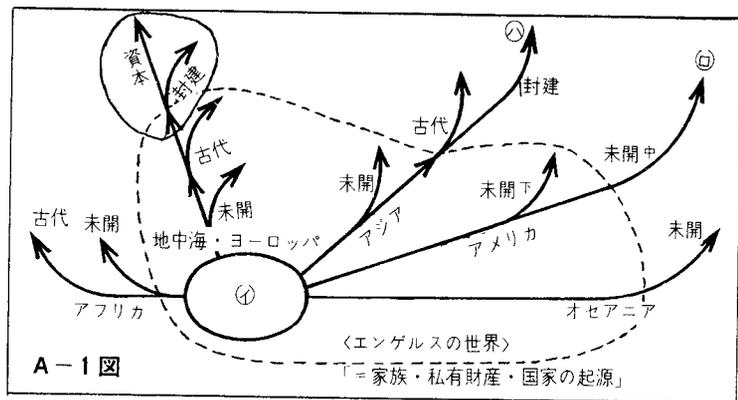
——国家論の発展のために——

メモーI

国家の形成過程と英雄兵士たち

このA-1図は、地理上の発見によって、ヨーロッパが世界を一つにまとめあげて行く前までの時代に、人類が、自生的にはどのように発展していたのかを示すものである。

アメリカ、オセアニア、アフリカの一部には、人類史上、自生的には、国家は生まれなかった。だからヨーロッパ人が、やってくるまで、そこには、国家はなかった。国家があったのは、地中海・ヨーロッパ、アジアである。アメリカの共産主義者モーガンが四〇年間に亘る北アメリカ・インディアンの研究をして、それを『古代社会』と題して一八七七年に発刊したが、この本を読んでいたマルクスは、『古代社会ノート』を作っていたが、死んでしまったので、マルクスの「遺言の執行」をなすものとして、マルクスの死の翌年、一八八四年、エンゲルスが六三才の時、その円熟した思想にもとづいて、モーガン、マルクスの研究を、『家族・私有財産・国家の起源』としてまとめたものが、マルクス主義国家論の体系化された最初の本である。国家のまだなかった社会と、国家のある社会の比較の中から、国家はどうやって生み出されてきたのかを説明し、この国家の起源の中に、国家の本質を見極め、国家の行方を明らかにしている。



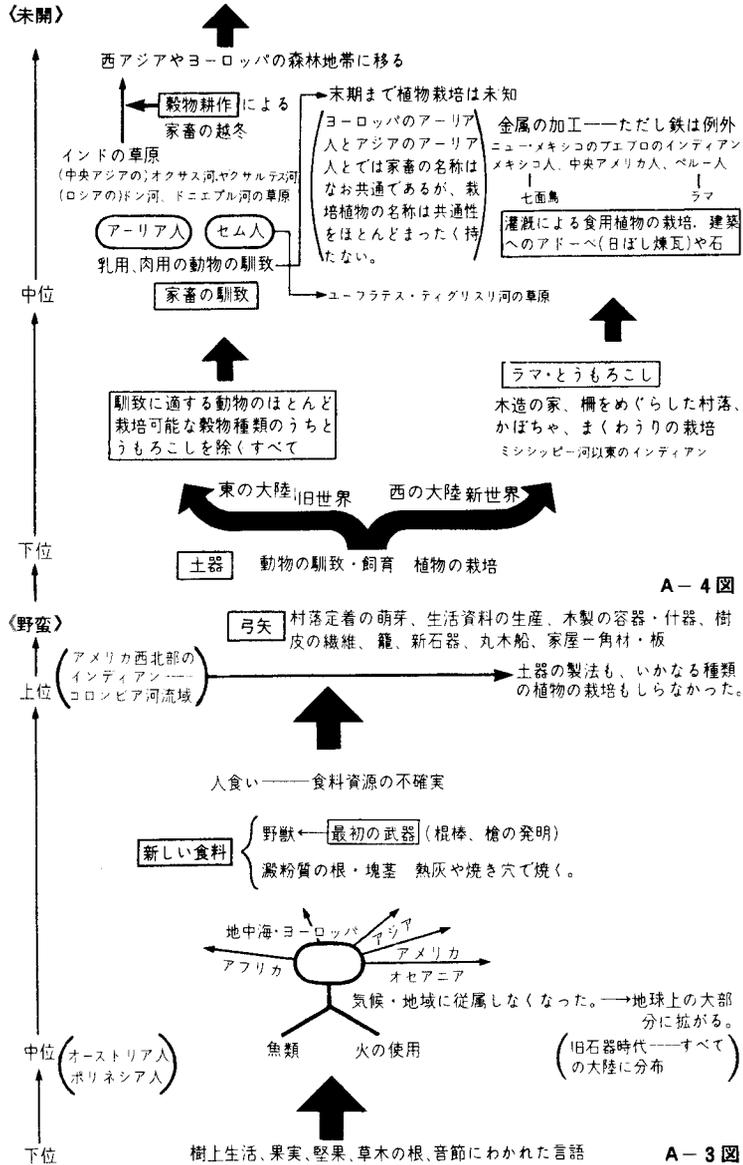
エンゲルスの世界は、……の中であるが、その中で、不十分な点について若干の補足しておきたいと思う。先ず、①の部分である。

『起源』の第一章は、「先史時代の文化段階」であり、歴史を、野蛮、未開、文明の三段階として、その概略を説明している。それを簡単に図にすれば、A-2図となる。

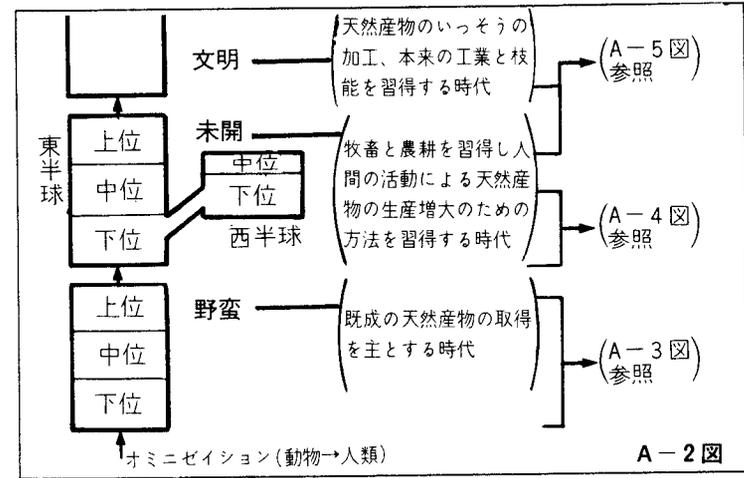
さて、このような、野蛮↓未開↓文明の概略の中で、エンゲルスが述べるのは、モーガンのアメリカ・インディアン（未開の下位）の研究を中心とした、氏族↓国家の成立、形成という文明期へ至る、未開の下位、中位、上位の分析に重点がおかれている。

そこで、アメリカ・インディアン（未開の下位）よりもまだ古い社会の分析をするならば、より、原始時代の、わが、無名の戦士達の活動の深さに到達するであろう。僕は、それを、アフリカの南のボツワナ共和国のブッシュマンの研究をした、『ブッシュマン』（田中二郎）で、その一部分を知る。

ブッシュマンは、弓矢による狩猟と植物採集による生活をしている。従って、A-3図の、野蛮の上位にあたるものである。この野



11 自生的多極化の時代と国家



★補足の1は、ホミニゼイションの過程における家族の折出についてである。

「国家もまた公法では家族の存在を認めない。家族は今日まで私法にとつて存在するにすぎない。だがそれにもかかわらず、われわれの従来のすべての歴史書は、とりわけ十八世紀に侵すべからざるものとなった不合理な前提から出発している。その前提とは、文明とほとんど同時期に生まれた単婚制個別家族が結晶核であつて、このまわりに社会や国家が徐々に付着してきた、というものである。」

(「起源」と、エンゲルスは、家族のまわりに社会や国家が

蜜の社会を知ること、エンゲルスの分析の氏族→国家の基礎となる、氏族の理解に不可欠の家族の分析を行なっている所のより深い理解をもたらすであろう。アメリカ・インディアン、アイロクォイ族は氏族社会であるが、ブッシュマンには、出自集団としての氏族はまだないのである。そういう社会の分析を通じて、エンゲルスの補足をしていこう。

それは徐々に死滅に向かいつつあり、いずれにしても衰退途上にある。これだけでも、猿の家族形態から原人の家族形態を類推した結論をすべて拒否するのに十分である。〔起源〕ところで、これは、エンゲルスの誤りである。方法論的に誤りだというのが、エンゲルスの氏族→国家の起源の分析の仕方だつて、「アメリカ・インディアンは衰退途上にある。だからエンゲルスの結論をすべて拒否するのに十分である」という事になつてしまふ。エンゲルスが、では、なぜ、こんな事を言つたかという、エンゲルスは、「高等脊椎動物には、われわれの知るかぎり、二つの家族形態しかない。すなわち、一夫多妻制か個別的対偶関係かである。いずれのばあいにも、〔雌には〕ただ一匹の成熟した雄が、ただ二匹の夫が許されるだけである。家族の紐帯であると同時に限界でもある雄の嫉妬が、動物の家族を群団に対立させる。ヨリ高度な群棲形態である群団は、雄の嫉妬のために、あるばあいには不可能にされ、あるばあいには馳緩するか、または交尾期のあいだ解体され、最良のばあいにも継続的発展を阻害される。これだけでも、動物の家族と人間の原始社会とは一致しないものである」と、動物状態から脱却しつゝあつた原人は、家族なるものをまったく知らなかつたか、あるいは、せいぜい動物にはみられない家族を知るだけであつたことが、十分に証明されるのである。』といつた考えを持つていたからである。エンゲルスは、原始史において、人類は、決して一夫多妻制や個別的対偶関係ではなく、「男たちが多妻制の、そしてその妻たちも同時に多夫制の生活をわく、またがつて、その共通の子たちもまた彼ら全員に共通のものとなされる。」「集団婚」であつたこと、この正しいことを守るために、上のような事を言つたのだが、その言つた事自身は、誤りなのである。

「最近の伊谷等の研究によれば、東アフリカのサヴァンナと森林に住むチンパンジーの社会は、他のサルや類人猿の社会と異なり、大変流動性に富んだ大型集団をつくるという。」「伊谷と鈴木が一九六五年にフィラバングにおいて、四三頭からなる大型集団の行進のもようをつぶさに観察し、その行進の隊列が、母子集団、オスだけの集団、発情したメスの集団に分けられることをみいだした。すなわち、さまざまな名で呼ばれていた小集団は、それらがけつしてでたために作られた一時的な集まりではなくて、さらに、それらを包みこむような形で大型集団が存在し、その大型集団の枠内で、さまざまな構成の小集団が離合集散しているらしいことが明らかにされたのである。」「チンパンジーの集団では、若いオトナのオスがほとんど欠落しているが、チンパンジーの社会には、オスとメスの間に、特定の持続的な性的結合はみられず、複数のオスが複数のメスを共有するという、一種の集団婚なので、親子の結びつきは母子関係にかぎられていく。そこで母子間の性交を回避するメカニズムとして、若いオスは性的に成熟すると群れを離れていくのではないかという解釈がなされている。」「(『ブッシュマン』)といった、集団の構造に関する単なる類似性だけではなく、次のような、食物の関係からも、チンパンジーの分析は、意味がある。

「セントラル・ブッシュマンの食物の基盤は、第一義的に根菜である *Cucumis kalahariensis* によつて成り立っており、それに加えて堅果である *Baobabia naerantha* に対する季節的な集中的依存がみられるが、これは大変興味深い、かつ重要な事実である。」「チンパンジーの食性は、一般に、葉、莖、花、漿果が多いが、サヴァンナ・ウッドランドに住むものは、乾季の最中から終りにかけて、*Baobabia* とは亜科を同じくする *Enteostegia* 等の堅果に集中的に依存する (伊谷純一郎一九六六)。セントラル・ブッシュマンとサヴァンナ・ウッドランドのチンパンジーが示す、同亜科 (*Caesal*

pin)の堅果への季節的な集中的依存という類似性は、まだ掘棒を持たなかったころのヒトの祖先が根茎を食物にとりいれることができなかつたことを考えあわせるとき、*Caesalpinaceae*の堅果が、ホミニゼーションの過程で果たした重要性を示しているものといえる。〔『ブッシュユマン』〕

* *Cucumis kalahariensis* は、写真でしか見たことないので、実際の色などわからないが、 みたいなかつこうのそうとうでつかい根茎。

* *Bauhinia naerantha* の堅果は、 みたいなさやにはいった、そら豆みたいな、かたい豆。漿果というのは、ナシみたいに水々しいくだものこと。

こうした分析にとどまらず、経済的な生計単位の分析も行なわれている。「チンパンジーには、分配や狩猟、肉食等の行動がみられているが、それらは萌芽的なものにすぎず、習慣的に行なわれるものではないので、個体間の分業はみられず、離乳前のコドモを除いてすべての個体は、あくまでも個体単位で、自給自足によって、生計を維持していかなければならない。すなわち、チンパンジーでは、各個体が即生計単位ということになる。それに対して、ヒト（狩猟採集民）では、夫と妻および、生計維持者と被扶養者という分業体制をもった家族が確立していて、家族が一個の自己完結的な生計単位となっている。〔『ブッシュユマン』〕

こういつた、事実から、田中が、チンパンジーとブッシュユマンの比較検討の中で、「バンド構造があつて、その中に家族が折出することによって、人間社会ができあがつた」とした事は、正しいし、まさに、エンゲルスが言うように、家族のまわりに社会や国家が付着してきたのではなく、又、原始史において、人類は集団婚であつたということ、という命題証明として、エンゲルスに味方する有利

な証拠を示しているのである。

★補足の2は、集団の構造についてであり、「キャンプ」といわれるものについてである。

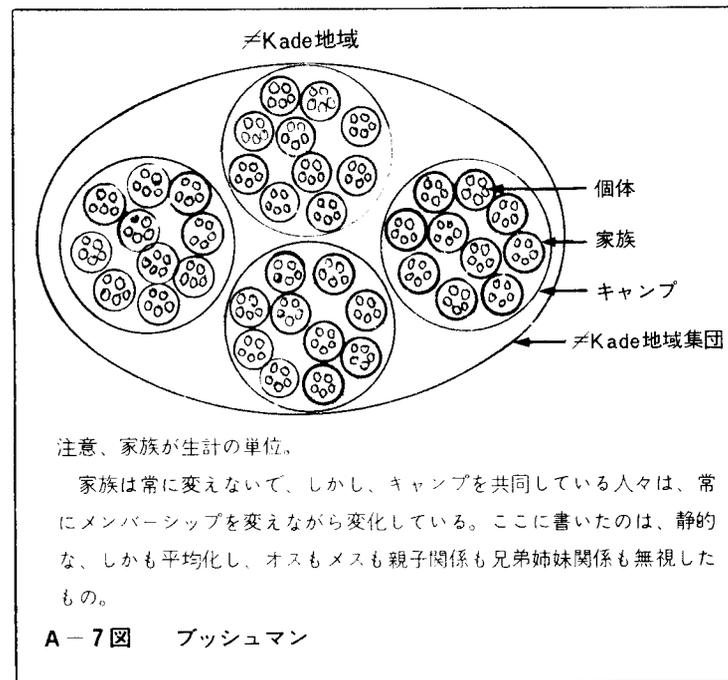
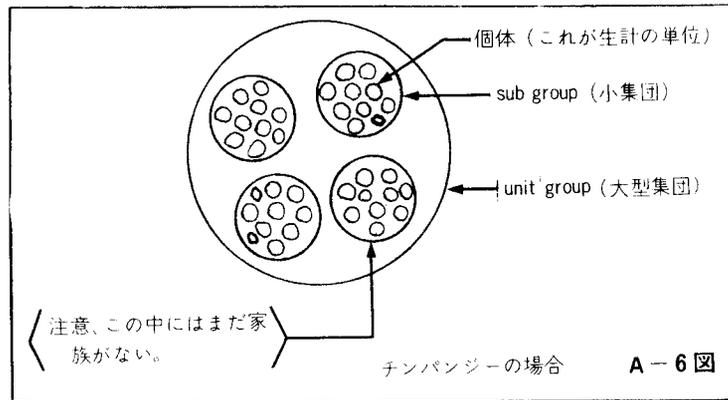
アメリカ・インディアン（未開の下位）の社会は、氏族社会であり、そこには、酋長や戦争指揮者がいる。だが、ブッシュユマン社会には、（野蛮の上位）、氏族もなく、酋長も戦争指揮者もない。そのような社会の集団構造を知る事は、非常に重要である。それは、今まで、「バンド構造」と言ってきた事の説明でもある。バンドとは、その名の通り、グループ・サウンズのグループとか、そういった意味でのバンドを想像すればいい。大ざっぱには、「バンド」と言ってもいいが、ブッシュユマン社会をバンドと言うのは、正確ではないので、田中は、より詳しく展開している。

「彼らの集団が、頻繁に繰り返される移動の過程を通じて、そのメンバーシップを変えていくということである。ブッシュユマンの居住集団は開放的で、常に流動的で、集団の構成は変異に富んでいるのである。したがって、ブッシュユマンの居住集団を指して『バンド』と呼ぶことはけつして適当ではない。なぜならば、『バンド』という概念は、その集団自身がテリトリーの所有やリーダーシップ、一定のメンバーシップをもった一つの自律性(corporateness)をもった集団を指すために使用されてきたものだからである。テリトリーの所有もみられず、一定のメンバーシップももたない、たまたまある期間（その期間は、普通、数週間程度である）だけキャンプを同じくして、共同生活を送るセントラル・ブッシュユマンの居住集団は、リーが調査した北部カラハリの「Kung(R.B. Lee 1965)」。ウッドバーンが調査したタンザニアのハッサ(J. Woodburn 1968 b)の場合と同様、それはたんに『キャ

表 チンパンジーとブッシュマンの集団組成

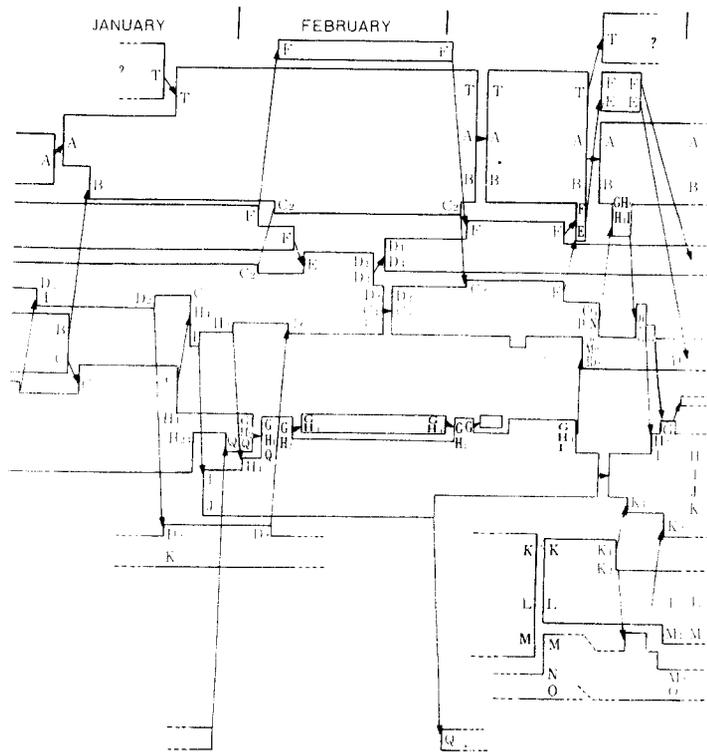
生計単位数 (平均)	1	10	40
チンパンジー (頭)	個体 (1)	subgroup (10)	unit group (40)
ブッシュマン (人)	個体 (1)	家族 (5)	≠Kade地域集団 (200)

(『ブッシュマン』田中, 1971より)

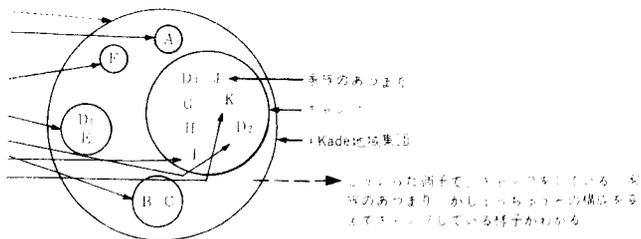


か。
さて、ところで、このような、集団の社会的構造は、どうなっているだろうか。
「ブッシュマンの社会には、その社会全体をまとめあげていく、リネージ (lineage)、クラン (clan)、あるいは、トライブ (tribe)、といったものはみられず、社会的統合のレベルはきわめて低い。いわゆる、バンド・レベル (band level) の社会だといえることができる。
ブッシュマンの社会には、採集と狩猟という、生業における男女の分業を除いて、他にはほとんど分業らしいものはみられないし、地位や身分、階級の上

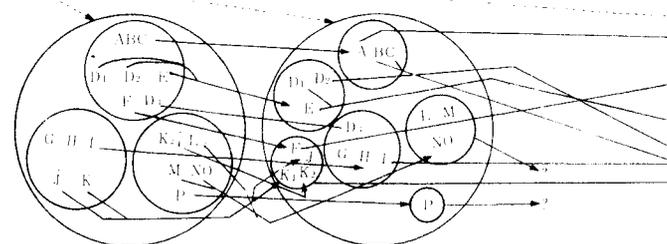
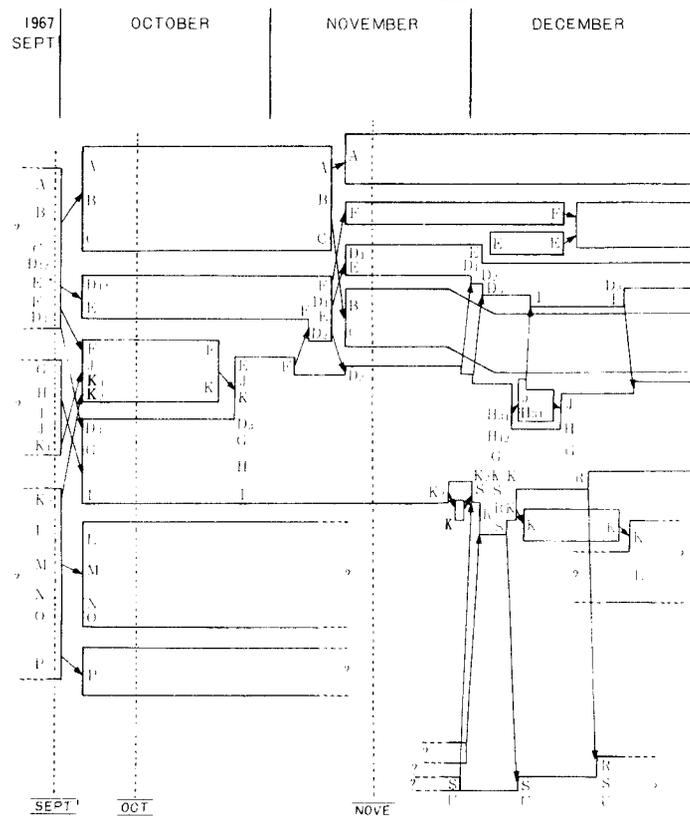
ンブ』と呼んでおくのが、もっともふさわしいものである。『ブッシュマン』
このようなキャンプの中で、メンバーシップを変えないで、何年にもわたって持続される社会的単位というのは家族であるが、この家族は、エンゲルスがプナルア家族と言っているものであり、その内容については、家族の考察として、後述するとして、ここでは、そのような家族、キャンプが、地域集団の中で、どういった関係にあるかを見ておこう。
このA-6、A-7の図は、チンパンジーとブッシュマンの集団組成として、表にすれば上のとおり。みごとに対応である。
さて、A-7図を、動的に、あらわしたものが、20~21ページの図である。



A, B, C, ..., T, V はそれぞれ Cluster of families 5, 4, 3, 2, 1



セントラル・ブッシュマンの集団の変動(1967.9-1968.3)



下関係といったものもみられない。単独では生計の途をたてていくことができない子供や老人を除いて、すべての成年男女は平等な立場にたつて、社会生活に参画することができる。平等主義 (egalitarianism) の原則がこの社会を貫く普遍的な原理になっている。したがって、この社会全体を統率するような首長 (chief) もいなければ、専門家 (fulltime specialist) もいない。

「世界各地の未開社会にみられるような、裁判制度や首長制といった、確固とした政治組織が存在するわけではなく、ブッシュマン社会では、自らの意志と良識にもとづいて社会生活が営まれている。」

「お互いに何らかの親族関係の網の目で結ばれ、お互い同志の親族関係が社会構造の中で大きく機能しているにもかかわらず、明確な親族組織が発達しているわけでもない。

それではいったい、集団としてのブッシュマン社会の存続はどのようにして行なわれているのだろうか？個人としてのブッシュマンは大変時間の觀念に乏しい。極端ないい方をすれば、きょうの食物があれば彼らは満足なのであり、現時点において、セックスを謳歌し、生活そのものを楽しむことができるならば、彼らは満足なのである。彼らは、過去のできごとと長くこだわることはしないし、明日の食物を心配することもしない。彼らは現在にのみ生きる楽天主義者である。そして、一般に朗らかな性格の持ち主で、友好的で、たえず冗談に興じ、笑いころげて楽しむことのできる人々である。それでいて彼らは、けっこう慎重で深いところをもっており、柔和で、一切の争いごとをよくないものと考ええる。個人の所有欲は強く、大変自己中心的な考え方をしたが、所有の觀念をはっきりともっている。他人のものを盗むのはよくないことと考える。このように、自己中心的な思考様式に基づく個人が、平等主義に立脚し、分配や共同を前提としてなりたつ社会の中で、いったい、どのように

存在しうるのか？その社会は、明確に制度化された何らの社会組織をもたない社会であるがゆえに、個と集団の間に横たわる避けがたい矛盾・相克の解消の仕方は、より一層の重要性をもっているのである。」

「ブッシュマンのような未開社会では、文明社会にみられるような時代の変化といったものはみられず、常に一定の価値基準や倫理等が維持されるので、年寄りが時代遅れになって、のけものにされるといった現象はおこらない。この社会では、人生経験こそが知識の集積であり、権威の源泉となる。そのため、年長者、とくに年寄りには尊敬され、彼らの言動は、通常、社会生活の主導権をとりうる。」

「生活の諸局面において主導的な役割を果たす熟練者や、情況に応じて集団をまとめたり、物事の決定や解決をはかったりする中心人物がいて、彼らは社会生活の運営にあたって重要な役割を果たしているのであるが、それらはあくまでも情況に応じたその場かぎりのリーダーであって、けっして社会全体を統率していくリーダー、すなわち、首長 (Chief) ではない。」

「もっとも大きな決定権をもつものは、キャンプに居合わせる人々が誰でも加わることのできる、『話し合い』である。」

「もっとも重大な争いの原因となるものは、姦通であるが、その他に、食物の分配に関してはしばしばいざこざが生じる。」

「ケンカの種を長期にわたって根にもつことはなく、何日か経って再会したときには、両方ともケロリとした顔をして共同生活を始める。」(「ブッシュマン」)

このような、社会構造をもっている社会では、共産主義的な分配と共同が行なわれている。それは、次のごとくである。

「まず最初に狩猟に参加した数人の人々の間で第一次の分配が行なわれる。」

「第一次分配については、年長の者がこれを取りしきり、肉塊の山を中心にくるりとまわりをとり囲んで坐りこんだ人々は、それらの肉塊が、それぞれの家族の取り分としてふり分けられていくさまを見守りながら、『あちらのあばら肉の部分を少し切りとって、こちらの山につけ加えた方がよい』などといったことをわめきたてる。ときには、肉の多少をめぐる大騒ぎにわめきあうことも多いが、たいていの場合、悪意があるわけではなく、ごちそうを目の前にして、彼らは興奮しているのであり、むしろ、そうした騒ぎたてることによって楽しんでおるといったふうである。」

「こうして配られた肉塊は、さらに、それぞれの家族の身近な親戚や友人、訪問客等へと、第二次の分配が行なわれ、以下同様に、第三次、第四次：といったふうに分けられていく。肉はあちらこちらと行ったり来たりしながら、ついには、キャンプに居合わせるすべての人々にいきわたるようになる。」

「ブッシュマンたちはいとも気軽に手伝いあつて、共同作業に従事する。」（カモシカ毛皮加工、小屋建てなど）

「衣類に使う毛皮、装身具、毒矢や槍のような狩猟具から、ナベやコップや火かき棒といった日用品にいたるまで、それらの所有権ははっきりしているにもかかわらず、ブッシュマンの各家族がそういった生活必需品のすべてを備えていない場合が多いので、大変頻繁に、他人に貸したり、与えたり

することが観察される。」

「相互的な関係を表わすのに、接尾語 *-ku* を用いるが、それは単に『…し合う』のではない。

『*maaku*』というのは、例えば今 A がナイフを B に『*maaku*』したとすると、B はいつか近い将来、A に対して、ナイフに匹敵する品物をお返ししなければならぬ義務を生じる関係であり、

『*Iobe-ku* (*Iobe* は貸すの意)』は、同様に時間を隔てて、品物を貸借する関係を表わすことばである。『*shie* (取る、手に入れるの意)』ということばに、*-ku* を付けて、彼らは『*shieku*』を『結婚する』の意に用いる。ブッシュマンは、結婚を男女の間での一種の交換であると、はっきり認識しているわけである。」

「ブッシュマンにおける分配や共同は、まさしく『普遍的互酬性』に相当するものである。」（『ブッシュマン』）

このような社会での、採集狩猟経済を、植物性食物、動物性食物、分業、労働力、労働時間などの観点から見ることは重要である。簡単に見ておこう。結論的なものだけであるが。

「採集狩猟経済というものが、けっして極限にたった不安定なものではなく、ブッシュマンの食生活の観察からも伺い知られるように、実は、安定した経済的基盤にたったものであることが認識されるべきである。」

「男は狩猟と道具の制作、女は採集と料理というふうに分業が行なわれるが、男はしばしば採集行動にも加わる。」「子供たちが採集行動に加わることはきわめて稀で、普段は、子供たち同士でキャンプに残り、遊んで暮らす。」

「狩猟が高度の熟練を要し、しかも、重労働を強いものであるにもかかわらず、なおかつ酬われることの少ないものであったのに対して、植物性食物の採集は、植物の存在が予知できるうえに、それを集めることは誰にでもできる容易なものである。そして、小さな労働力で有効に必要なだけの食物を獲得することができる。したがって、採集は生計の基盤としてはより安定なものであるといえる。」しかし、「ブッシュマン自身が、動物の肉こそが『本当の食物だ』と信じているように、肉は彼らの食物のなかでもっとも称賛されるべきものであり、それはまた得がたいものであるがゆえに、一層価値あるものとなっている。」

「ブッシュマンの労働時間は、一人一日について平均六時間内至七時間を越えることはなく、日本人や他の文明人の労働時間に較べてもとくに多いというわけではない。むしろ、地球上のもっとも恵まれない生活条件のもとで、野生の動植物のみに頼り、厳しい自然の直接の影響にさらされて、ぎりぎり一杯にその日暮しを送っていると考えられていた人々としては、想像以上にその労働量は少ないということが出来る。』(『ブッシュマン』)

「さて、ブッシュマンの生計維持者による労働量であるが、その一つの目安として食物獲得のための外出時間が考えられる。第一三表は Ikoikom キャンプにおける一六名の生計維持者が一〇月四日から一三日までの一〇日間に、食物の獲得のためにキャンプを外出した時間を示したものである。表において、一〇月一二日に男たちの外出時間が揃って多いのは、前日の一〇月一日に Utioma が射たゲムスボックスを /Naraji および Ayakom を除く男全員が追跡したからである。この日、女たちは獲物の肉がほぼ確実に入手できると考えたので、採集のための外出時間は少ない。翌一二日には、

獲物の肉がまだ残っていたので、男も女もほとんど外出しなかった。この頃の主食は *Cucumis kal ahariensis* を中心とした根菜食であるが、一〇月八日も女たちの採集活動が少ないのは、前日長時間外出して沢山の食物を集めて帰り、残り物で間に合ったからである。

この表からわかることは、男の方が女よりもやや外出時間が長く、また、個人によって外出時間に大変な差があることである。例えば、Kene/nu と Shiekaho の夫妻はまだ若くて子供を持たないので、家族を養う必要がなく、どちらも外出時間は少ないし、Ayakom は足を痛めていて狩猟を行なうことができないために、外出時間が他の人々に較べて格段に少ない。第一三表によると、Ikoikom のキャンプにおける男女一六名が一〇日間に外出した時間の総計は七四三時間三五分であり、一人一日あたりにならずと、

$$743\text{時間}35\text{分} \times \frac{1}{10(\text{日})} \times \frac{1}{16(\text{人})} = 4\text{時間}39\text{分} \quad (\text{被採集者は14名})$$

となる。採集や狩猟のために外出する時間は、個人によっても大変な差があるし、また、採集する植物の種類や狩猟の方法によって、それぞれの季節にしたがってかなりの差異がみられるが、他のキャンプにおける、季節を違えたデータによっても、女は一時間から五時間程度、ほぼ毎日外出し、男は週三日から五日の割合で五時間から十二時間程度の外出をするという結果が得られている。そしてその平均値は第一三表の数値にだいたい一致する。一年の大半が、日中は焼けつくような日射しを受けるカラハリであるから、人々は採集や狩猟のために外出しても、ときどきは木陰に涼を求めて休息することが多い。ことに女の場合には、何人かで語らいながら採集を行なうので、休息に費やす時間も

労働時間表

(食物獲得行動のために外出した時間 1967年10月4日-13日)

名	前	性別	日											合計	1日当り平均
			4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日			
1	Orekua	男	4.00	7.00	9.00	10.00	9.15	7.30	11.00	5.30	10.10	—	73.25	7.20	
2	Shoeka	—	4.00	—	10.30	1.00	8.30	10.30	—	10.10	—	44.40	4.30		
3	/v! toma	—	4.00	7.00	9.00	7.00	1.00	9.00	11.00	9.50	10.10	—	68.00	6.50	
4	Ayaxkom	—	—	—	—	3.00	—	9.00	—	—	—	—	12.00	1.10	
5	!Kana	—	9.00	8.30	9.40	11.20	10.00	9.00	10.45	7.30	10.10	4.00	89.55	9.00	
6	/Naraji	—	4.00	8.30	10.00	7.40	10.00	9.00	11.00	12.00	12.10	11.00	95.50	9.35	
7	!KabamaKue	—	—	12.00	5.00	12.00	12.00	9.20	9.45	12.30	10.10	—	79.45	8.00	
8	Kene/nu	—	—	2.00	4.00	8.10	2.00	3.30	—	12.30	10.10	—	42.20	4.15	
男の労働時間合計			25.00	45.00	46.40	69.40	45.55	61.50	64.00	59.50	73.10	15.00	505.55	50.35	
9	#Naeba	女	—	5.00	5.30	10.00	1.00	6.00	2.10	4.35	1.35	—	35.50	3.35	
10	!Kae! Kakyue	—	—	5.00	5.30	10.00	—	6.00	2.10	3.35	4.05	—	36.20	3.40	
11	!Kotsepe	—	—	—	5.30	10.00	—	6.00	—	4.35	1.35	—	27.40	2.45	
12	Doba	—	—	5.00	5.30	10.00	1.00	6.00	2.10	4.35	1.35	—	35.50	3.35	
13	!Kaeka/nu	—	—	5.00	—	10.00	1.00	—	—	—	—	—	16.00	1.35	
14	Kaboko	—	—	—	9.00	10.00	1.00	—	—	3.05	—	—	23.05	2.20	
15	/Ea !Kaho/nubi	—	—	8.30	9.00	10.00	—	6.00	2.10	4.35	4.05	—	44.20	4.25	
16	Shie !Kaho	—	—	—	—	8.00	—	6.00	—	4.35	—	—	18.35	1.50	
女の労働時間合計			—	28.30	40.00	78.00	4.00	36.00	8.40	29.35	12.55	—	237.40	23.45	
総計			25.00	73.30	86.40	49.40	49.45	97.50	72.40	89.25	86.05	15.00	743.35	74.20	

多い。したがって、外出中に実際に仕事をする時間というのは、表にあらわれた数字よりも短かいのが普通である。ブッシュマンの行なわなければならない労働は、もちろん、採集と狩猟だけにかぎっているわけではなく、キャンプにあつての種々の雑事が含まれる。キャンプでの仕事のうちでもっとも大きな割合を占めるのは食事の用意であり、これは外出時間の短かい女の仕事である。男は狩りに行かない日には、皮製品や狩りの道具を作り、また、修理したりする。しかしながら、キャンプにおけるこのような雑仕事に費やす時間は、平均すれば一日に二時間を越えることはないように思われる」(田中『ブッシュマン』一九七二、八二-八三頁)。

★ここでは、家族について見る。

補足一、二で、集団の構造を見たのだが、その中に折出した家族については、後述、後述と言ってきたので、ここでは、家族を中心に見る。そして、これは、エンゲルスの『起源』第二章家族を、より具体的に理解するのを助ける

だろう。

「ブッシュマンの社会では一夫多妻の例はかなりみられる」

「離婚の手続きは大変簡単で、配偶者の一方が他方を残したまま出て行きさえすれば成立する。」

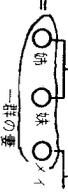
「男と女の分業体制が必要なので、よほどの高齢者でないかぎり、離婚したり配偶者の一方に死別したりしたのち、長期にわたって独身生活を続けることはなく、次の配偶者を見つけ再婚する。レイヴィートやソロレットは普通にみられ、子供は両親の同性のシプリング(類別的には両親である)のもとで育てられる。」「複数婚が多い」(『ブッシュマン』)

「男が死んだ兄の妻と結婚する方式を逆縁婚(レイヴィート)と称し、また亡妻の妹またはメイと当然のこととして結婚すること、および、一夫多妻制のもとで、前述の関係を第二、第三夫人とすることをソロレットという」(『ブッシュマン』)のだそうであるが、これは、図にして見るのが一番よくわかる。これは、じつは、集団婚であり、一夫多妻であり同時に一妻多夫である。だが、エンゲルスが「長短の期間にわたる、ある程度の対偶関係は、すでに集団婚のもとで、あるいはさらにそれ以前に生じていた。夫は多くの妻のうちに一人の主要な妻(まだ愛妻とまではいえない)をもち、彼女にとって彼はほかの夫たちのなかでもっとも主要な夫であった」(『起源』)と言っているように、これは



である。

これは、一夫多妻そのもの、又は、そのなごりである。

昔は、と、一群の妻（姉妹、メイ）と一人の男が結婚した。それが、やがて②

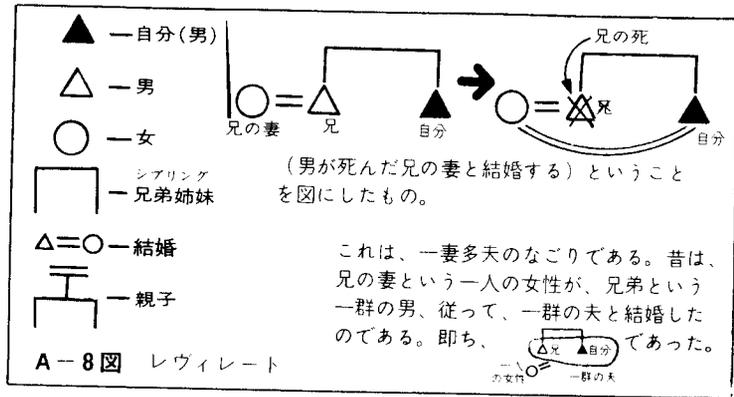
（A-9図）となったが、今では、②となつてしまつても、妻の死を媒介に③がいろいろと復活するのである。それが、④、⑤、⑥、⑦である。

このように見てくると、ブッシュマン社会は、基本的に集団婚（一群の男が一群の女と結婚する）であるが、それが、対偶婚の方へ少しくずれかかつており、それは、一妻多夫よりも一夫多妻の方へかたよつたかたちでちよつとだけくずれかかつているといったものである。

結婚は、こういったものであるが、親族制度との関係で見ると、集団婚といつてもそこには、一つの法則がある。一群の男が一群の女と結婚、といつても、全くの無規律ではなくチンパンジーが、母子の性交を回避し、近親相姦排除による自然淘汰の論理を働かせていたのを前にみたように、人間社会でも、親子の、ついで、兄弟と姉妹の、（昔は、兄弟と姉妹は、互に夫妻だったのだが）性交を排除し、婚姻を禁止した。ブッシュマン社会は、この段階である。

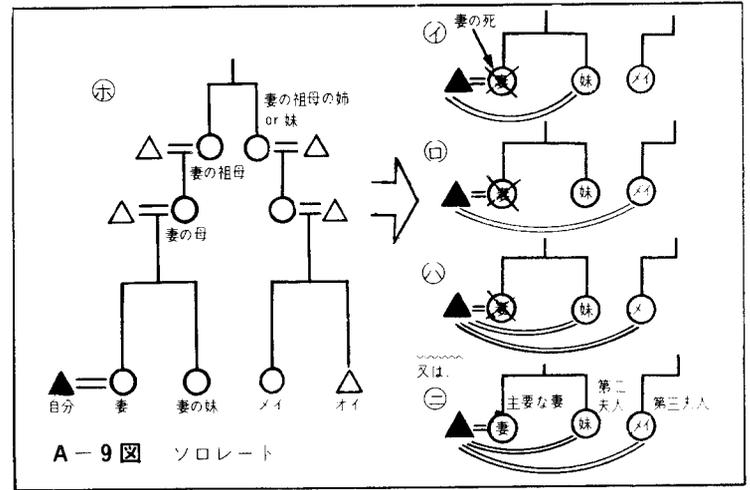
これは、冗談関係 (joking relationship) と忌避関係 (avoidance relationship) という興味深い関係の中にあられる。

「セントラル・ブッシュマンにみられる行動様式のもう一つの側面は、冗談関係 (joking relationship) と、忌避関係 (avoidance relationship) にあられる。本人を中心としてみた場合、一世代を



隔てた祖父母 (baham と masi) および孫 (inodin と inodisi) が冗談関係の範疇に入り、隣接世代の父母 (bam と giei) および子供 (wam と washai) が忌避関係の範疇に入る。また、シブリングは性によって分けられ、本人が男なら兄弟 (kiyaxom と dabaxom) が冗談関係に、姉妹 (kiyaxosi と dabaxos) が忌避関係になる。Baham や masi で呼ばれるところの両親の異性のシブリングや inodin、inodisi で呼ばれるところの交叉イトコは冗談関係になり、両親と同じ名称で呼ばれるところの、両親の同性のシブリングは両親とみなされるから、忌避関係である。平行イトコはシブリングに相当するから、当然、性によって分けられる。血縁の人に婚姻関係が生ずると、彼あるいは彼女の配偶者は、彼あるいは彼女と同じ関係に位置づけられる。

冗談関係にある者同士の間では、人々は大変自由に振舞うことができる。彼らは自由に話を交すことができ、そこではどんな複雑なことや冗談がとり交されても許される。また、所有物をお互いに相手の許可なく使用することもできる。一方、忌避関係にある者同士の間では、彼らは非常に慎重な態度をとることが余儀なくされ、セックスに関する話は許されない。所有物を借りるときには、まえ



もって相手に許可を得ておかなければならない。また、この関係は婚姻規制にも機能しており、人は忌避関係にあるものと結婚することはできない。忌避関係にある者同志の結婚は近親相姦とみなされるからである。冗談関係にあるもの同士でも、ことに、本人と祖父母との間柄、同性のシブリング同士の間柄、異性の交叉イトコ同士の間柄、本人と両親の異性のシブリングとの間柄(いわゆるオジ・オバとオイ・メイの関係)では、親しく振舞うことができ、そこでは、他人の悪口をいい合ったり、猿談をしたり、いたずらをしあったりすることさえも許される。食物も含めた所有物の共有も頻繁に行なわれ、そういった人々の間での許容度は著しく高い。家族的な(familistic)結合の度合は著しく強いということができる。(田中『ブッシュマン』一九七二、一〇二頁)

さて、レヴィエートやソロレートなどを具体的に図ではみてきたので、集団婚や、原始時代の親族制度について、文字だけ読んでもよくわかると思うので、詳しくは『起源』を読んでもらうとしてここでは、家族について、エ

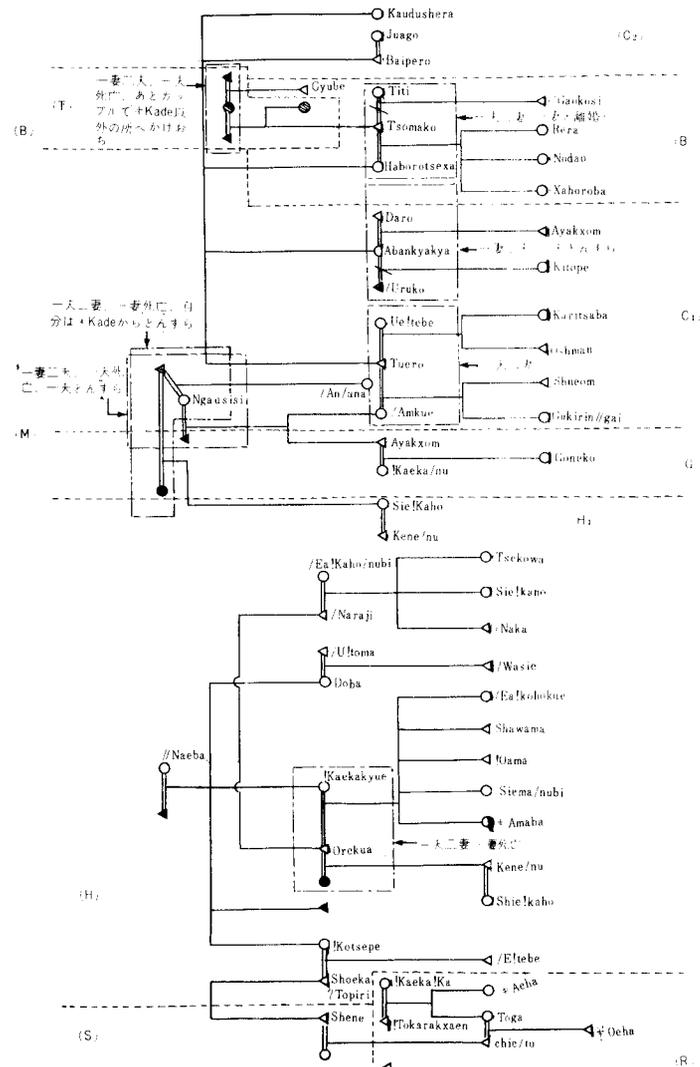
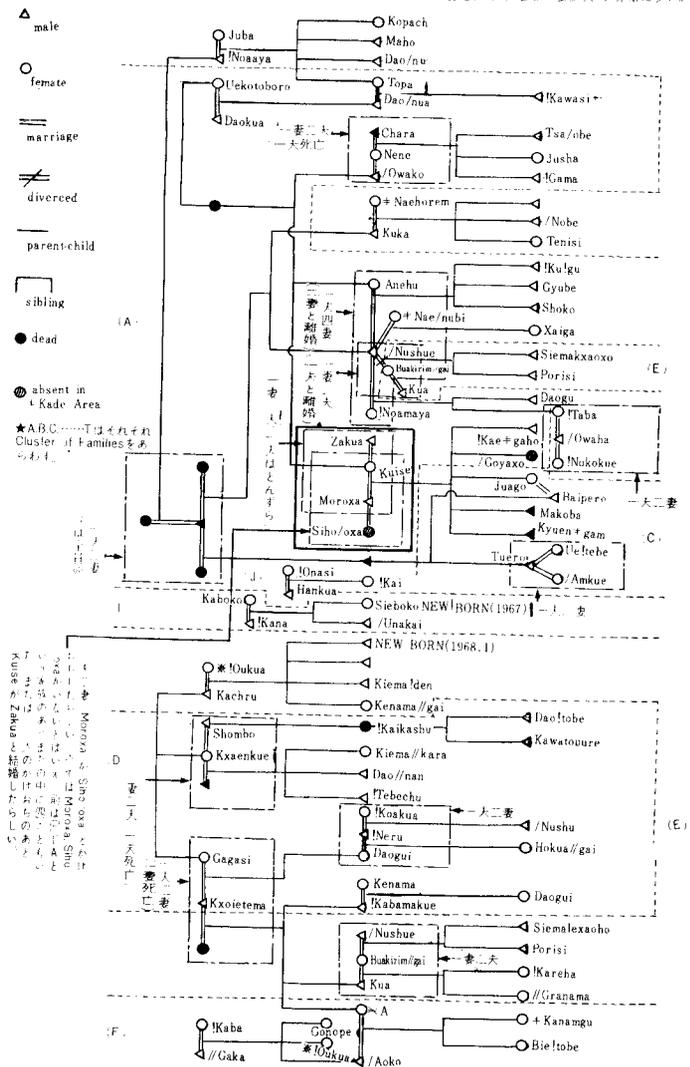
ンゲルスの説明をくり返す必要もないので、簡単に、家族史の論理を図にしておくにとどめよう。(A-10 図)

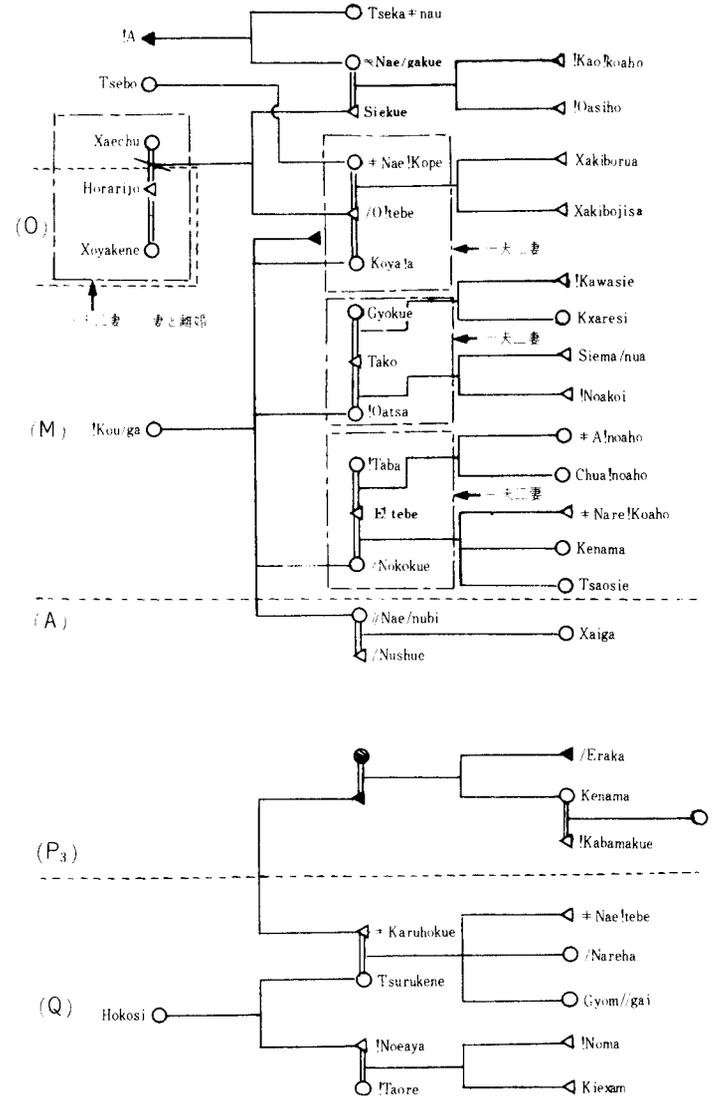
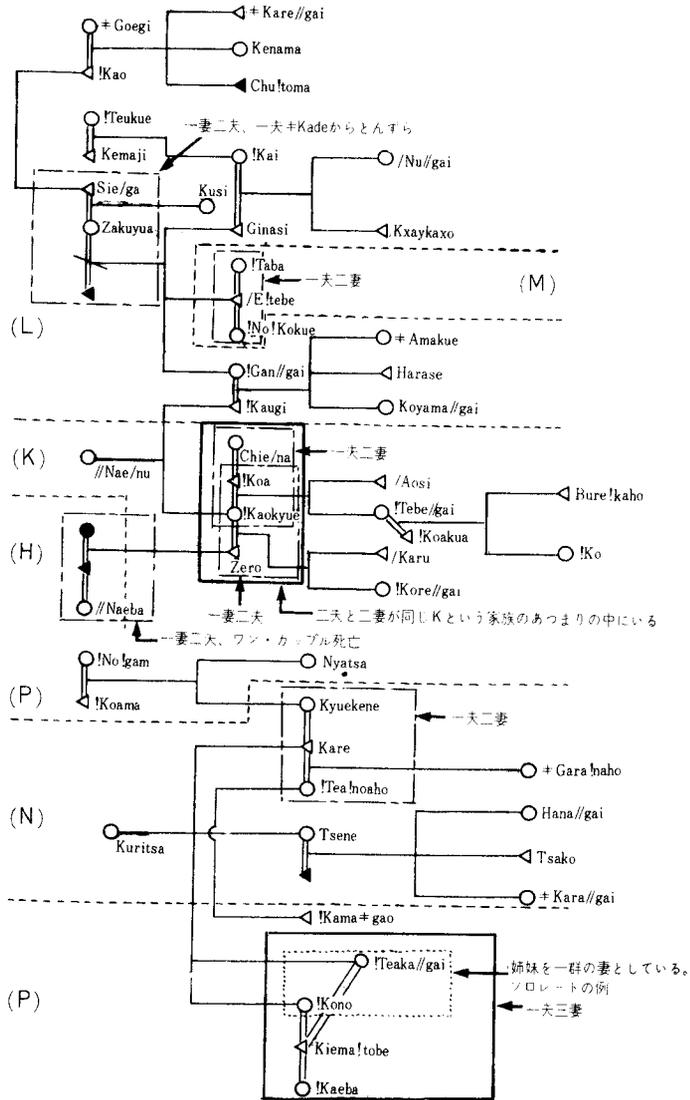
★人類最初の大革命Ⅱ母権制の転覆

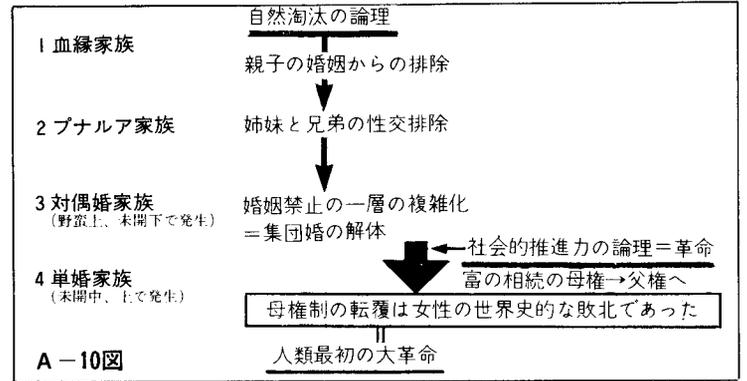
ここでは、対偶婚家族→単婚家族への推進の論理としての社会的推進力の論理、即ち、人類最初の大革命としての母権制の転覆について、『起源』を、別に読まなくてもいいように、その引用をしておこう。この過程の分析こそ、私有財産の起源であり、従って、共産主義≠私有財産制の廃止の一言につきるといったマルクス主義思想の根本が含まれているからである。ここさえ、しっかりと理解出来れば、だれでも、立派な共産主義者になれる。

「旧世界では、家畜の馴致と畜群の飼育が、それまで予想もされなかった富の源泉を發展させ、まったく新しい社会的諸関係をくりだしていた。未開の下位段階まで、永続的な富は、家屋、衣類、粗野な装飾品、食料の獲得と調理のための道具、すなわち小舟、武器、ごく簡単な什器にほぼかぎられていた。食料は毎日新たに獲得されなければならなかった。いまや、馬・らくだ・ろば・牛・羊・山羊・豚の畜群という形で、前進的な遊牧諸民族——インドの丘河地帯(パンジャブ地方)とガンジス河地帯、ならびに当時はなお水がはるかに豊富であったオクサス河とヤクサルテス河の流域の草原にいたアーリア人、エウフラテス河とティグリス河の流域にいたセム人——は、わずかに見張りとしてごく大ぎっぱな世話をしさえすれば、ますます大量に繁殖して乳や肉の食料をきわめて豊富に供給する財産をもつにいたった。以前の食料調達の手段は、いまやすべて背景に退いた」

#Kade 地域におけるセントラル・ブッシュマンの親族関係 (集団婚) 一人の妻と一妻多夫が非常に多い。







「この新しい富は誰のものであったか。疑いもなく、当初は氏族のものであった。」

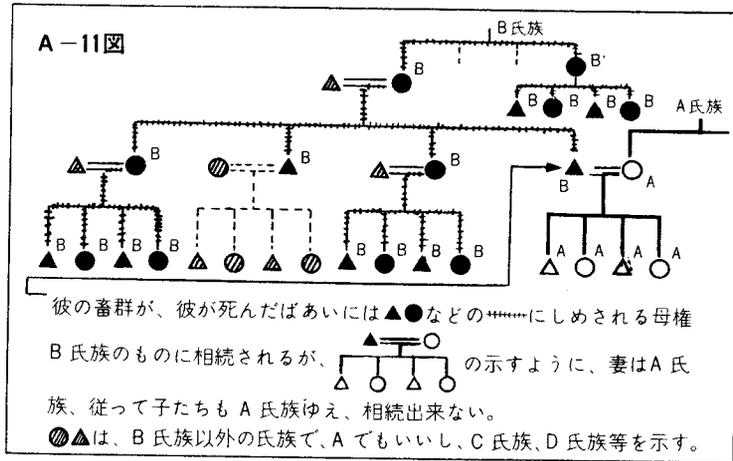
「人間の労働力は、この段階では、まだその生活費用をこえる剰余をいうにたるほどもたらしはしなかった。牧畜・金属加工・機械織り、そして最後に畑作耕作の採用とともに、事情は変化した。以前にはあれほど容易に得られた妻が、いまでは交換価値をもち、買われるようになったが、労働力についても、とくに畜群が最終的に家族所有に移行して以来、同様のことが生じた。家族は家畜ほど急速には増加しなかった。家畜を見張るためには、もつと多くの人間が必要となった。戦争でつかまつた敵がそれに利用され、そのうえ彼らは家畜そのものと同様に繁殖させられたのである。」（「下位段階の未開人には奴隷は無価値であった」が、「けだし、いまでは奴隷制もまた発明されていた。」）

「このような富は、それがいったん家族の私的所有に移って、そこで急速に増加するやいなや、対偶婚と母権制氏族にもとづく社会に強力な一撃を与えた。対偶婚は、家族のうちの一つの新しい要素をもたらしていた。それは、実母とならんで公認の実父を設けたが、彼はおそらく今日の多くの『父』よりも、実父であることをも

つとよく公認されていたであろう。当時の家族内での分業によれば、食料の調達とそれに必要な労働手段の調達は夫の仕事であり、したがって後者の所有もまた夫に属していた。離婚のばあいには夫がそれを持ち去り、妻はその什器を保持した。したがって、当時の社会の慣行によれば、夫は新しい食料源泉である家畜の所有者であり、またのちには新しい労働手段である奴隷の所有者でもあった。しかし、この同じ社会の慣行によれば、彼の子たちは彼から相続することができなかった。けだし、その間の事情は以下のごとくだったからである。

母権制によれば、したがって血統が女系によってのみたどられていたあいだは、そしてまた氏族内での本源的な相続慣習によれば、さしあたり氏族の親族が、死亡した氏族員の財産を相続した。財産は氏族内に残されなければならなかった。相続の対象が些細であったので、財産は実際には以前から氏族のもつとも近い親族に、したがって母方の血縁者の手に移されていたかもしれない。しかし、死亡した夫の子は、父の氏族には属さないで、母の氏族に属していた。子は母の財産を、はじめは母の他の血縁者たちとともに、のちにはおそらくまっさきに相続した。しかし、子は父の財産を相続することはできなかった。というのは、子は父の氏族には属さないし、父の財産はその氏族内に残されなければならなかったからである。したがって、畜群の所有者が死んだあいには、彼の畜群は、さしあたり彼の兄弟姉妹と彼の姉妹の子たちに、または彼の母の姉妹の子孫の手に移ったであろう。しかし、彼自身の子はこの相続から排除されていたのである。」

「したがって、富が増加するのに比例して、この富は、一方では、家族内で男性に女性よりも重要な地位を与え、他方では、この強化された地位を利用して、従来の相続順位を子に有利なようにくつ



がえそうとする衝動を生みだした。しかしこれは、母権制による血統がおこなわれているかぎり、だめであった。したがって、この血統がくつがえされなければならなかった。そしてそれはくつがえされた。これは、けつして今日われわれが考えるほど困難ではなかった。なぜなら、この革命——人類が体験したもつとも深刻な革命の一つ——は、氏族の生きている成員のただの一人にも手をふれる必要がなかったからである。今後、男の氏族員の子孫は氏族内にとどまるが、女の氏族員の子孫は排除されて父の氏族に移ることにする、という簡単な決議だけで十分であった。これによって、女系による血統の算定と母方の相続権とはくつがえされ、男系による血統と父方の相続権とが樹立された。

「母権制の転覆は、女性の世界的な敗北であった。男性は家の中でも舵をにぎり、女性は品位をけがされ、隷属させられて、男性の情慾の奴隷、子供を生むたんなる道具となった。」

「いまや樹立された男性の独裁の第一の結果は、この時期に姿を現わす家父長制家族という中間形態に示される。それのおもな特長をなすものは、後述の一夫多妻制ではなく、『多数の自由人と非自由人とを家長の家父権力のもとに一家族に組織することである。セム人の形態では、この家長は一夫多妻の生活をおくり、非自由人は一人の妻と子を持ち、そしてこの全組織の目的は、区分された領域で畜群の世話をするのである』【モーガン】。本質的な点は非自由人の包摂と家父権力であり、したがって、この家族形態の完成した型はローマの家族である。familia〔家族〕という言葉は、本来は、感傷と家庭不和から構成される今日の俗物の理想を意味するのではない。ローマ人のばあいには、それは当初、けつして夫婦とその子供を指すのではなくて、奴隷だけを指す。familusは家内奴隷のことであり、familiaは一人の男に属する奴隷の総体のことである。」

「このような家族形態は、対偶婚から単婚への移行を示している。妻の貞操を、したがって子の父性を確保するために、妻は夫の権力に無条件にゆだねられる。夫が妻を殺しても、それは彼が自分の権力を行使しただけのことである。」

「単婚家族を対偶婚から区別するものは、婚姻紐帯のいっそうの強固さであり、いまではこの紐帯はもはや双方の意のままには解消できない。いまでは原則として夫だけが、それを解消して妻を追いつ出ることができる。」

「単婚はけつして個人的性愛の果実ではなく、これとは絶対に無関係であった。というのは、婚姻は依然として便宜婚だったからである。それは、自然的条件ではなく経済的条件に、つまり本源的自然発生的な共同所有にたいする私的所有の勝利にもとづく、最初の家族形態であった。家族内での夫の支配と、彼の子であることに疑いがなくて、彼の富の相続者に定められている子を生ませること——これだけが、ギリシヤ人があからさまに公言した一夫一婦制の唯一の目的であった。」

「歴史に現われる最初の階級対立は、一夫一婦制における男女の敵対関係の発展と合致し、また最初の階級抑圧は、男性による女性の抑圧と合致する。」

「一夫一婦制は一つの偉大な歴史的進歩であったが、しかしそれは同時に、奴隷制および私的な富とならんで、かの今日までもつづく時期を、すなわち、ここではあらゆる進歩が同時に相対的な退歩であり、一方の幸福と発展が他方の苦痛と排撃によって達成される時期を、開くのである。それは文明社会の細胞形態であつて、われわれはすでにここに、文明社会で十全に展開する対立と矛盾の本性を研究することができるのである。」

「財産の差が生じるにつれて、したがつてすでに未開の上位段階で、賃労働が奴隷労働とならんで散発的に現われ、そして同時に、その必然的な相関物として自由人の女子の職業的な売春が、奴隷の強制された肉體提供とならんで現われる。このように集団婚が文明に残した遺産は二面的なものであるが、それは、文明が生み出したものがすべて二面的であり、二枚舌であり、自己分裂的であり、対立的であるのと同様である。」

★アジアの共同体

エンゲルスの分析は、家族につづいて、次のようになっている。

このA—12図とA—1図を比較すると、次の事があきらかになる。エンゲルスの分析は、アメリカとヨーロッパにかざられており、オセアニア、アフリカ、アジアが欠落しているという事である。オセアニア、アフリカは、アメリカのインディアン分析でもつて類推しうるし、アジアは、ヨーロ

ッパの文明にいたる分析で代用しうるとしても、それは、大ざっぱな論理としてであつて、歴史としては、やはり不十分である。この不充分性は、共産主義者の分析で補足され発展させられなければならない。

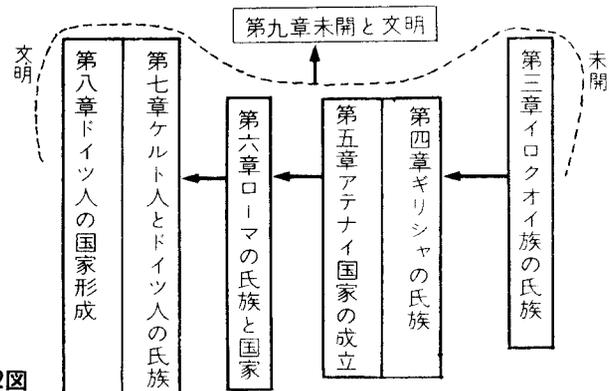
その場合、特に注意すべき点として、⊕と⊙の二つをあげうる。⊕とは、インカ帝国に代表される、未開の下位としてのアメリカ・インディアンアイロクオイ族なんかを越えて進んだ社会の分析のことである。(A—1図参照)

又、⊙とは、中国や、日本のように、ヨーロッパ、アメリカの資本主義が押しよせてきた時に、自生的に、封建社会にまで発展していったところである。(A—1図参照)

インカ帝国は、アジアの共同体といわれる、いわゆる総体的奴隷制(der allgemeinen Sklaverei)であると言われる。↓マルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』

古代国家は、なによりもまず奴隷を抑圧するための奴隷所有者の国家であつた。アテナイ国家は、そのような国家であり、氏族制度は解体されてきた。ところが氏族制度が解体しないで、一つの氏族が、他の氏族を総体的に隷属させ、その氏族の内部では、それぞれ共産主義的にやっている、といった、氏族社会から、古代国家形成の中間形態がある。インカ帝国は、そういったものであつた。

「アメリカ・インディアンは大多数は、部族への統合以上には進まなかつた。人数が多くなると、広大な境界地帯によつてたがいに区分され、不断の戦争によつて衰微した諸部族では、部族が少数の人



A-12図

間で膨大な領域を占拠していた。近縁の諸部族の連合体は、あちこちで一時的な窮状から形成されたが、この窮状がなくなるとともに崩壊した。しかし個々の地方では、もともと近縁の諸部族が、分裂状態からふたたび永続的な連合体へと結束し、こうして民族の形成への第一歩をふみだしていた。合衆国では、このような連合体のことも発展した形態はイロクオイ族にみられる。彼らはミシシッピ河西部の居住地では、おそらく大ダコタ族の一分枝をなしていたらしいが、そこから出発して長い放浪のすえ、今日のニューヨーク州に、セネカ族・カユイガ族・オノンダガ族・オネーダ族・モトーホーク族の五部族に分かれて定着した。彼らは魚や野獣や粗放な園圃栽培によつて生活し、たいていは柵で守られた村落に住んでいた。彼らは、人員二万人をこえたことはなく、五部族のすべてに共通ないくつかの氏族をもち、同一言語の近似した方言を話し、いまやまたまった領域を占拠して、これを五部族のあいだで分割していた。この領域は新たに征服したものであるから、駆逐されたものに対抗してこれらの部族が慣習的に結束したことはとうぜんであり、この結果は、おそくとも十五世紀の初頭には正式の『恒久的連合体』に、一つの盟約的団体に発展した。そしてこの団体はまた、たちまち自

分たちの新しい強さを意識して攻撃的な性格を帯び、その勢力の絶頂期である一六七五年ごろには、周囲の広大な地帯を征服して、その住民を一部は駆逐し、一部は貢納義務者にしていった。イロクオイ族連合体は、インディアンが未開の下位段階をこえなかつたかぎりでもしたがって、メキシコ人、ユイ・メキシコ人、ペルー人を除く、彼らの到達したもつとも進んだ社会的組織を示している。』(『起源』)

「貢納義務者にしていった」というのは、すでに、次の段階、即ち、アジア的共同体を示すものではないのか？それに、未開の中位段階にあつたメキシコ、ペルー等との比較は？インカの分析は必要である。

ところで、日本の邪馬台国はどうなのであろうか？井上光貞は、『日本国家の起源』で、奴国連合とか、邪馬台連合というように、連合という言葉をつかっているが、この連合とは、エンゲルスの『起源』におけるイロクオイ族連合体と同じようなものとして使っているのか、それとも違うのか？

日本で、階級社会の発展を述べる場合、普通農耕、この場合水稻をあげるが、この稲作は、エンゲルスが、アーリア人について語つたように説明されるのだろうか？「東では、未開の中位段階は乳用や肉用の動物の馴致をもってはじまったが、植物栽培は、ここではこの時期の末期になるまでなお未知のままだったらしい。家畜の馴致・飼育とかなり大きな家畜群の形成が、アーリア人とセム人を他の多くの未開人から分離させる機縁となつたようである。ヨーロッパのアーリア人とアジアのアーリア人とは、家畜の名称はなお共通であるが、栽培植物の名称は共通性をほとんど失つた。たたくもたない。」

「ここでは穀物耕作が、まず家畜のための飼料の必要からおこり、のちになってはじめて人間の食料として重要になったということは、ほぼまちがいないところである。」(起源)

麦に関しては、そうだろう。だが、水稲も、家畜のための飼料の必要からおこったのか、それとも、稲作自身、遊牧民族とは別個に起ったのか？だとすれば、遊牧民族のような移動性のはげしい、それ故に、氏族がいつまでも中立林の中で定住しておるような社会とあい入れないようなものと、稲作のように、土地に結びつく度合いの強い民族とでは、私有財産の発生、階級社会の成熟ということ自体は、変らないとしても、それが、氏族社会をこわして行く過程は違ってくるとしても、当然ではないだろうか？

ところで、日本の古代文化には、ツングース系騎馬民族的文化(ツングース↓高句麗↓馬韓五十四部族連合の百済の王室(天余族)↓辰韓・弁辰)といった方面の文化と、それよりはずっと昔になるが、弥生式文化時代(BC3C)の南方系稲作文化が混合しているのだが、日本でのあと先と、その発生と伝播の中心、中国大陸→朝鮮半島においては、どうだったのかわからないし、それも、奴国連合、邪馬台連合のころだと、中国→朝鮮でどんな形で、牧畜文化と農耕文化が発生、又は、伝播したのかわからない。

それは、ともかくとして、このころ、「夫れ楽浪海中、倭人あり、分れて百余国となる。歳時を以て来り献見すと云ふ」(漢書の地理志)のように、部族的集団が分立していたことはまちがいない。

「永初元年(一〇七年)、倭国王帥升等生口百六十人を献じ、請兒を願ふ」(東夷伝の倭の条)のように、生口⇋奴隷を中国へ送っているように、隷属しているのであるが、日本内部では、百余国が、

別々に中国へ隷属しているのではなく、百余国自身は、邪馬台国連合として統一されている。「其の国王、皆女王に属するなり」(魏略の逸文)がそれをよく示している。

その形態は、次の図で、若干を知りうる。(A-13図)

不弥、奴、老岐、对馬国の副官の名が全部ヒナモリで一致しているのは、邪馬台国の派遣官ではないのかという推測がなりたつ。ヒナモリとは、大和朝廷以後は、夷守(ヒナモリ)として、エゾなどに備えて、派遣された。大官の名が皆別々なのは、どの国も邪馬台国に属しながらも、主権は皆、みとめられ、隷属関係は副官以下にあらわれた。これは、アジア的共同体の総体的奴隷制ではないだろうか？

井上が連合といっているが、邪馬台国が、イロクオイ族連合とは違う。それは、たんなる貢納義務があつた社会よりも、階級対立が発展している事は、大陸へ生口を送るという、奴隷が存在する社会であることにあらわれている。「尊卑各々差序あり、相臣服するに足る。租賦を収むるに邸閣あり、国々に市ありて、有無を交易し、大倭をしてこれを監せしむ」といったように、租税制度があり、交易の統制が行なわれているのは、すでに古代国家への一歩でさえあるからである。こんな社会でありながら、「其の国、本亦、男子を以て王と為し、住まること七、八十年、倭国乱れ、相故伐すること歴年、乃与共に一女子を立て、王と為す、名づけて卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑わす」(三国志の倭人伝)などという、女性支配が登場したりする。

このような、社会を、氏族や婚姻、家族の構造から説明しきめることは、日本史では不可能なのか？どこかに、そのへんりんはないか？神話の分析。

インド氏族社会の分析の変化が即自的なものにとどまっていたが故に、古い氏族社会という世界がこれによって持たれていたという法を守ることは、無力であり、にもかかわらず、氏族社会の共産的内容は人の心をとらえるが故に、ずっと残ることとなった。しかし、それは、社会総体との関係を失なった。個人間の精神界での凡夫↓仏陀への向上の問題として、即ち、対象変革抜きでの自己変革として、即ち、人間革命の単独歩行であるが故に、無理であり、釈迦の教えは、死んだものへ転化する。この死を生へ転化するものは、氏族社会の否定の否定、即ち、否定（文明の私有財産の社会）の否定（共産主義）としての、共産主義⇨交通形態そのものの生産という目的意識的活動によって、即自性としての、私有財産制の否定として社会の交通形態を維持しようとする布施とか、私有財産制と共に、戦争が略奪を目的として行なわれることの否定として社会の交通形態を維持しようとする不殺生、不偷盗などを、再編成しなおすことである。

日本の仏教、浄土宗などの「南無阿弥陀仏」とは、南無(namas)⇨礼拝、阿弥陀(amita)⇨あまた⇨多いこと⇨無量、仏(Buddha)⇨覚者の意で、多くのえらい人（智慧のある人の意ではない。さつた人のこと）におじぎをする、すなわち、多くのえらい人を尊敬するということである。これは、中国社会なら、共産黨員、解放軍兵士等を、尊敬するということである。そうすれば、世は持たれる。（法⇨それによって世界が持たれる⇨こういう交通形態で社会をまとめる）

日蓮宗の「南無妙法蓮華経」は、南無(namas)⇨という梵語と妙法蓮華経⇨という日本語の折衷であり、南無阿弥陀仏のマネごとだが、たえなる法である蓮華経におじぎをすることであり、『資本論』はええぞ、ええぞ、と言うのと同じことであり、それ以上の深い意味があるわけではない。法華経は

ええぞ、ええぞと唱えておれば、だれかがそのうち、そんなにええもんなら一回読んで見よう、というようになるやつが出てきて、読んで理解すれば、その人がそれを広めてくれるので、こうして世は持たれるというのである。

ところで、先日、公明党の竹入委員長へのテロがあつたが、テロツタやつも日蓮宗と言っている。日蓮宗は、こういうのを生み出す根拠を持っている。それは、『立正安国論』や『守護国家論』など、日蓮の国家論の中にあらわれている。日蓮は、階級的な敵対矛盾と人民内部の矛盾の区別をつけず、世の乱れの悪の根源は真の法である法華経を教え、謗法（真の法でない法）である浄土教を教えている法然であり、この法然をやっつけなければならぬと言っている。そのためには、鎌倉幕府、守護、地頭といった封建領主と結びついて、法然の墓あらしがあつた時など、それをほこらしげに述べている。こんな観点からは、人民内部の矛盾を正しく解決出来ようはずはなく、戦前の血盟団のようなテロリストが、同じ日蓮宗云々と言っている者の中で互に殺し合うようなものが出ることを正しく解決出来ない。

彼らは、日本国憲法みたいな法は、資本制生産様式にがっちり一致しているので、イデオロギーだとは思わないので謗法だとは思わない。共産主義みたいなのを謗法と思ひ、謗法対治のために武力を行使することも十分ありうる。敵対矛盾と人民内部の矛盾のみさかいかつかないからである。こういう人々を共産主義者が正しく導びくためにも、インドの氏族社会分析はされねばならない。

アジアで、もう一つは、中国である。均田制が長く続く（日本でもそうだった）など、共産主義的な

ものが長く続いて、氏族の分解がヨーロッパのようにドラステックでなかったことの根拠、etc.

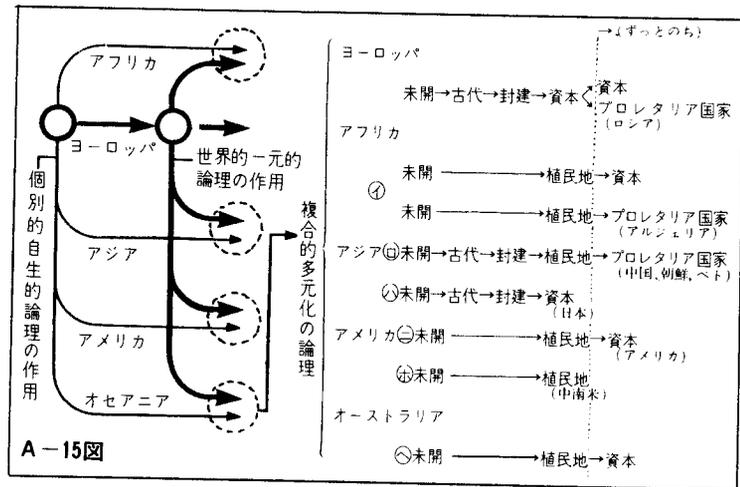
2 地理上の発見の時代と国家

世界は、ヨーロッパによる地理上の発見によって、変ってしまった。ヨーロッパ以外の所では、これ以後、自生的な歴史の発展はなく、すべて、資本主義の洗礼を受け、何らかの影響をうけてしまう。これ以後の歴史は、世界的普遍性としての資本主義の論理と、同時に、それまで自生的に発展していた社会という特殊性のからみあいとしての、一方で資本主義という一元的なものと、他方で今まで多極的だったものがそれとぶつかる中で生じた多元的なものとして、複合的に把握されなければならない。(A-15図)

★地に呪われた者

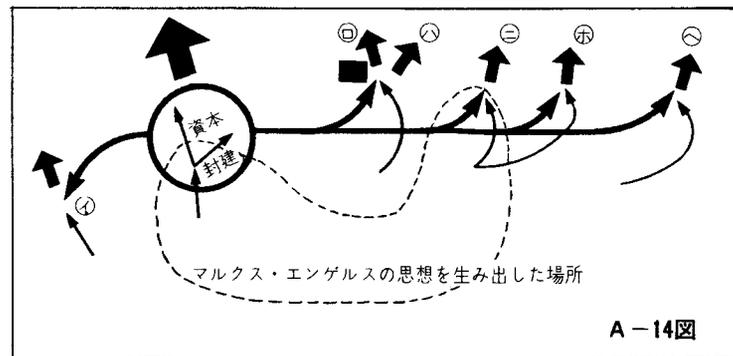
A-14図の①にあたる所である。アルジェリア解放戦士のフランツ・ファノンは、その著『地に呪われた者』で次のように言っている。

「植民地において、経済的・下部構造はまた上部構造でもある。原因は結果である。つまり白人であるが故に富み、富んでいるが故に白人なのだ。だからして、植民地問題に向かうたびごとに、マルクス主義的分析は常にいくぶんか拡張されねばならない。マルクスが精密に検討した資本主義以前の社



彼は、エンゲルスをも、こっぴどく批判している。

「彼らは、デューリング氏のかの山のような小児性に対する有名な論争において、エンゲルスの採用した小児的立場にとどまってしまったのだ。『もしロビンソンが剣を手に入れたのなら、まったく同様にフライデーがある朝、装填されたピストルを手にして現われると想定しても差支えないわけだ。そのとき「暴力」のいつさの關係は逆転するだろう。フライデーが命令を下し、ロビンソンは骨を折って働かねばならなくなる…。つまりピストルは剣を打負かすわけだが、公理のお好きなどんな子供っぽい方も、暴力が単なる意志の行為ではなくて、暴力を働かせるためのきわめて現実的な前提条件、とりわけ道具が必要であり、完全な道具は不完全な道具に勝を収めるということ、またこの道具が生産されねばならぬということを理解されるだろう。それはまた、より完全な暴力の道具——平たく言えば武器——の生産者は、不完全な暴力の道具の生産者にまさること、またひと口に言えば、暴力の勝利は武器の生産に、武器の生産



会の概念に至るまでが、ここでは再考される必要があるだろう。農奴は騎士と異なった種類に属するが、この身分の相違を正当化するためにには神権に頼ることが必要だ。ところが植民地においては、別のところからやってきた外国人が、大砲と機械の助けをかりて割りこんで来てしまったのだ。たとえ原住民を飼いならすことに成功しようとも、土地や人を私有化したといつても、コロンはやはり異邦人でありつづける。『支配階級』をまず特徴づけるのは、工場でも所有地でも銀行預金でもない。支配種族とは、何よりもまず他所からきた種族、土着民と似てもつかぬ種族、『他者』である。『地に呪われた者』

マルクス・エンゲルスの思想を生み出した場所であり、その場所を論理化の構成素材としたもの、それを、それ以外の場所へ適用しえない面について、鋭くフランツ・ファノン指摘している。アフリカの場所からでも、過程的な意味では、マルクス・エンゲルスの思想は正しいので、多に学ばれているが、それはやはりヨーロッパの歴史Ⅱ世界史という、論理的なものが通用する範囲においてであり、それ以外の歴史的、地理的、場所的な面では、共産主義者の創造性がないかぎり、だめなのである。

はこれまた生産一般に、したがって：「経済力」に、経済状態に、暴力が自由に使用し得る物質的手段に依存しているということの意味するのである。』じつさい改良主義的指導者たちも別なことを言っているわけではない。『いったい何を用いてコロシと闘うのか。短刀か。猟銃か。』（『地に呪われたる者』）

アフリカは、資本主義の影響を受けてさえ、一九六〇年代まで、いわゆる国家はほとんどなかった。一九六〇年代、バカバカ、国家が植民地独立として生まれてくる。この国家は、かつての古代国家の発生とは全く違っている。

植民地時代、「みずからを武装力として組織した住民とは、直接には一致しない」武装力があつたが、この武装力、植民地「公権力」とでもよぶべきものがあつたとしても、それを国家と言うわけにはいくまい。

「国家は、けつして外部から社会におしつけられた権力ではない。」「むしろそれは、一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が、解決できない自己矛盾にまきこまれて、…略：そして、社会からでてきながらも、社会の上に立ち、社会からますます疎外してゆくこの権力が、国家なのである。』（『起源』）といつても、植民地では、先ず、権力が外部から社会におしつけられた。そして、国家は、そのあと生まれてくる。

★攘夷

A—14図の①にあたるところである。アフリカ、アメリカ、オセアニア等々が、植民地となつたのに対して、日本は植民地にはならなかつた。アメリカでは、アメリカ・インディアンは滅ぼされ、現在のアメリカの資本主義はアメリカ・インディアンの自生的なものとしてではなく、他生的に発展したものである。日本では、日本人は滅ぼされ、他者が資本主義社会を持ち込んで今日に至つたものではなかつた。未開のインディオは滅ぼされたが、封建の日本は、攘夷—明治維新によって、資本主義の道を進む。封建の中国は、植民地になつた。アメリカでさえ、イギリスの植民地だったのであり、植民地からの独立戦争をやっているわけだが、とにかく、ヨーロッパを除いて、植民地になることなく、しかしヨーロッパの影響はうけて（もちろん、この時は、独立後のアメリカもふくめてだが）、資本主義の道を進むことになつたのは、日本だけである。

ところで、明治維新について若干の総括をしておかなければならないのは、現在の日本の革命の性格を民族民主主義革命と規定するどうしようもない連中がいるからである。

尊皇攘夷とは、欧米の圧力の中の近代的ブルジョアの民族としての確立の基礎であつた。維新の変革、とくに版籍奉還・廃藩置県・地租改正・秩禄処分などによって、封建的土地領有制が廃止され、資本主義的発展の道を大きく切り開いたこと、すなわち、ブルジョア革命の社会経済的課題を明治維新が基本的に達成した。従つて、以後、富国強兵、日清、日露の植民地獲得戦争、一次、二次大戦へと、即ち、帝国主義的民族国家として自己を確立して行く事になつた。

植民地解放の中の民族反帝とは、その内容を異にするということである。ところで、第二次大戦後、日本を米帝が占領して以後は、民族革命の課題が登場したとするものがあるのであるが、この

ような主張のデタラメ性については、(4)の過渡期世界と国家の所で詳述する。

ところで、明治維新は、寄生地主制を残して発展した。そして、その社会的基礎の上に天皇制が君臨した。従って、民主主義革命の課題があったこと、これは否定出来ない。ところで、この民主主義革命の性格は、ブルジョア革命の社会経済的課題が既に行なわれたものであり、従って、ブルジョアジーにとっては、それ以上、あえて革命を發展させて、その左翼として登場するプロレタリア階級の革命勢力への成長を助けてやる必要はなかった。従って、ブルジョアジーがやらない場合にはそれは、基本的には、プロレタリア社会主義革命の課題の部分としての位置を占めるものであった。寄生地主制は、封建的性格を持っているとしても、封建的土地領有制ではなく、フランス革命の場合においてさえ、同様の折半小作制が存在していたのである。ところで、この民主革命の方は、プロレタリア革命の発展の材料に転化しないように、戦後、占領米軍の手によってなされた。

明治維新を封建制の再編成とみなす日本共産党の考えは全くのまちがいである。明治維新は、ブルジョア革命であった。だが、江戸幕府の倒幕と民主主義革命(公議政体論など民主主義の要求であった)が、徹底的に起なわれず、そのアイマイ性があった事は事実である。幕末の階級の基盤の中には、マニユファクチャー段階のブルジョアジー、豪農・地主・商人・郷土・中間層だけでなく、封建領主階級をも含んでいた。維新の変革によって封建領土制が廃止されたので、維新官僚の基盤は領主階級以外でなければならぬというのは図式主義的観念論である。幕末の政治勢力の中で、公武合体派は封建領土階級上層部によって構成されていた。

原口清は『日本近代国家の形成』の中で、次のように語っている。「尊攘派の暴発的エルネギーを峻拒し、彼らを組織できない本来の公武合体派(島津久光・山内容堂ら)は、討幕派(のちの維新政府官僚)に成長できなかった。彼らの自律的な到達点は公議政体論とまりであり、彼らはその路線の破綻ののち、討幕派指導層の指導する討幕戦争に同調・追隨を余儀なくさせられる。戊辰内乱以降明治初年の旧公武合体派大名・華族の政治的態度(とくに島津久光に代表的に示される)は、彼らの限界性を物語っている。尊攘派としての体験をするか、またはその現状打破的エネルギーを吸収し組織しえた公武合体派(西郷隆盛・大久保利通ら)のみが、討幕派に成長出来た。尊攘派も、公武合体派のもつ現実主義と権謀術数性を体得し、攘夷主義を克服しえたものが討幕派に成長した。尊攘主義を固執した下士、草莽大衆には、明治初年の非劇がまつている。」

武士を中心とした封建社会は、公武合体という一つの変化を媒介にして、下部構造で資本主義社会を急激に(まさに急激なものだったが故に日清、日露戦が出来た)發展させながらも、上部では、公武が修正されながらしか変化しなかった。討幕派が、何らかの形で公武合体派と関係せざるをえなかったので、どうしても、民主主義革命は進展せず、それを徹底しようとした自由民権運動は挫折した。

明治維新の性格についてではなく、そこでの近代国家形成について若干見ておこう。

慶応二年(一八六六年)には、列強は、清国なみの半植民地的税率を規定した改税約書を日本に強要し調印させた。このような外的危機と、国内では、支配階級は幕権の急速な衰微と諸藩の割拠的自立化が進化し、危機からの脱出策をめぐる様々な政治勢力が登場し、この政治勢力は、運動の過程で

ような主張のデタラメ性については、(4)の過渡期世界と国家の所で詳述する。

ところで、明治維新は、寄生地主制を残して発展した。そして、その社会的基礎の上に天皇制が君臨した。従って、民主主義革命の課題があったこと、これは否定出来ない。ところで、この民主主義革命の性格は、ブルジョア革命の社会経済的課題が既に行なわれたもとのものであり、従って、ブルジョアジーにとっては、それ以上、あえて革命を進展させて、その左翼として登場するプロレタリア階級の革命勢力への成長を助けてやる必要はなかった。従って、ブルジョアジーがやらない場合にはそれは、基本的には、プロレタリア社会主義革命の課題の部分としての位置を占めるものであった。寄生地主制は、封建的性格を持つていても、封建的土地領有制ではなく、フランス革命の場合においてさえ、同様の折半小作制が存在していたのである。ところで、この民主革命の方は、プロレタリア革命の発展の材料に転化しないように、戦後、占領米軍の手によってなされた。

明治維新を封建制の再編成とみなす日本共産党の考えは全くのまちがいである。明治維新は、ブルジョア革命であった。だが、江戸幕府の倒幕と民主主義革命(公議政体論など民主主義の要求であった)が、徹底的に起なわれず、そのアイマイ性があった事は事実である。幕末の階級的基盤の中には、マニユファクチャー段階のブルジョアジー、豪農・地主・商人・郷土・中間層だけでなく、封建領主階級をも含んでいた。維新の変革によって封建領主制が廃止されたので、維新官僚の基盤は領主階級以外でなければならぬというのは図式主義的観念論である。幕末の政治勢力の中で、公武合体派は封建領主階級上層部によって構成されていた。

原田清は『日本近代国家の形成』の中で、次のように語っている。「尊攘派の暴発的エネルギーを

峻拒し、彼らを組織できない本来の公武合体派(島津久光・山内容堂ら)は、討幕派(のちの維新政府官僚)に成長できなかった。彼らの自律的な到達点は公議政体論とまりであり、彼らはその路線の破綻ののち、討幕派指導層の指導する討幕戦争に同調・追隨を余儀なくさせられる。戊辰内乱以降明治初年の旧公武合体派大名・華族の政治的態度(とくに島津久光に代表的に示される)は、彼らの限界性を物語っている。尊攘派としての体験をするか、またはその現状打破的エネルギーを吸収し組織しえた公武合体派(西郷隆盛・大久保利通ら)のみが、討幕派に成長出来た。尊攘派も、公武合体派のもつ現実主義と権謀術数性を体得し、攘夷主義を克服しえたものが討幕派に成長した。尊攘主義を固執した下士、草莽大衆には、明治初年の非劇がまつている。」

武士を中心とした封建社会は、公武合体という一つの変化を媒介にして、下部構造で資本主義社会を急激に(まさに急激なものだったが故に日清、日露戦が出来た)発展させながらも、上部では、公武が修正されながらしか変化しなかった。討幕派が、何らかの形で公武合体派と関係せざるをえなかったもので、どうしても、民主主義革命は進展せず、それを徹底しようとした自由民権運動は挫折した。

明治維新の性格についてではなく、そこでの近代国家形成について若干見ておこう。

慶応二年(一八六六年)には、列強は、清国なみの半植民地的税率を規定した改税約書を日本に強要し調印させた。このような外的危機と、国内では、支配階級は幕権の急速な衰微と諸藩の割拠的自立化が進化し、危機からの脱出策をめぐる様々な政治勢力が登場し、この政治勢力は、運動の過程で

自己の思想を変えながら発展させ、とりわけ公武合体、尊攘運動は、運動の実践の中で幕府否認の思想と新権力構想を現実政治の関連の中から生み出し、諸階級、諸階層が、幕藩制の統一的側面的分裂的側面への転化と共に、平和的形態としての矛盾解決（公武合体は暴力的形態へ転化し、討幕の勢力として、私的利益を追求して抗争していた。封建領主階級の大部分、三井、小野、島田など特権大商人、草奔隊（北越草奔諸隊、遠州報国隊、酸州赤心隊、赤報隊（相楽総三ら）、九州草奔隊、甲信地方草奔隊）、それに特に関東にはげしかった広範な人民の一揆・打ちこわし、こういった諸階級諸階層が、内乱の階級関係を構成していた。

領主階級上層部は危機の脱出策を考える。大動乱を回避するために、土佐藩の大政奉還運動が公議政体論をひっさげて登場する。そして、慶応三年（一八六七年）の政局は、徳川慶喜とその側近、佐幕主義者、討幕派、公議政体派、尊攘派下士、草奔層の、抗争・提携と政治的駆引きが複雑な形をとってくりひろげられる。そして、大政奉還と王政復古がなされるのであるが、維新政府を決定的に討幕派ヘゲモニーへ移したのは、薩・長軍を主力とする軍隊であった。藩体制に封建性国家を解体し、近代国家を形成して行く中心になったのが、この軍隊であった。

「慶応四（一八六八）年正月三日、鳥羽伏見の戦いが勃発し、薩長軍を主力とする新政府軍が勝利した。これは、局面を決定的に転換させた。政府内の公議政体派の優位はたちまち顛倒し、討幕派が指導権をにぎった。」二月になって、東征軍を総括する大総督府が設けられ、各道総督府をつうじて諸藩軍隊および草奔隊をその指揮下におく統一的軍事組織が樹立された。「全国統一事業を遂行するうえで最大の役割を果たした。東征軍はまた、人民に対して数百年の伝統的な旧政治権力の崩壊と、新

時代の到来をつげる最大の宣伝者の役割をはたした。」三月一四日の五ヶ条誓文は、以上のように、鳥羽伏見の戦闘以来急速に変貌してきた天皇政府の成立を宣言し、将来の基本方針を明らかにした歴史的文書であった。（『日本近代国家の形成』）そして、四月十一日江戸城の無血開城と発展した討幕の中心は、薩長を中心とする軍隊であった。この軍隊は、軍事と権力構想を持った軍であった。この軍を中心とし、成立した政府の社会的支柱となったのは、三井、小野、島田など特権大商人と、封建領主階級の大部分であった。

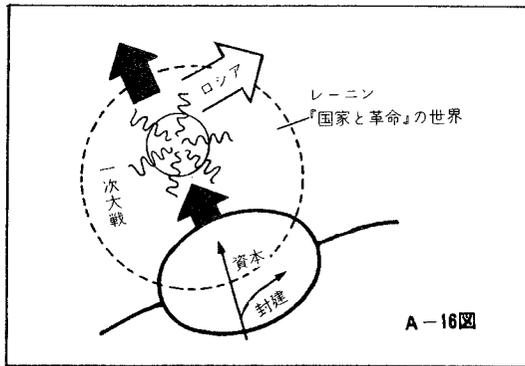
明治維新の過程で、同じく、軍隊は組織しながらも、権力構想のなかった草奔隊はこの政府軍によって圧殺されるのである。彼らは、「御一新」に世直しに年貢半減という、社会革命を押し進める事に関心がありつつ、農民運動と結びついたのだが、政治に権力問題で全く無知、無策だったので、西郷や大久保、岩倉らに利用されたあとは抹殺された。維新左派には、独自の理論も、独自の思想もなく、この左派の運動（草奔隊と一揆・打ちこわし）は、組織的に蓄積され、後々まで継統されることはなかった。自由民権運動左派の関東一円での蜂起、（秩父蜂起）もそうだった。日本には、左翼運動が、武装闘争を権力問題として思想的にがちり武装して闘った歴史は、赤軍の誕生まで一回もない。武装闘争が武装闘争としてしか闘われないとき、それは左翼反対派の自然発生性でしかない。この草奔隊の悲劇の教訓は、しっかりと把握されねばならない。

★アメリカ

中国、インド等々では、原住民がヨーロッパの支配を受けた。だが、新大陸では原住民がヨーロッパ

パの支配を受けたのではない。未開の原住民は滅ぼされ、移民してきたイギリス人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人等々が、ヨーロッパの支配を受けたのである。アジアのように滅ぼされなかった原住民が、植民地支配からの解放を勝ち取るうとする運動よりも、アメリカ、ラテン・アメリカ、オセアニア等での植民地からの独立運動（アメリカ合衆国の独立戦争など）の方が速く成長し、急速に資本主義を発展させた。アメリカ、スペイン戦争でのアメリカの勝利によって、ラテン・アメリカの方は若干事情を異にする。ラテン・アメリカは、以後、アメリカ合衆国の植民地へ転化する。ラテン・アメリカは、ヨーロッパ本国から独立し、独立国家を形成しつつも、アメリカ合衆国の支配（プエルトリコ、ハイチ、キューバのグアンタナモ基地など…）の下で、急速な資本主義工業国への成長はしなかった。

3 帝国主義戦争——国家と革命



ヨーロッパの帝国主義は、世界の獲物をめぐる強盗分割戦争を第一次大戦として開始した。

これに対して、プロレタリアートは反戦闘争の国際主義で対決し、一九一七年ロシアにおいては革命が勃発した。二月蜂起でツアーを打倒したのである。だが、プロレタリア人民は権力を取るうとはせず、臨時政府に対して、ソヴィエトは単に監視する位置にとどまっていた。

レーニンは、四月テーゼで、まず、「革命的祖国擁護反対の立場」という、プロレタリアートの立場を示した。右翼エス・エルや、メキシコは、ツアーを打倒して革命をやったのだから、今や祖国を守るためにドイツとの戦争を行ない革命的に祖国を擁護すべきであると主張した。（チエルノフやケレンスキー）ケレンスキーに至っては、自ら六月攻勢として対独戦の先頭に立つのである。ツアー

を打倒していても、まだ、プロレタリア国家へとロシアが変ったわけではない。人民は、「革命の第二段階」に対して無自覚であり、ソヴィエトという新しい国家を生みだしているのに無自覚なので、「全権力をソヴィエトへ」と主張した。臨時政府を打倒し、ソヴィエトが独裁すべきなのである。レーニンはこのことをはっきりさせるために、十月革命の前に、「国家と革命」を書いた。

この『国家と革命』は、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の最後、「未開と文明」の引用をもつてはじめ、一八四八―一八五一年のヨーロッパの革命や、一八七一年のパリ・コミューンの総括などのマルクス・エンゲルスの国家に関する学説を整理し、一言で言えば、ブルジョアジーの独裁国家を暴力でもって粉砕し打ちくだき、プロレタリアートの独裁を実現しなければならぬ、と言うことを詳しく述べたものである。

レーニンが何を述べたかは、その目次を見ればわかる。それは、次のごとくである。

第一章 階級社会と国家

- 一 階級対立の非和解性の産物としての国家
 - 二 武装した人間の特殊な部隊、監獄その他
 - 三 被抑圧階級を搾取する道具としての国家
 - 四 国家の「死滅」と暴力革命
- 第二章 国家と革命。一八四八―一八五一年の経験
- 一 革命の前夜
 - 二 革命の総括

エンゲルス『起源』の第九章「未開と文明」そのまま。

プロレタリア革命は、国家権力に対して、破壊力をこごとく集中し、国家機構をうちく

三 一八五二年におけるマルクスの問題提起―だかねばならないと言っている。

第三章 国家と革命。一八七一年のパリ・コミューンの経験、マルクスの分析

- 一 コミュニオン戦士の試みた英雄主義はどこにあるのか？
 - 二 粉砕された国家機構を何によっておきかえるか？
 - 三 議会制度の揚棄
 - 四 国民の統一の組織
 - 五 寄生体―国家―の揚棄
- 第四章 つづき。エンゲルスの補足的な説明
- 一 『住宅問題』
 - 二 無政府主義者との論争
 - 三 ベーベルあての手紙
 - 四 エルフルト綱領草案の批判
 - 五 マルクス『フランスの内乱』への一八九一年の序言
 - 六 民主主義の克服についてのエンゲルスの見解

プロレタリアート独裁の意味を、コミューンの経験を持って説明している。

日和見主義者が、マルクス・エンゲルスの国家論をいかにデタラメに理解しているかを示し、その批判にあてられている。「自由な人民国家」なんてありつこないこと、国家とは、そもそも階級抑圧の道具で、非自由だ、というもの。

第五章 国家死滅の経済的基礎

- 一 マルクスの問題提起
- 二 資本主義から共産主義への移行
- 三 共産主義段階の第一段階

マルクスの『ゴータ綱領批判』を、そのまま整理したもの。この章全体は、我々の手によって、過渡期世界における国家論として発展させねばならないものとしてある。

四 共産主義社会の高度の段階

第六章 日和見主義者によるマルクス主義の卑俗化

- 一 プレハノフの無政府主義者との論争
- 二 カウツキーの日和見主義者との論争
- 三 カウツキーのパンネックとの論争

（第七章 一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験）……………この章は書かれなかった。

マルクス・レーニン主義の国家論といえば、エンゲルスの『起源』とレーニンの『国家と革命』の二つが先ずあげられる。ところで、レーニンが、エンゲルスの『起源』の最後（正確には第九章だが。そのあとの付録——新たに発見された集団婚の一例は、付録なので、最後と言っている）の章の「未開と文明」から書き出したのだが、我々も、レーニンの第五章「国家死滅の経済的基礎」の章から書きはじめて、マルクス・レーニン主義を發展させなければならぬ。それは、レーニンの要求でもある。この要求に答えてちゃんと過渡期世界の国家論を書いたものは、それ以後、今日までだれもないのである。それに挑戦するのが、じつは、この『英雄兵士の物語（メモ）』なのである。

レーニンが、こゝからは、後のやつにまかす、と言っているところから、先ず、明らかにしておこう。

第二章「国家と革命。一八四八—一八五一年の経験」の「二、革命の総括」で、レーニンは、マルクスの限界点について、次のような指摘の仕方をしている。

「『共産党宣言』では、歴史の総決算がなされているが、この総決算は、国家を階級支配の機関と見なさせ、つぎのような必然的結論——すなわち、プロレタリアートは、まずはじめに政治的権力をたたかいたり、政治的支配を獲得し、国家を『支配階級として組織されたプロレタリアート』に転化することなしには、ブルジョアジーを打倒することはできない、そして、このプロレタリア国家は、その勝利ののちただちに死滅しはじめるであろう。なぜなら、階級対立のない社会では国家は不必要であり、また不可能であるから、という必然的結論に到達させる。ここでは、プロレタリア国家のブルジョア国家とのこの交替が——歴史的發展の見地から見て——いったいどういふふうにおこなわれるべきであるか、という問題は提起されていない。」

「論理的な考察ではなくて、事態の現実的な發展、一八四八—一八五一年の生きた経験が、このよきな任務を提起させたのである。マルクスがどれほど嚴格に歴史的経験という事実的基礎に立脚しているかは、一八五二年には彼が、この絶滅されるべき国家機構を何によっておきかえるかという問題を、まだ具体的に提起していない点からもうかがわれる。当時はまだ、経験はこのような問題を提起するための材料をあたえていなかったのである。歴史がこのような問題を日程にのぼらせたのは、それよりのちの一八七一年であった。一八五二年に自然史的觀察の精密さをもって確認しえたのは、ただ、プロレタリア革命が、国家権力にたいして、『破壊力をことごとく集中する』任務、国家機構を『うちくたく』任務に近づいたということにすぎなかった。」

我々も、レーニンの第五章に対して、そっくりそのまま、このように指摘することが出来る。レーニンは、（マルクスやエンゲルスも）国家死滅ということを論理的考察として行なっているが、「歴

史的発展の見地から見て——いったいどういふふうにおこなわれるべきであるか、という問題は提起されていない。『論理的な考察ではなくて、事態の現実的な発展』、即ち、レーニン死後、今日までの「厳格に歴史的经验という事実的基礎に立脚」して、問題を、「具体的に提起」しなければならない。これは、我々に残された課題である。

レーニン自身も、第五章の「四、共産主義社会の高度の段階」で、そのことを次のように述べている。「国家死滅の期日やその具体的形態の問題は、まったく未解決のままにのこしておいてさしかえない。なぜなら、このような問題を解決するための材料がないからである」と。

プロレタリアート独裁の国家について、「ただちに死滅しはじめ、しかも死滅せざるをえないように構成された国家」といつているが、レーニンにとっては、プロレタリアート独裁国家については、考察すべき「材料」がなかったが、我々には、ソ連、東欧、中国、朝鮮、ベトナム、キューバ、等々、「材料」がある。我々は、この「厳格に歴史的经验という事実的基礎に立脚」して、歴史的には、「国家は死滅過程にはない」と結論づける事が出来る。では、国家はいかなる歴史過程にあるのか。ブルジョア国家はプロレタリア国家にとってかわらねばならず、既にあるプロレタリア国家は、ブルジョア国家に対抗し、それ故、ブルジョア国家が国際反革命同盟という国際性を持って対決してくる事の中で、死滅ではなく、世界プロレタリアート独裁国家へと成長しなければならないものとしてある。そういう歴史的過程にあるのである。

滝村隆一などが『マルクス主義国家論』と題して、「〈共同体—即—国家〉生成が〈共同体—内—国家〉生成に先行する」から、国家死滅は「〈共同体—内—国家〉↓〈共同体—即—国家〉」となる、

などと言っているが、こんなのは、全々デタラメである。今、国家死滅などと言うのは、日租界主義以外の何物でもない。国家は今、建設の過程、即ち、世界プロレタリアート独裁国家≠世界社会主義共相国への建国過程にあるのである。

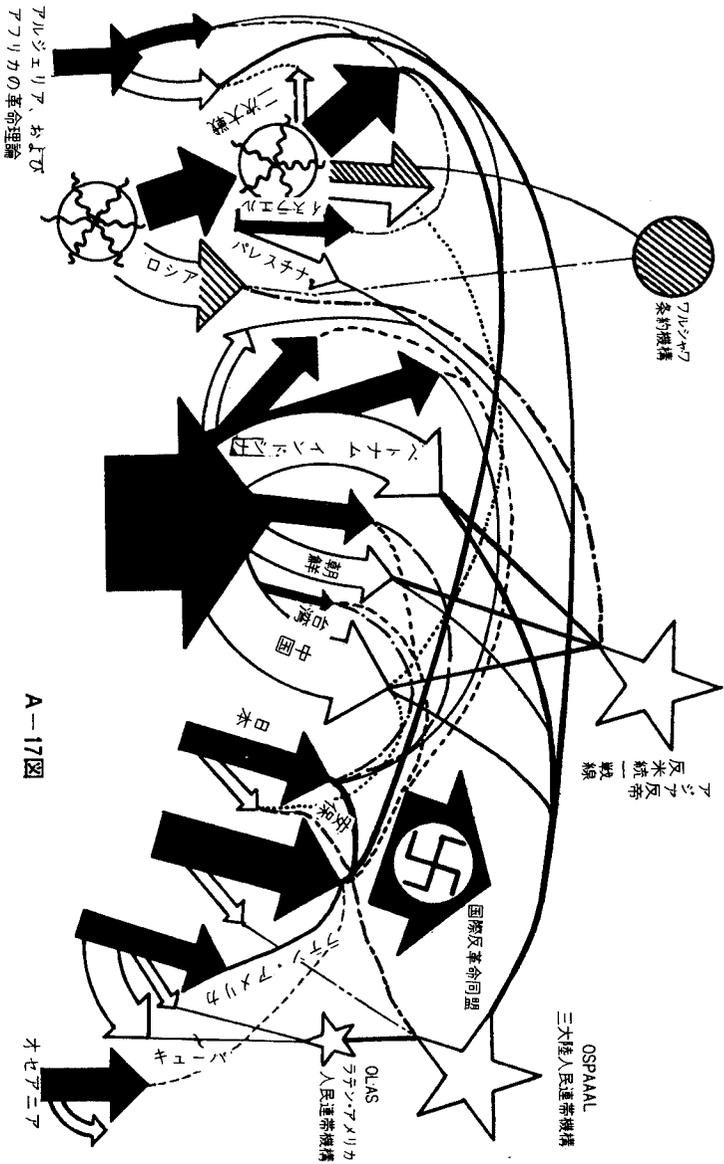
このように、レーニンも言わなかったような事を言うのは、レーニン主義の修正ではないのか、そもそも、マルクス・レーニン主義とは科学的共産主義の理論であって、普遍的真理であって、レーニンが国家死滅と言っているのに、国家建設などというのは、この真理をまげるけしからんものである、と考える諸君がいるだろう。そういう諸君には、マルクスが『共産党宣言』で、「精神的生産は物質的生産と共に変化する」という唯物弁証法の命題を提起し、マルクスが一八四八—一八五一年には、まだはつきりとした精神的生産としてプロレタリアート独裁を生産していなかったのに、一八七一年のバリ、コミューンの物質的生産によって、プロレタリアート独裁という精神的生産をしたということ、(上記のレーニンの引用した所が、このことを示しているところ)を示す。マルクス・レーニン主義という精神的生産は、過渡期世界という物質的生産と共に変化させられねばならないのだ。このような方法で、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させようとせず、聖典のごとくにマツリアゲルのは、マルクス・レーニン主義を歪曲し、俗物に転落せしめるもの以外の何物でもない。

これがレーニン以後の「事態の現実的な発展」である。(A-17図)。レーニン死後、マルクス・レーニン主義の国家論を、論として発展させたものは、ほとんどない。だが、実践は、はるかに発展している。論としてみた場合、又、実践との関係で、大きな意味を持つのは、毛沢東である。

「鉄砲から権力が生まれる。」——これは、レーニンの暴力革命とプロレタリアート独裁について、別の言葉で言いかえたにすぎない。

「人民の軍隊がなければ人民のすべてではない。」——これは、たしかに過渡期世界の国家論として、レーニンの国家論よりも一歩進んでいる。レーニンは、プロレタリアート独裁について、四月テーゼでは、「全権力をソヴィエトへ」でしかなかった。プロレタリアート独裁という事の内容と本質を、より鋭く提起したもののこそ、「人民の軍隊がなければ人民のすべてではない」である。現代過渡期世界の主人公達は、人民の軍隊＝無名の兵士達である。ベトナム、アフリカ、パレスチナ、ラテン・アメリカ、全世界中、どこを見わたしても、現代の英雄は、革命兵士である。

ところで、それを、我々は、「現代は帝国主義が全面的崩壊に向い、社会主義が全世界的に勝利へ向う時代である。」「現代は戦争が革命をひきおこすか、革命が戦争を押しとどめるかの時代である。」



73 過渡期世界と国家

しかし当面の世界の主な傾向は革命である。』とだけ提起するのでは、全く不十分であることを知っている。我々はそれを、現代過渡期世界における国家と革命の問題として提起し直さねばならない。

★朝鮮労働党のプロレタリア独裁論

レーニンの第五章について、最も興味深い事を述べているのは金日成である。一九六七年五月二五日、「資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリア独裁の問題について」と題する、朝鮮労働党の思想事業部活動家たちにたいしておこなった演説で、その内容を見てみよう。

金日成は、過渡期の問題についてのマルクスの考え方、マルクスの継続革命、過渡期についてのレーニンの考え方、現に過渡期にある朝鮮民主主義人民共和国内の矛盾、朝鮮労働党内部での資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリア独裁の問題についての右と左の意見、現段階での過渡期とプロレタリア独裁についての考え方の結論、および、プロレタリア独裁と階級闘争について述べている。ここでは、その全般にわたって述べるつもりはない。次の一文だけをとりだして考察してみよう。

「しかし、ここにもう一つの問題があります。世界に資本主義がまだ残っており、一国あるいは一部の地域で共産主義を実現したとき、プロレタリア独裁はどうなるのかという問題であります。世界革命がまだ完遂されず、資本主義の帝国主義が残存する条件のもとでは、一国あるいは一部の地域で共産主義を実現したとしても、このような社会は帝国主義の脅威を免がれることができません、外部の敵と結託した内部の敵の反抗も免がれることができません。このような条件のもとでは共産主義の低い段階に移っても国家は凋落しえず、プロレタリア独裁は依然残っていないければなりません。

ん。万一世界のすべての国で革命が連続して起り、全世界的規模で資本主義が滅亡し、社会主義が勝利するようになるばあいには過渡期とプロレタリア独裁がたがい一致し、過渡期が終ればプロレタリア独裁もそれ以上必要でなくなり、国家の機能が凋落するようになるでしょう。しかし、一国あるいは一部の地域で共産主義を建設することが可能であるという理論をわれわれが承認するかぎりにおいては、過渡期とプロレタリア独裁をこのようにきりはなしてとらえることが全的に正しいのであります。」(金日成)

朝鮮において、現在の二つの立場は、絶対に正しい。①朝鮮のプロレタリア革命を守るためにプロレタリアート独裁を強化すること。②プロレタリア革命によって資本主義から過渡期社会に突入した朝鮮が、継続革命によって常に過渡期社会を社会主義、共産主義の高い段階へ発展させようとする。金日成の演説を、この二つの立場を強調しようとしたものである、と大ざっぱに把握すれば、それは正しいことであるし、我々は、そのように金日成の演説内容を理解しなければならぬ。立場はそうであるが、その立場から出発させた論理展開は誤りである。

「一国あるいは一部の地域で共産主義を建設することが可能である」というのは、②の立場を守るために、②のような形ではなしに、②にブレーキをかけるような理論、即ち、「世界革命まで社会主義、共産主義は出来ない」という、逆立した理論(それは、そういうことで、一国↓世界への永続革命を否定するから、世界革命といいつつも逆転した理論である。極左空論主義に対決しながら形成された事情故に、その対決の中で、ゆがめられた形で形成されたものである。「出来ない」という立場は誤りである、ということが、「出来る」へエスカレートしたものである。ところで、この立場から、

論理の行くにまかせて見よう。可能なのだから、過渡期がおわって共産主義になったとしよう。とこ

ろで、マルクス・レーニン主義によれば、「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者の後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してきた政治上の過渡期があり、この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもありえない。」(『ゴータ綱領批判』)のである。とすれば、今や過渡期をおわって共産主義になったのだから、もはや、プロレタリアートの革命的独裁は、この時期には、照応しない。これは、都合が悪い。①の立場を弱めるような理論となるからである。そこで、「共産主義の高い段階に移っても国家は凋落しえず、プロレタリア独裁は依然残っていないなければならない。」というふうには、過渡期とプロレタリア独裁が照応するというマルクス・レーニン主義を修正し、照応しない、即ち、「過渡期とプロレタリア独裁をこのようにきりはなしてとらえることが全的に正しいのであります」となる。

これは、①、②という正しい立場に立って、しかし、②の論理だけ継続革命させるところから、①と②がピッコを引くようになる誤った主張である。ところで、我々は、誤っていても、正しい立場に立っていること、しかも、論理においても、「これはわれわれの完全な結論ではなく、初歩的な結論であります。同志諸君がこの方向でもっと研究をすすめるのがよいでしょう。」(金日成)としているので、同志的立場に立って、この問題を発展させるべきである。それは、①をも継続革命させることである。それには、二つの方向から問題をたてることが出来る。

一つは、資本主義や帝国主義が残っているから、プロレタリアート独裁国家を死滅させてはならない、という立場を、プロレタリアート独裁を単に、資本―帝国主義に対して消極的に対抗させておいて、あとは、資本―帝国主義国の革命を待つのではなく、対抗を、積極的に発展させ、プロレタリアートの世界的独裁へと自己の独裁を強化すること、二つは、この世界的独裁を朝鮮の場からの論理としてだけではなく、資本―帝国主義国の革命と合流させて家現すること、要約すれば、プロレタリアート独裁を死滅させることが出来ないのは、資本―帝国主義があるからであり、従って、一方では、独裁を包圍する資本―帝国主義への逆包圍、世界的独裁へ発展させること、他方では、資本―帝国を打倒するその内部の革命と合流すること、である。ところで、後者の論理が弱いので、朝鮮労働党もピッコをひかざるをえなかったわけであり、その任務は、資本―帝国主義国プロレタリアート人民の責任である。

さて、こうして、世界プロレタリアート独裁論を提起すると、その時は、レーニン言うところの、「死滅しつつある国家、ただちに死滅しはじめ、しかも死滅せざるをえないように構成された国家」ということ、『国家と革命』の第五章「国家死滅の経済的基礎」が、意味を持つてくる。即ち、この章は、マルクスの『ゴータ綱領批判』の整理であるから、『ゴータ綱領批判』と言ってもよいが、いずれにせよ、マルクス・レーニン主義の、全くの材料不足の点を、豊富化出来るのである。「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者の後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期があり、この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁以外のものでもありえない。」(『ゴータ綱領批判』)という、全くアイマイで、一般的でしかない内容を、修正せずに、豊富化出来る。マルクスがここで、「共産主義社会」といつているのだから、レーニンが共産主義段階の第一段階、共産主義社会の高度の段階といつていることや、又、金日成が、資本主義から社会主

義への過渡期というように、社会主義といたりしているし、「この時期の国家」といったって、それは、単にブルジョア独裁国家のプロレタリア革命による転覆による国家なのか、「プロレタリアートの革命的独裁」といつても、世界独裁と一国独裁の関係はどうなのか、等々、アイマイだらけなのである。それらを、ちゃんと整理し、豊富化し、発展させるのが、我々に残された課題なのである。

★反米愛国病患者を手術する

日本共産党革命左派、京浜安保共闘、又は、わが赤軍派の一部に、過渡期世界における国家についての正しい認識の欠除故に、反米愛国民族主義革命をとる者がいる。ここでは、日米帝国主義と国際反革命同盟という、敵と敵の様子、および、それに対する革命の関係について明らかにして、反米愛国民族民主主義革命病を治療しようと思う。病気は早く治療して、健康な姿で革命戦争にのぞむべきである。

日本はブルジョア国家である。従って、プロレタリアートの立場は、レーニンの四月テーゼの第一、「革命的祖国擁護反対の立場」を何ら、それ自身としては修正することなく維持することである。その上で、その立場を、過渡期世界の現実の構造の中で、豊富化することである。反米愛国病患者がいかにかに何と言おうと、頭に「革命的」とか、「真に社会主義的」とか、何と言おうと、ブルジョア国家日本で、○×的愛国〇×的祖国擁護と、愛国を主張するのは、反革命である。プロレタリア国家では、立場は逆転する。キューバの「Patricia o Maerte」（祖国か死か）のようなのは、断乎正しい。

だが、日本では、〇〇愛国は、すべて反革命である。

反米愛国病患者の感染ルートは、中国共産党である。中国共産党は、過去一貫して、「中国人民の反米愛国闘争」と言ってきた。中国共産党は、自己の国家論の自己批判を、じつは、インドネシア共産党の一九六五年九/三〇事件という血の教訓の中で行なった。『革命の道に復帰するインドネシア共産党』は、国家論において、ソ連修正主義の国家の二側面論（国家は暴力的側面と公共的側面を持つていて、公共的側面を増して行けば国家はかわるといった、構改国家論）に毒されていた事を取りあげ、その自己批判をしているのである。中国共産党は、当時、国家の二側面論病をみのがすような軽い症状の病気だったし、その国内での治療が文化大革命だし、その病気は、日本に対する考えの中にもあった。その病気の回復を、最近、日本軍国主義批判と日共宮本修正主義批判で行ないつつも、昔病気に感染していたことをごまかしている。いや、無自覚である。だから、常に再発の可能性を含んでいる。インドネシア共産党の自己批判は、日本での反米愛国の自己批判ともならなければならぬものである。この自己批判抜き、なし崩しの修正としての日本軍国主義批判と日共批判が今、行なわれているわけである。今、体が元気なうちに、手術をして、反米愛国病を治療しておかないと、癌のように、ひどくなってからでは、おそすぎるのだ。ところで、胃ガンの手術をするのに、肝臓を出しても仕方あるまい。胃ガンを治すには胃ガンの所を手術すべきなのである。この際、この人は胃ガンだが、まだ体総体をみた場合、革命戦争も充分やれるし、大丈夫だ、といった考えは反動的である。早期治療して、転位や、他人への病気の感染をふせぎ、健全な体で、革命戦争を共にやっていけ

るようにすべきである。胃ガンだ、と言っているのに、肝臓は健康だ式の話をする人がいる。反米愛国は、毎年、毎日、毎秒誤りだと言っているのに、彼らは、革命戦争を最もよく追求している、といった議論をする人の事だ。革命戦争を共にやって行く事、それは当然の事だし、よりよくやって行くためにこそ、病気は感染しないように早く根治すべきなのだ。

反米愛国病患者の論拠は、戦後米帝は日本を占領した、という所にある。米軍基地は今でもあるし、今日までその関係は変わっていない、日本の権力は米帝が握っている、と。

第二次大戦で、プロレタリアート人民の立場は、明らかに、日本の敗北を促進させ、内乱に転化することであった。鬼畜米英は、明治維新のブルジョア民族主義≡排外主義である。ところで終戦によって、日本において、ブルジョアジーとプロレタリアートの関係は転倒しただろうか？否である。この転倒があるならば、ただちに鬼畜米英（即ち、反米愛国）は正しい。だが、この転倒という、日本内部の關係の変化のないまま、第二次大戦の政治が、ただ、終戦、米帝の占領として日米対決↓日帝の米帝への敗北と形態変化した≡外的要因の変化だけから、反米愛国と主張するのは、排外主義である。ところで、日本内部の關係の変化は今日まで、一度たりとも変わっていないのである。我々は、何よりも先ず、国内でのこの課題を解決することなしには、即ち、亡国を実現し、プロレタリア・ヘゲモニー（まだ権力でなくてもよい）を実現したならば、ただちに、反米の課題に移りうる。そして既に部分的には移っている。こういって、一國主義者で、プロレタリア国際主義でない、などと早がつてんして、ケチをつけようとするだろう。現代過渡期世界における四つの矛盾から、世界的規模に

おける革命勢力と反革命勢力の關係を見るという方法論のない、全くの一國主義である、と。また、また、あせるな。世界的規模の反革命の頭目が米帝であることぐらい百も承知なのだ。が、世界的規模における革命勢力と反革命勢力の關係とは、一面的、平面的なものではなく、四つの矛盾という立体的、複合的構造を持った総体として考えられねばならないのだ。今やっているのは、そのような立体的、複合的構造を、日本国内のプロレタリアートの場所から（しかし、国籍に左右されない万国のプロレタリアートの普遍的利益の立場から）ときほぐしているのだ。自己の場をはなれた、過程的おしやべりは何の意味も持たないし、そのオシヤベリが場の論理を解体させるように作用する時は革命的ですらある。もちろん、過程的構造を抜きにした場所的論理は、部分でしかないこともわかっている。

先ず、占領↓講和、日米安保条約へ至る、日帝と米帝、および米帝を中心とする国際反革命と抗日革命戦争グループ、および世界の諸關係などについて、「日本の権力を米帝がにぎっていて、先ず、革命は米軍を追い出して独立する民族革命だ」という主張のデタラメさを粉碎しておこう。

井上清は、『序章六』に、「八・一五記念と日本人」と題して興味深いことを言っている。

「非常にそのときも驚いたし、また今でも正確な見通しを彼らは持っていたものだなあと思うのは、その人たちは、寄生地主の土地は取り上げられるだろう、日本が降伏したのなら地主の土地は取り上げられて、小作人に渡さなければならなくなるだろうが、そういう寄生地主的な土地ではなくて、自分で経営している、つまり資本主義的な農場というものは大丈夫だろうと、まあこういうような見通

しを語っている。それからアメリカ軍がやってくれば、いろんなことが起るだろうけれども決して銀行には手をつけない。現にその証拠には、東京中は焼け野原になつたけれども、丸の内界隈の日本の金融資本の中心地帯は全然無傷である、皇居にまで焼夷弾が落とされたけれども、銀行には一発の焼夷弾も落されてない。もしも日本の銀行にアメリカが手をつけるならば、日本経済は大混乱に陥つて、占領軍はどうすることもできなくなるから、銀行は大丈夫である。資本主義の根幹は大丈夫であるということを、彼らは彼らなりに、その当時ちゃんと見通していたのです。そうして、どのようにしてその占領下に金融資本が生き延びていくか、また山地主は山地主なりに自分たちが、この敗戦、日本帝国主义の敗戦の中で、どのようにして、いつてみればやけぶとりにふとつていくか。彼らは八月五日のその日からそういうことを考えていた。決して敗戦ボケなどしてはいないです。』

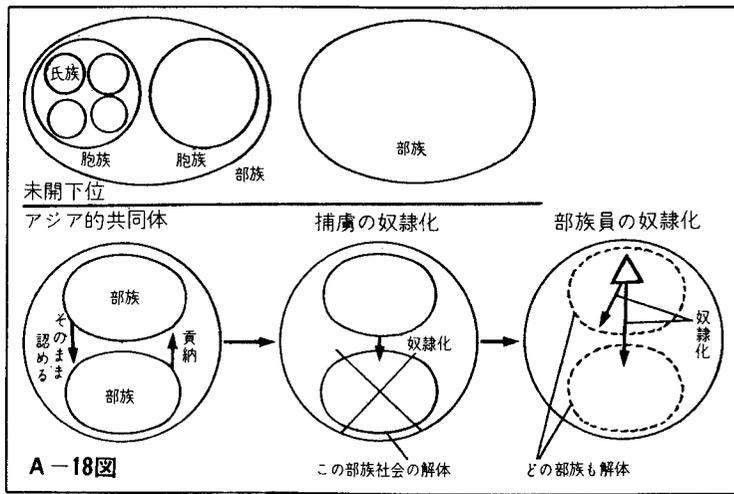
「私は、私自身も含めてだが、われわれが日本帝国主义が降伏して、そして日本の支配階級がまったく打ちめされているこの瞬間に起き上つて、われわれ日本人自身の力で、この敗戦によって挫折した日本帝国主义を打倒することができなかったことを、まことに恥かしく思う。それだけではなしに、戦争中に、あるいは戦前から逮捕されて監獄に閉じ込められていた政治犯人を、日本人自身が刑務所にデモをかけて、そこに収容されている政治犯人をわれわれの手で人民の中に奪い返すことができなかった。八月一五日から一〇月一〇日まで実に五〇日余りというものを、この帝国主义日本と天皇制が瀕死の断末魔にあるこの貴重な時を、私どもは一生懸命走り回つたとはいうけれども、それはただそれだけのことであつて、われわれ自身の手で、天皇制と日本帝国主义にとどめをさすことができなかったし、

政治犯人をわれわれの實力で奪還もしなかつた。』

「そして、私たちが日本帝国主义を、敗戦によって瀕死の状況に陥つた日本帝国主义を、われわれ日本人自身、人民革命によって打倒することができなかったがために、そのことが今日日本の軍国主義、帝国主义が復活する基盤になつている。今、日本帝国主义が復活している、あるいは軍国主義が復活しているというが、非常に概念的にいうなれば、日本帝国主义、日本軍国主義はなくなつたことは一ぺんもないといえる。なるほど、彼らは第二次世界大戦で重大な敗北を喫し、重大な打撃を受けたけれども、打倒されはしなかつた。』

「日本帝国主义の経済的な土台であるところの独占資本主義は敗戦によつておおいにいためられたけれどもその独占資本主義という経済構造そのものは、敗戦の八月一五日の夜三井銀行の重役がすで見通しておつたとおり、この独占資本主義という構造そのものはなんら手をつけられなかつた。ですから、日本帝国主义は、まあ理論的にとらえれば、概念的にいうならば、一九四五年八月一五日によつて重大な、深刻なる挫折をこうむつたけれども、そのときにだつて死にはしなかつた。それがだんだんと息を吹き返して今日に至つている。〔meの注〕— そうだ、この息を吹き返してきた日帝を打倒する力もなしに、それを越えて米帝打倒など出来ようはずもない。ベトナムで米帝をやつつけうるのは、一九四五年に一回プロレタリアートが権力を取つて基本関係を変えているからだ。ラオス、カンボジアでも、米帝と闘っているのは、カイライとの関係では、プロレタリア・ヘゲモニーが勝つていくからだ。』

「帝国主义が、現在でも、第一次大戦のときもそうだったが、帝国主义と帝国主义が戦争して、勝



A-18図

つた帝国主義が負けた帝国主義を滅ぼすというようなことはありえない。封建領主間の戦争でありま
すと、勝者は相手の土地を奪い人をみな殺しにする、といういわば相手の国の存在そのものを滅ぼす
ことはしょっちゅうですけれども、資本主義国相互間の戦争において、勝った方が負けた帝国主義そ
のものを打倒するだの、滅ぼすだのということは、歴史上の実例もないし、理論的にいってもありえ
ない。なぜなら、資本主義を滅ぼし、帝国主義を滅ぼすならば、その後にくるものは社会主義以外の
何ものでもない。帝国主義がどうして、勝った帝国主義といえども、どうして負けた帝国主義を滅ぼ
して社会主義にする、つまり帝国主義体制そのものをぶちこわすというようなことがあるか。第一
次大戦後のドイツは、ベルサイユ条約で奴隷化されたけれども、しかしドイツ帝国主義は、その中核、
根幹は 然として生き続けた。だから、レーニンの指導したコミンテルン第二回大会の『戦時に関す
る決議』では、ドイツのプロレタリアートが敗戦によって挫折したドイツ帝国主義の復興を助けるの
ではなくて、これを革命によって粉砕しないかぎり、プロレタリア国際主義について語ることはでき
ない、というふうの規定している。第二次大戦後の日本においてもそうだった。アメリカ帝国主義は
結局旧い競争相手である日本帝国主義を改造し、利用した。だから、彼らが中国革命の勝利、朝鮮に
おける民主主義人民共和国の成立、そしてベトナムにおけるベトナムの革命闘争がフランス帝国主義
を窮地に追いこむ。こういうアジアの新しい革命情勢の発展に対して、アメリカ帝国主義が五〇年六
月朝鮮戦争をおこし、同時に旧い日本帝国主義を起用しようとしたとき、そこから日本帝国主義
は現実に息を吹返しはじめる。そういう軍隊をもち、侵略戦争をやるような経済力をもちはじめる。
軍事工業も再建されてくる。日本帝国主義、日本軍国主義復活の過程というのは、復活ということば

を使うならば、それは、そういった敗戦によって挫折し
た帝国主義が再び実力を回復してくる過程、こういったわな
ければならないと思います。

私も今日八・一五敗戦を考えるとこのときにあた
って、私自身が真っ先に思うことはこのことです。われ
われはあの時日本帝国主義を打倒することはできなかつ
た、とどめを刺すことができないで、占領軍の、アメリ
カ帝国主義の日本帝国主義の改造を民主化だとかなんだ
とかいった」。

ここで、「帝国主義と帝国主義が戦争して、勝った帝
国主義が負けた帝国主義を滅ぼすというようなことはあ
りえない」と井上が言っている事について、滅ぼしたら
社会主義になるから、といった思惑性による論理として
ではなく、もつと、別の方面から分析してみよう。国家
のまだ、なかった時代、原始の分析こそ、我々に最も豊
富な内容を提起してくれる。

「下位段階の未開人には奴隷は無価値であった。」(『起

ところで、奴隷は、いかにして生み出されたのか。それは、人間の労働力に変化をもたらすような社会的発展の差からであった。即ち、一方の部族は、たいした人間の労働力を必要としない狩猟・採集社会であり、一方は、牧畜・金属加工・機織り、畑作耕作などともに人間の労働力を必要とする社会、といった差がある時、後者は前者を征服し、奴隷にした。のちには、捕虜をもちいた奴隷制から更に自己の部族員や自己の氏族員をさえ奴隷化して行く。ところで、部族―氏族社会が、これほどまで差のない所では、いわゆるアジア的共同体として、一方の部族が他方の部族を解体することなく、総体的に隷属化させた。これを図指すれば以下のごとくである。(A―18 図)

以上のことを参考にすると、帝国主義と帝国主義、帝国主義と植民地といった、社会構成の差から生じる結果は、違ふといわねばならない。帝国主義は植民地を隷属化することは容易だが、同じ発展段階の社会である帝国主義を隷属化することは、植民地の隷属化とは異ならざるを得ないと。反米愛国病患者はこのことがわからないので、日帝をベトナムや朝鮮のカイライと同一化してとらえる。部族と部族でも、同じような場合、アジア的共同体のように、総体的奴隷制みたいになつたように、戦勝帝国主義は、敗戦帝国主義を、解体し滅亡させて(↓社会主義ではなく、自己の帝国主義の体系に吸み込むのではなく、解体しきることなく優位と劣位の関係を作つた上で、それ総体が、対国際プロレタリア革命に対決する国際反革命同盟を形成する)。

では、講和、安保へ至る過程を見てみよう。宮沢喜一前通産大臣は、『文芸春秋』一九七一年十月

号で、『異邦人』ニッポンの生きる道』と題して、講和・安保へ至る当時の事情について語っている。吉田首相がドッジの強行経済引き締策の中で、池田大蔵大臣のアメリカ見学という口実をつけてマッカーサー占領軍総司令部をごまかして、直接アメリカの国務省と講和、安保の秘密外交をやらせたのだが、その時、(昭和二十五年四月)宮沢喜一は池田大蔵大臣と一緒にアメリカに行つていて、実は、裏話を全部知っているわけである。

「そのころ吉田首相は、いつまでも占領状態を続けてはいけぬ、なるべく早く講和をやりたいて考えていました。しかし当時はソ連がベルリンを封鎖するようなことがあつたりして、米ソ関係がきわめて悪い状態でしたから、講和条約ができて占領軍がひきあげてしまうと、ここに力の真空ができることとなります。アメリカとしては、占領をやめれば、日本に軍隊を置く根拠はなくなるわけですからね。」

「ドッジという人は国務省の公使であると同時に、陸軍省の顧問でもありましたから、結局ドッジがよいということになりました。というのは、国務省は早期講和という考えをもっていました。陸軍省としては、ソ連との対立がある。ベルリンでござたしている時期ですから、極東に力の空白ができるのは戦略的に非常に不安だという理由で講和反対、アメリカの中でも意見の統一がとれていなかったんです。」

「ところで、池田さんがドッジに対して、安保構想といったものを、日本政府の意志として先方に伝えたことによつて、国務省と陸軍省との考え方の妥協点が出てきたわけです。そういうところから、講和を担当することになつたダレスの手によつて事態は急速に動きはじめます。」

「ダレスは昭和二十五年の六月二十二日に東京へきたわけですが、その三日後、二十五日には北朝鮮が韓国に宣戦布告をして、いわゆる朝鮮動乱がおこっています。吉田さんが考えだして、講和へのステップとしてアメリカに提案した安保構想というものが、ここで『論より証拠』とでもいったようなことになるわけですね。」

「結局のところ、ともかく独立するか、占領された状態をいつまでも続けるかという選択を、吉田さんはしなければならなかった。安保構想なしの講和というのは、日本は軍備を持たないですから、力の真空が生じることになり、アメリカを納得させられないだろう。現実的にみれば安保構想をこちらからアメリカに提示する、そういう方法が一番いいという吉田さんの判断だったんでしょね。」

「三月と八月（一九五二年＝昭和二十六年）の草案にはいくつかの違いがあつて、その一つは賠償の問題です。ダレスは、日本から賠償をとるのは無理である、だから賠償はとるまい、日本が持つていた海外資産を没収する程度にとどめよう、というように三月の草案で考えていたようです。」

その根拠としてはガリオア（占領地域救済基金）があります。とにかく敗戦後それまで日本を食わせてきたのはアメリカなのであつて、極東委員会の決定によれば、日本が独立を回復したときに第一の請求権は日本を食わせたアメリカにある。これが数十億ドルになるでしょうが、これが返されないかぎり、ほかの国は日本にはいっさい請求できないのだという理論で、各国をおさえたわけなのです。

ところがこれに対してインドネシアとフィリピンが強く反発した。」

「もう一つの違いは、南樺太と千島列島の問題で、これは今日まで尾をひいています。」

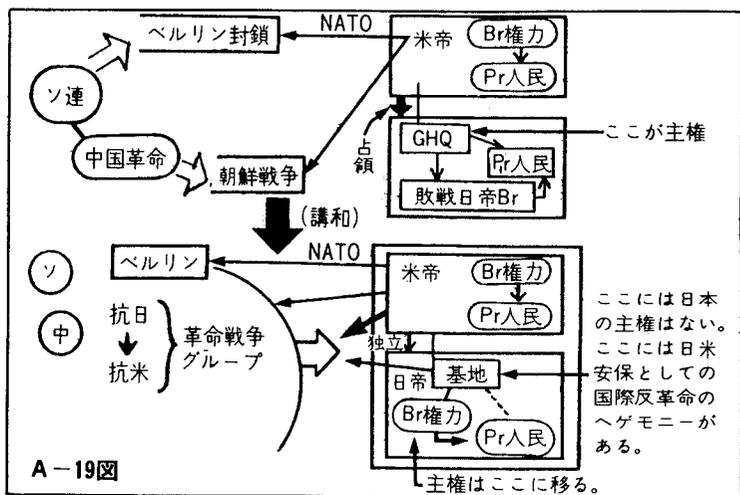
三月の草案では、日本はソ連に対し南樺太及びその付属島嶼を返還し、またソ連に対し千島列島を引き渡すべしというようになっていたんです。これについては、じつは日本がクレームをつけたわけなんですけれど、最終草案では、これらの領土についてはその権利を日本が一方的に放棄するといういい方にかわつていんです。いわば、このあたりは会議での論争を避けるために、問題を将来にもちこしたわけですね。

それについては、ソ連のグルムイコ外相が講和会議のときに、はげしい抗議をしています。しかし議長であつたアチソンが、この抗議を退けたので、ソ連は結局、講和条約に調印しないということになつてしまうのです。」

日本の側からではなく、次にこれを米国側から見よう。山本満という人が、「サンフランシスコ二〇周年」と題して、『エコノミスト』臨時増刊九月二十日号（一九七一年）に、プリンストン大学のダン教授（故人）の外交政策決定過程の事例研究として対日講和の経緯を分析したものについて述べている。

「賠償指定施設撤去の中止、経済力集中排除の緩和など、日本占領政策の方向転換も一九四七―四八年にかけてはじまつていた。アメリカは一九四八年一月、国家安全保障会議において対日政策転換を明確化した方針を決定した。この決定は公表されなかったが、ダンによれば、つぎのものを含むものであつた。

(1) 経済的、社会的に、日本を強化する。それによつて日本が占領終結後安定を維持し、かつ自ら進んでアメリカの友好国になるようにする。



日本は再び米帝に戦争をふきかけるべきだ、みたいな言いまわしではないか。プロレタリアート人民に依拠した理論ではなく、全くのブルジョア論理で、米帝と日本しか見ないのは、愚のこっちょである。

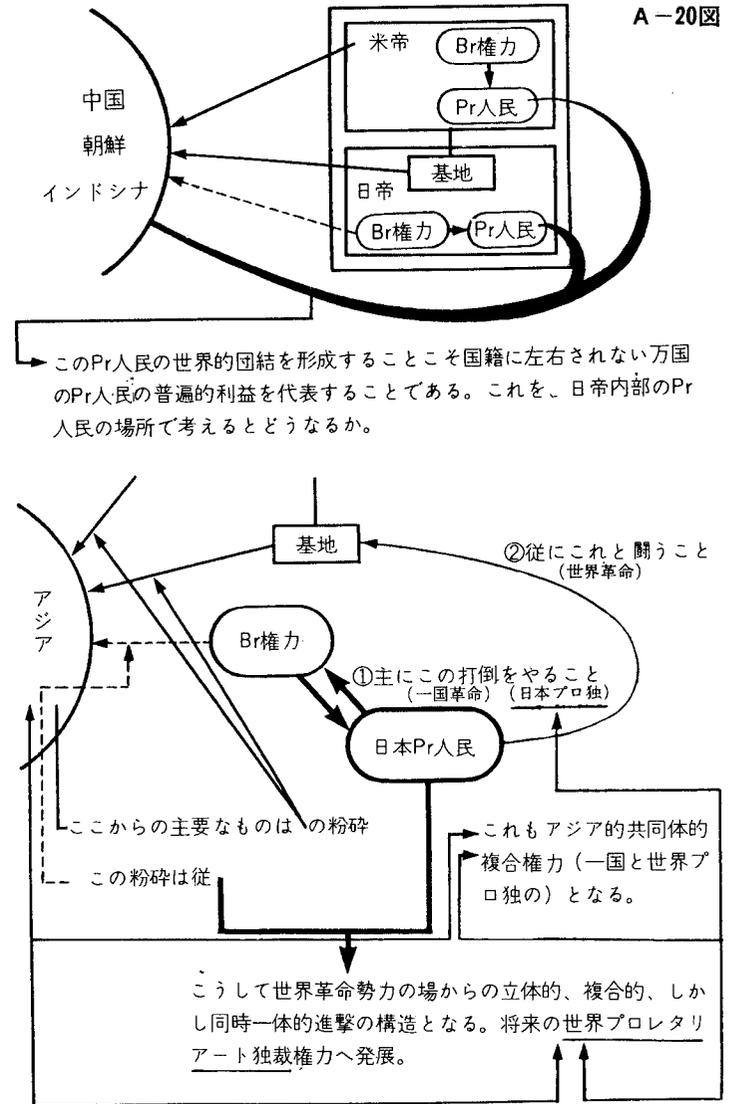
さて、ここで、占領→講和、安保への過程を図で見てみよう。

ここで、邪馬台連合の中の不弥国、奴国、耜岐国、対馬国など、A-13図で見てもらおう。不弥国の大官は多模であり主権がある。しかし連合としては、副官に邪馬台国派遣官の卑奴母離がいる。日本の権力は、日本のブルジョアジーが持つっており、国際反革命同盟としては、米軍基地というヒナモリがいる。こういうアジア的共同体の総体的奴隷制との比較は、A-18図とともに参考になる。

反米愛国病患者の大まかな手術は、ほぼしたので、次に、この際、問題点をもうすこしだけ述べておこう。

輸出の三割がアメリカだから日本はアメリカに従属している云々ほどナンセンスな話はない。そんな事で従属

- (2) 占領軍総司令部は、責任をできるだけ早期に日本政府に移管し、人員も縮小する。
 - (3) 一五万人の警察部隊を日本につくらせる。
 - (4) 日本が自主的に国内改革の政策を立てることを許す。
 - (5) 占領が日本人の感情におよぼす影響を極力少なくする。
- 「国務省の早期講和論は、東西対立のなかで、日本を西側同盟に組込むという政治的見地を重視し、占領継続によって日本人のあいだに反米感情が強くなれば…略…アメリカの対ソ冷戦上の立場に大きな打撃という考えかたであった。」
- 以上のことから、ほぼ、次の事がはつきりする。日米安保という国際反革命同盟は、その主導権を米帝がにぎり、対ソ戦略（当然、中国、朝鮮もその中に含まれていた）上、ヨーロッパでのベルリン封鎖とそれにつづく朝鮮戦争（米帝のしかけた戦争ではなく、スターリンのしかけた陰謀に米帝がかかったという話もある。その場合、スターリンの陰謀は正しかった）に対抗して形成され、その過程で米帝に対して敗戦日帝の方から独立を認めさせて行なったという事が。
- 反米愛国病患者の中で、京浜安保共闘の『反米愛国』再刊第二号に、「マルクス主義の観点からみるならば、権力移行の際には、通常動乱状態がおこる。しかし、『独立』に際しても、その後今日に至るまで米帝と日本の間になんかのようなことはなかった。」と書いている。「独立」に際して、たしかに国内で動乱はなかったといつて良い。だが、この主張は、ベルリン封鎖と朝鮮動乱があったのであり、世界的な革命勢力の分析を欠落させた全くのデタラメと言いうる。「米帝と日本の間になんかのようなことはなかった。」などと言うのは、なんと、第二次大戦で敗れたんだから、その関係を逆転させるべく



というのなら、国民経済がそれ自身として存在しない以上、あらゆる国は、互に、他のあらゆる国に
 従属している。アメリカ帝国主義は、日本、カナダ、ヨーロッパに従属していることにもなる。
 基地(米軍の)については、キューバに現在グアンタナモ基地があっても立派に社会主義革命をや
 っていることを考慮するよう要求する。

日本独占というのに、なぜ日本帝国主義といわないのか?それは、帝国主義ということ批判して、
 全人民をそれに政治的、文化的、経済的、軍事的に動員することを恐れる経済主義者だからである。
 独占という狭い経済的所へ人民の目を狭め、とじこめる反動的役割をになっている。

民族民主主義革命について。明治維新以来の日本のブルジョアの民族の歴史を総括することを要求
 する。民主主義を徹底化することに我々は反対しているのではない。民主主義の課題があるからとい
 って、革命の性格が民主革命だとはならない。日本の革命の性格は、社会主義革命である。

さて、ここで、もう一つ述べておこう。それは、「亡国を実現し、プロレタリア・ヘゲモニー(ま
 だ権力でなくてもよい)を実現したならば、ただちに、反米の課題に移りうる。」と言ってきたことに
 関してである。ちゃんと述べておかないと、いろいろ誤解されるからである。(A 20図)

さて、反米愛国病患者を、徹底して手術したわけだが、なぜこんなに詳しく手術したかというと、
 かつて、マルクス・エンゲルスが国家論でとちったことがあるからである。彼らは、「ドイツ社会民主
 党のエルフルト綱領や、ゴータ綱領を後に、しもうた、しもうた、あの時「自由な人民国家」
 というのを許したのは宣伝上、今のブルジョア独裁国家がすぐく抑圧的なので、それに反対するとい
 う意味で許したのだが、もともと国家は非自由なものなのに、あんな非科学的な事を許したので、今

では、社会主義は日和見主義の俗物になってしまった、と弁解がましく、『エルフルト綱領批判』とか、『ゴータ綱領批判』を書いたのである。

ブルジョアジー独裁日本国において、反米であれ、国際主義と愛国主義を結びつける云々であれ、革命的であれ、社会主義的であれ、いかなる修飾語をつけようと、「愛国」が反革命であることは、マルクス・レーニン主義のイロハもイロハ、イである。これほど単純なことは、赤軍派にあつては、あたりまえの事だと思つていた。だから、中共や、そのエピソードが、反米愛国などといっても、反米愛国病患者なんて出つこないと思つていた。ところが、そういうやつが何人か出た。

ところで、僕は、統一赤軍結成は、『銃火』創刊号に、「両組織は、互に六九年日本階級闘争の頂点の中で、プロレタリア武装闘争を追求し、大衆的暴力闘争を『革命戦争』へ発展させる努力を行なつてきた』にあるような位置にあるから全面的に正しいと思う。イデオロギーが一致するから云々ではなく、イデオロギー生産の物質的基礎を統一すること、それは、両組織の位置からして全面的に正しい。そうである。故に、過去のイデオロギー生産の物質的基礎の違いから生じているイデオロギーの総括は、重要であるが統一が革命的であるが故に、マルクス・エンゲルスが昔とちつたような事を繰返すべきではない。だから、反米愛国病の手術は、早く、しかも全面的にやるべきである。病源は「愛国」にあるのだから、ここを手術すればよい。二段階戦略だの、民族民主革命だのの批判は、病源の手術にはならない。「愛国」を、まさに国家論のイロハの問題として徹底的に、手術すれば、熱が出るのだ、だるいのだといった、こと、即ち、二段階戦略、民衆革命等々は、すぐよくなる。

反米愛国病を日本にもち込む中国共産党をハリ麻睡せよ！

日本の反米愛国病患者を手術台の上にのせよ！
病氣は治して、さっぱりして、共に、やろうではないか！

★イスラエル国家

第二次大戦後、ポツカリと作られたのがイスラエルという国家であつた。それは、たしかに、「階級対立の非和解の産物」であつた。しかし、それは、当のイスラエルのある地方の即ちアラブ社会の、「一定の発展段階における社会の産物」ではなかつた。世界的な階級対立の結果であつた。それは、イスラエル地方の「社会からでてきながらも、社会の上に立ち、社会からますます疎外してゆくこの権力が、国家なのである」ではなかつた。世界という社会からでてきたのだ。そういう意味（世界Ⅱ社会）では、エンゲルスの言う、「国家は、けつして外部から社会におしつけられた権力ではない」と言うのは正しい。しかし、アラブ社会にとつては、イスラエルは、「外部から社会におしつけられた」のである。こういう意味では、エンゲルス、レーニンの国家論は、正しいとは言えない。

イスラエル国家の止揚としてのパレスチナ・アラブ革命戦争について、一九七〇年の九月二十六日に書いた文章があるので、その一部を再録しておこう。

第二次大戦後世界を世界革命戦争で転覆せよ！

パレスチナ・アラブ革命戦争を無条件に支援せよ！

国際根拠地——国際地下活動——蜂起の軍隊の一さいを武装解除することなく、日、米、ヨーロッパ

パ武装蜂起態勢を構築し、一日も早く蜂起を表現せよ!

赤軍派の同志諸兄弟!

赤軍兵士諸兄弟!

革命戦線の同志諸兄弟!

PFLPを先頭とするパレスチナ・アラブ革命勢力は、第二次大戦後世界を形成してきたすべてと対決し、英雄的に大胆な革命戦争を開始した!

全くすばらしい事である。我々の昨秋の日米蜂起への挑戦も、第二次大戦後世界への根底からの転覆への着手であったが、我々が「世界革命戦争統一戦線」の展望云々の意志統一をやるうとする前に、言葉よりも行動が、既にずっと前に進んでいる。遅れているのは我々である。

九月二十五日読売朝刊には、「赤軍派七人をゲリラが招く、北朝鮮に申し入れ(パリ二十三日発)共同」パリに二十三日到着したイスラエルのエディオト、アハロノトなど主要紙は、PFLP(パレスチナ解放人民戦線)が北朝鮮政府に対して、日航機を乗っ取った七人の赤軍派学生を「革命家」として招待したいと申し入れた、と報じている。なる記事が載っている。

PFLPのハバシユ議長の北鮮訪問、中朝へのアラブ・ゲリラ支持声明、中共第九期中央委員会二回総会での「アルバニア、インドシナ三国、朝鮮、パレスチナ・アラブ人民、日本人民との戦闘的連帯」の表明と、「戦備強化」等々、世界革命戦争統一戦線は徐々に形成されつつある。

このような動きの中で、日本、アメリカ、ヨーロッパの左翼は全くネットボケテイルので、タタキオコシて、恫喝しなければならぬ!以下は、恫喝の文章である。

①パレスチナ・アラブ革命勢力の革命戦争は、直接的には、イスラエル国家成立によるパレスチナ人の難民、流民化状況を原因としている。「イスラエル国家打倒による、ユダヤ人も、キリスト教徒も、回教徒もみな平和にくらせる民主的なパレスチナ国家の建設」という、彼らの闘いは、イスラエル国家を生み落した原因である第二次大戦の解明とその克服ということを要求するので、当然にも、第二次大戦を前提として形成された戦後世界の一切と非和解的に対決する。

②第二次大戦は、その中心は、世界諸帝国主義の強盗戦争であった。この強盗戦争の上に成立している戦後の再編された強盗どもすべてを打倒することなしには、パレスチナ・アラブ革命戦争はおわらない。即ち、ヨルダン内戦をもって本格的に始められた、この革命戦争は、世界革命戦争の終わるまで終わることのない、世界革命戦争の不可欠の一環である。それ故、このパレスチナ・アラブ革命戦争は、全世界の強盗どもをゆさぶっているものであり、強盗国家のプロレタリア人民すべてに、強盗どもをやっつける革命戦争に決起することを呼びかけているのである。それ故に、この呼びかけに応えていない日、米、ヨーロッパのすべての強盗国家の人民を恫喝し、戦いに起ち上がらせねばならないのである。

③第二次大戦の原因・中心、主力は強盗どもであったが、第二次大戦後世界を決定する要因として作用したのは、ドイツ、イタリア、日本強盗(ファシズム)に対する、反ファシズムの戦略的反攻になった勢力であった。それは、米帝、英帝、仏帝等の強盗勢力、ソ連、中国、ヨーロッパ・パルチザン、後進国民族独立の、ブルジョア反革命、民主主義から、革命勢力に至る種々雑多な勢力であった。パレスチナ・アラブ革命勢力は、それ故、これら反ファシズムの戦略的反攻になったすべての勢力

が、イスラエル国家を生み出した第二次大戦後世界を決定したような勢力でしかなかった以上、その勢力の存在の仕方そのものを、根底から問い直すものとして存在している。

④米帝は第二次大戦への参戦によって、世界に軍隊をバラまいて活動させたので、戦後処理の決定は軍事力に依りて、という鉄則のもとで、英仏連合の頂点として、独、伊、日枢軸をも武装解除し、君臨し、それらの植民地をも含めて、世界の憲兵として戦後世界に位置している。軍隊の進駐、人民の武装解除、ドル撤布、商品輸出、市場統一、この上での経済、社会、労働政策で一方では議会へ集約し、他方では、反ファシズム勢力のヘゲモニー争いとして、ソ連、中国、ヨーロッパ・パルチザン、後進民族独立勢力への反革命としての地域防衛体制(NATO・安保 etc.)の確立。このような米帝を頂点とする世界強盗勢力に対決するには、国際的武装勢力でなければ対決しえない。いくら経済闘争を激化してみてもはじまらない。パレスチナ・アラブ革命勢力は、第二次大戦後世界からはじきだされた難民、流民であるが故に、第二次大戦後世界と根底から対決する無国籍国際武装勢力として登場しうる位置にあり、まさしく、そのようなものとして登場しているが故に、米帝・独帝、伊帝、日帝、英帝、仏帝 etc.を打倒することの出来る運動論を持っているのである。

⑤ソ連は、たしかに米帝に対抗する最強勢力であったが、その軍隊の階級的性格は、既にブルジョアの方へ改造されかかっていた。三〇年代のファシズムへの敗北と変質を通して、軍隊及び戦争の方式は、階級制導入、政治委員制度の廃止、機械化主義、軍と人民の分離、戦争における社会組織の軽視と、ブルジョア的に転化し、帝国主義の世界法則へ対抗しつつ包摂され、世界の再分割の中に国家として登場するのである。それでも、対抗しているということの一つによって、即ち、ロシア十月革命以降の革命の功徳の影響力によつ

て、スペイン革命の圧殺とか、ポリシェビキの虐殺といった反革命とは別に、「革命を守る」という気分が、表われている程度には、革命の側にあった。その現在の表現は、二つは、六二年のキューバ危機に際して、米帝にミサイルをつきつけてキューバ革命を守ったこと(六四年のドミニカ革命のムザンな圧殺と比べたら、ソ連のミサイルの果たした役割がわかる)、もう一つは、六八年のチェコ事件の時、ソ連に、「我々はファシズムに負けないぞ」という空前のデモがあった事にみられるが、国連でのパレスチナ分割案賛成↓最近のアラブ・ゲリラへの協力と、米帝との取り引きとそれによる抑圧、これらに対して、革命の側から強力を再編して、ソ連の根底からの革命を要求している。ソ連の第二次大戦への態度をめぐって、その反革命性をとことんあらためることを要求している。

⑥中国については、そのインドシナ三国、朝鮮に及ぶ人民戦争と、国連からハミダシている存在故に、パレスチナ・アラブ革命勢力は中共を支持している。それにもかかわらず、中共をも、そのあり方を根底から問い直す存在なのである。それは、アラブ世界から見に行くよりも、全く別の方向から見た方が、よりはつきりする。そのはつきりする内容に対しては、同じく、アラブ世界も要求しているのである。それは、ソ連に対しては共産主義、中国に対しては、活動スタイルについてである。一言で言えば、中国に対しては、米、ソのように、民族国家を越えろ、と要求しているのである。

この内容については、図書救済の『カンゴク・マガジン』用の原稿として書いていたのだが、どうしても優先させねばならない手紙があつて(意見陳述の府中との連絡 etc.)、今まで送らないで持っていた以下の文章で述べているので、それを代用する。キューバを中心にしたので、ちよつと中国は、わきになった感じだが、パレスチナ・アラブ革命勢力も、この文章で述べたようなことを、対中国へ

要求しているのである。キューバに要求してもムリだが、中国なら、この要求に応えねばならない位置にあるはずである。

★キューバとソ連

Far from breaking military ties with the soviet union, we are interested in establishing, if possible, even more military ties with the soviet union. (ソ連との軍事的結びつきを切れだなどとはもつてのほかだ。我々は、出来れば、まだまだ強力にしたいと思っている。)

これは、カストロが、キューバ婦人連合結成十周年記念講演で語ったことの中の一つの大きな部分を占める一部分である。83 Gramma より。八月二十三号には「FAR (革命武装勢力) の新将校一五七九名誕生」なるトップ記事の中に、「今年はそのうち二七五人の同志がソ連で誕生(直訳は graduated) 卒業なのだが、士官学校の卒業なのだから誕生とした)」ということも出ている。

このことから、「カストロは親ソ派で、どうしようもない」と言ったところで、革命が一步でも前進するわけではないし、そのような評価自身も正しくはないように思える。チェコ事件の時は、カストロは、ブルジョアジーへの屈服の道を歩む自由化派チェコ指導部へのソ連の革命の側への維持のための援助を支持し、その上で、ベトナムや朝鮮にも軍隊を送る用意があるか、と言った。この内容が親ソとは受け取れなかったように、今もまた、そうである。

レジス・ドブレが『革命の中の革命』で、ラテン・アメリカ革命の記述をその「攻撃性」においてなしていること、偉大な革命家ゲバラを生み出した、このキューバにあつて、カストロは、八月三十

日号 Gramma で、その攻撃的内容を一方で、「我々は、我々に対して侵略を組織するために領土を貸している国の領土に対しては、我々のあたうかぎりの革命戦争を持ち込む権利があることを考えるだろう」と言いつつも、米帝のグアンタナモ基地が、革命後の今でさえ、厳然としてそこにあることに規定され、他方では「だが、諸君も知っているとおおり、我々の武器は、不幸なことに、いちじろしく防衛的、まさに、いちじろしく防衛的なのだ」とも言っている。「我々はある攻撃的武器を持っていないが、だが攻撃的人間を持つている」と、大衆の攻撃性を極限まで、ひきだそうとはしているが、それでもやはり、米帝に対決してゆくには、ソ連との軍事的結合が必要だと言っている。「再び言う。我々はソ連との軍事的結合をたち切るどころか、出来れば、まだまだ強力にしたいと思つている。(拍手) ソ連は我々に最も必要な武器をくれた。なぜ強化せねばならないか、紳士諸君、いや、むしろこの際は婦人諸君もし、我々のやらねばならない他の努力に加えて、その武器の支払いまでしなければならなかったとすれば：だから、我々は、レーニン祭で、そんな犯罪者と闘わねばならない運命にある我々のような小国にとつてはソ連の存在がどれほど重要か、を述べたのです。(そのような犯罪者とは、ニューヨーク八月一七日、APによれば、一九六〇年にケネディはカストロ暗殺計画をしていたと、八月二三日にニューヨーク・タイムスが報じたことの中に、又いつでもグアンタナモ基地へのにせの攻撃の口実をつくつてキューバをやっつけようとならつていることの中に、又、ドミニカ etc. で見てきた、あの米帝のこと)

キューバとソ連の關係を見るならば、過渡期世界のプロレタリアートの物質的基礎が、極めてはっきりとわかるし、かつ、現在の共産主義とは、いかなるものでなければならぬかがわかる。

キューバは、ラテン・アメリカにおいて最も攻撃性を代表している。にもかかわらず、グアタナモ基地に対して一指も触れることが出来ない。米帝の恐威に対しては、キューバが頼らなければならぬのは、残念ながら、いまだ抽象性のうちにしかない世界プロレタリアートよりも、ソ連の軍事力なのである。一九六二年のカリブ海封鎖、キューバ革命圧殺の米帝の反革命から、キューバの革命を救ったのは、キューバ人民の武装ではなく、ソ連の軍事力であった。しかし、一般的な背景としてのソ連の軍事力ではない。直接的なソ連軍事施設、ミサイル基地 etc. の持ち込みであった。一般的な背景としてなら、ドミニカにだって作用している。だが、ドミニカの革命はほんの数日で米帝に打ちめ殺されてしまった。キューバは、自分の革命を守るためには、たしかに米帝を打倒するアメリカ人民の革命を期待し、そのような宣伝をしつつも、頼れるのは、ソ連しかないのである。そして、それは、中国ではないのである。中国は、現在、国際共産主義運動の左派を代表しているのに、なぜソ連でなければならず、中国ではないのか？それは、中国がキューバと同じく路線が左派で革命的であつても、敵階級との力関係における能動性確保の物質力が、キューバにもグアタナモ基地があるように、中国にはまだ台湾があるようなものではないからである。朝鮮も、ベトナムも、あと半分の解放が残っているのである。あと半分の追求としてある限り、半分さえも解放されない。キューバ革命防衛は左派路線一般では、出来ないシロモノなのだ。物質力として、国境を越えた革命の軍隊が直接出むかないかぎり、防衛できないのであり、中国だって台湾にこだわることなく、世界のどこへでも革命の軍隊を直接送る活動スタイルを持つておれば、(グアタナモ基地があるうが、一対一にそれに対応するだけでなく、根本関係を替えるためにゲバラが中南米に行ったように)、キューバは中国を頼ることが出来るかも知れないが、

そういう活動を行っていない段階の左派路線一般ではどうしようもないのだ。現在そういう活動をやっているのは、路線的には最も右派で、左派に対しては反革命としてもあつた、ソ連しかないのである。

第二次大戦後、民族国家という概念は、根本的変化をした。ベルリン、一七度線、三八度線、これらは、国境とは、軍事境界線のこととなり、という事態を作ったからである。その中で、恒常的に、民族国家の枠を越えて活動しているのは、一つは反革命の米帝である。それについて、ソ連軍である。ソ連軍が国境を越えたのは、コミンテルン二回大会当時のポーランド進攻(革命)、スペインへの国際旅団(反革命)、ベルリン進攻(反ファシズム戦略的反攻)、中国、朝鮮への対日戦参戦(同じく反ファシズム戦略的反攻)、キューバのミサイル基地建設(革命防衛)、非同盟諸国への軍事援助(反革命をも助けた)、ハンガリア制圧、チェコ制圧 etc. である。恒常的に、米帝のように基地を持つて活動しては、いないが、半恒常的に、国境を越えても活動している。

中国は、「資本主義への道」を歩むのに対して、「社会主義への道」を提示している。所有制度一般や、個人主義としての消費と生産力についてのソ連に対して、分業の再編を基礎に、集団として、大衆運動として共産主義の道を歩もうとしている。そしてこの六六年の文革以後の進撃は、ソ連をして、チェコ事件に対して、チェコは「資本主義への道」を歩もうとしているとして、その阻止の方へむかひめるように改造する視点をたしかに与えたのだが、しかし、その改造は全く不十分でしかない。ソ連では、チェコ事件の時、空前のデモが展開された。第二次大戦のながい経験から、「我々は、ファシズムに負けないぞ」と。この空前の大衆運動の中には、中国の紅衛兵ほどではないにせ

よ、革命を守るといふ、一本のすじが通っているのであり、この芽を、発展させるほど、改造への方向を提示しきれていないのは、中国が、共産主義について、即ち、労働の本質について、ソ連のものよりはるかにすぐれているものを持っているにもかかわらず、それを、米ソの活動スタイルに対応しうる領域の中で展開しえないからである。即ち、世界革命戦争の中で。（朝鮮、アルジェへの義勇軍派遣の経験もあるのだから）

我々は世界革命戦争の中で、ソ連へは共産主義を、中国へは活動スタイルを、キューバへは両方を、強力に注ぎ込み、革命するように働きかけねばならない。カストロは、モンカダ襲撃一七周年記念講演の中で、「そうだ！我々すべては一緒だ！ラテン・アメリカ人民は団結した。インドシナ人民もそうだ。革命的人民もそうだ。そして合衆国人民とも一緒だ。我々は勝つ。必らず勝つ」と、アメリカのさとうきび刈り旅団へのメッセージとして語っている。働きかけのきっかけは、このアメリカにある。中国も九大回二中委で、「戦備」と「世界の革命勢力」に目をむけている。ソ連にさえ、チェコ事件以来の再編、ベトナム↓インドシナ革命戦争とアラブ・ゲリラを通じた再編、革命の側からのゆさぶりが作用しているはずである。

この攻撃型革命の時代に、反革命の脅威を受けながら、革命を守り、又、戦っている人々にとって、帝国主義国プロレタリア人民は期待の対象ではあっても、頼りの対象ではないこと、そして、その頼りの内容は、革命的ではなく、防衛的なものでしかないという構造の中で、期待の対象である我々が、自らを世界党―世界赤軍に高め、労働者国家をも防衛的なものからその中へくみ込み、吸収し、ゆくための闘い、それが現在の共産主義である。労働の本質の学習サークルは共産主義ではない。

本質は自己展開しない。歴史の中に本質が展開する。現在の歴史にふさわしい共産主義の内容をもたないかぎり、口先の批判は意味をもたない。それから見れば、カストロの発言が「ソ連との一層の軍事的結合」であったとしても、けざらぬものではないと思う。（九／一八）

⑦第二次大戦中、後のヨーロッパ・パルチザンについては、それが敗北したのだが、その再生と、敗北の総括をふまえた上での、勝利的登場を要求している。

「シオニスト国家イスラエルの形成は、ブルジョア・ヨーロッパの社会と歴史が何の脱出口ももたない絶対的な袋小路の世界にすぎなかったことを明らかにしている。パレスチナ・アラブ大衆を暴力的に排除して今日実現されているイスラエルとしてのユダヤ人ブルジョア民族国家は、ブルジョアのヨーロッパという歴史世界が、その歴史的社會を救出する能力をもつどのような階級ももちあわせていなかったことをユダヤ人国家の姿をとって体現している。」（『現代の眼』（一九七〇年）七月号、浦田伸一）という、浦田氏は、マルクスの一八四八―四九年の『永続革命』の挫折と、一九世紀末―二〇世紀にかけての帝国主義の形成期に、植民地支配を通じた民主主義の暴力と反動への転化、それを境とよむキリスト教のブルジョアのヨーロッパ史の帝国主義的思想として、一八九四年。ドレフユス事件を中心とする反ユダヤ主義、ユダヤ人迫害、これに対抗しての、一八九七年第一回シオニズム世界会議、これに内実を与えたヨーロッパ・プロレタリアートの一九二〇―三〇年代の全面的敗北、つまり、ナチス・ドイツの中欧全体に対する覇権の確立とユダヤ人六〇〇万の殺戮、更に、一九四七年一月の国連のパレスチナ分割案採択、一九六七年六月戦争に至る過程を述べているが、何の脱出口ももたない、全ブルジョア・ヨーロッパに対抗しているパレスチナ・アラブ革命勢力は、第二次大

戦後期に、何とか脱出口たらんとしていた、ヨーロッパ・バルチザンが、敗北したとはいえ、あったのであり、この旧勢力の再生と勝利への新しい革命勢力の登場を、彼らが全ヨーロッパをゆさぶる中で、必然的に生みださずにはおかないと思うので、又、彼らの闘いに呼応して闘うヨーロッパのプロレタリア革命勢力の登場をどうしても登場させねばならない以上、彼らの出生の秘密をとくために、どうしてもヨーロッパ・バルチザンの敗北の歴史を総括しておかねばならないので、その事を述べる。

仏では米軍の進駐下に、ドゴールがロンドンから帰国し、政府を形成し、最初の行動として、マキの武装解除——武器引き渡し——国民軍への統合を要求する。フランスのレジスタンス期は、ロンドン亡命政府は軍隊なき政府であり、フランス内では共産党系のマキと、亡命政府系のバルチザンとの連合であったが、マキの方が、圧倒していた。マキはこれを拒否する。(スペインのPOUMの共和政府参加、スターリン主義正規軍への敗北の二の舞拒否として総括されていたかどうかは知らない。)ところが、トレーズが、モスクワから帰国して、承認させる。それと引き換えに、総選挙実施——内閣参加に到るが、この武装解除をもって敗北したのである。ここが、内戦——ヨーロッパ革命戦争か、米軍の承認——マーシャル・プラン、NATOへの収束かの分岐点であった。

伊では、米軍進駐下で、それに対する態度をめぐって、総選挙が激しい政治的対立下で実施される。伊でも、バルチザンは武装して存在していたが内閣参加——マーシャル・プラン、NATOへの敗北であった。ユーゴは、仏、伊の日和見路線を批判し、チトーはヨーロッパの最左派として、スターリンとも対立して、独自路線をとり、武力解放路線の下に、ギリシャのバルチザン戦争を支援し、その根拠地としての役割りを果たすが、ソ連の傍観、アメリカとの取り引き、米の本格的介入、アドリア海

封鎖による孤立のために屈服し、ギリシャの敗北とユーゴの「独自の道」↓変質が始まる。

ヨーロッパは、第二次大戦の終末から、ヨーロッパ革命戦争に転化するか、米軍に敗北・屈服し、米・ソの分割と拮抗に転化するかの分岐点にあった。帝国主義の軍隊と、ソ連軍に対する独自の統一したヨーロッパの革命軍の建設、スペイン市民戦争で非スターリン左翼にとわれ、答えることなく敗北し、ヨーロッパの運命は地獄の強盗戦争に転化し、この中からようやく這い出つつあったものも、バラバラのバルチザンでしかなく、中共が、スターリンの蒋介石援助にもかかわらず、八路军の改造、共産主義への大改造、蒋介石軍の同一化を行なったことと比べてみれば、非常に遅れているが、しかしこのバルチザンの中しにヨーロッパ革命勢力形成の芽はなかったのである。

パレスチナ・アラブ革命勢力は、全ヨーロッパをゆすぶり、対帝、対ソに独自な、一つの革命勢力の登場をうながす芽である。仏の五月以降の、プロレタリア左派(レッド・パンサー)の都市ゲリラ、伊の同様の勢力、これらは、かつてのヨーロッパ革命勢力の敗北の総括の上に新しいものを見い出す、というよりは、自己に無自覚のようである。

第二次大戦後大きく登場した、アフリカの革命勢力、彼らをも含めて、ヨーロッパ革命勢力が、パレスチナ・アラブ革命勢力と統一した武装勢力に自らを高めねばならない。

⑧①⑦で、第二次大戦反ファシズム勢力の戦略的反攻勢力を、それぞれの革命について、述べてきたわけだが、総合して述べるならば、パレスチナ・アラブ革命勢力の要求をせんじつめれば、「国境の廃止」ということになる。まさに、第二次大戦後世界は、かつての民族国家の概念を根本からくつがえした。ブルジョア自身自身が、そうなのである。米帝の活動スタイルを見よ、これに對して、

マルクス主義戦線、世界革命勢力の方が、全く遅れているのである。国境を越えた革命を保証しなければならぬのは、一国的に解放を勝ちとったところでなければ、十分には出来ない。一国的にさえ解放していかないのに、世界を、といったところで、だれも信頼しない。だが、パレスチナ・アラブ革命勢力のように、一国も世界も同じだ、と、その革命の始めから言いうる勢力の登場は、我々にとって、全世界プロレタリア人民にとって、非常に良い事である。七名の同志が北鮮からヨルダンへ行く事は、現在の世界革命戦争の二大焦点のインドシナーアラブ間をつなぐ事、即ち、それを媒介に、全世界を獲得する一歩となるのである。かつては、事件が伝播した。今度は世界赤軍―世界革命戦争の魂と肉体が伝播する。この事は、世界革命戦争にとつての多大な貢献である。日米蜂起も、アジア太平洋地域をめぐるブルジョアジーからする第二次大戦後世界の再編へのプロレタリアートの側からする転覆への着手であり、この事は、日米にある程度定着した。よど号 Hijack King で、北朝鮮へ、そして、周恩来の日中覚え書貿易の談話や、中共二中全会の動きにあるように、そこへも影響力は与えている。パレスチナ・アラブ革命勢力との結合は、そこを媒介に全ヨーロッパ、及び、アフリカへも、第二次大戦後世界を根底から転覆させるものとしての世界赤軍―世界革命戦線の世界革命戦争を伝えることになる。アジア、太平洋をめぐる革命と、パレスチナ、アラブ、ヨーロッパ、アフリカをめぐる革命が、一つのものとしての運動論を持ちえず、とりわけ、ヨーロッパが、常に、我々の場からは欠除していたが、このことによって、全く一つのものへ統合しうる一歩が出来るのである。

⑨以下、略、

★国境

キューバ共産党中央委員会機関紙 Granma の一九七一年七月一八日号で、キューバの四人の漁民が米帝海軍によって不法にも Dry Tortugas 沖三五マイルの地点で逮捕され、その釈放を勝ち取った時の大集会で、カストロが演説したことについて述べている。その中の一部分を訳出してみよう。

我々は、我々の漁民たちが排外的禁漁区にはいなかったことは明らかであると言った。

我々は、この問題ははつきりさせようと思う。なぜなら、我々はここで漁業制限について語っているのではないからだ。合衆国は、九マイル制限を三マイルの領海制限に加えて、計一二マイルでもってその排外的禁漁区としてきた。わが国はその一二マイル制限を考慮している。ここでは制限について語っているのではない、そうではなくて、我々の漁民たちは、これらの制限のはるかかなたで逮捕されたという事実について語っているのだ。

彼らは Dry Tortugas から一二マイル以内にはいなかったと言われた。どんな地図をひろげて見ても、我々の漁民たちが操業していた深さが Dry Tortugas から少なくとも三〇マイル以内にはない。第二に、Dry Tortugas の光は一八マイル離れた地点から見えるが、我々の漁民たちのいた所では光は見えなかった。どんなに計算したって、どう見ても、一二マイルをはるか離れていたことは明らかだ。こんな事が起ったのは、今度で二回目だ。

では、我々の立場はどうか、我々の漁業制限区域についての立場はどうであろうか？

今日、ラテン・アメリカのいくつかの国では、ある漁業制限区域のための闘争を起している。な

ぜなら、それらの国は非常に海洋資源にめぐまれているからである。貧しい国であり、産業は低く、合衆国のような多くの資源は持っていない。合衆国は産業も発達し経済的資源もある金持の国であり、デッカイ艦隊でもってそれらの海洋を侵略し、天然資源を奪い、実際に、全部もっていつちやって、沿岸諸国の開発の可能性をなくしてしまうからである。

これは我々の立場ではない。我々の国には沿岸に漁業資源が多くあるわけではない。我々は大洋や、大漁場、まぐろ、たら、さけ、ハッドドック（たらの類）等々の大漁場へ出かけて行かねばならない。ハッドドックはデッカイ魚だが、ずいぶんいたころもあつた。しかし、非常に空想的な値でハッドドックのヒレ肉を出す独占的レストランがあつたのを思い出す。それは最高級の魚だと思われていた。非常に多くいたので人はハッドドックにアレルギーをもよおすほどさえあつた。さて、私が言いたいのは、ある公海に行けば大きな漁場の可能性があるし、まさにそこへこそわが舟団は出かけて行かねばならないんだということなのだ。

今や、しかし、我々は二つの立場のどつちかを選ばねばならない。もし、狭い民族的観点から、我々がチリやペルーのような国の立場に反対するならば、それはヤンキー帝国主義とぐるになつて我々自身の利己的利益を守るということになつてしまふだろう。我々はこんなことを許してはならない。我々の国際主義者としての精神と、マルクス主義者、社会主義者、革命家、ラテン・アメリカの自覚が、ラテン・アメリカの他の国の利益を考えるようにさせるのだ。（拍手）

とにかく、我々は偉大な人間性の一部——ハバナ宣言に示されているように——そしてそれを帝国主義者どもは引き裂くためには何でもやつたが、その中にある。我々は忘れてはならない、やつらが

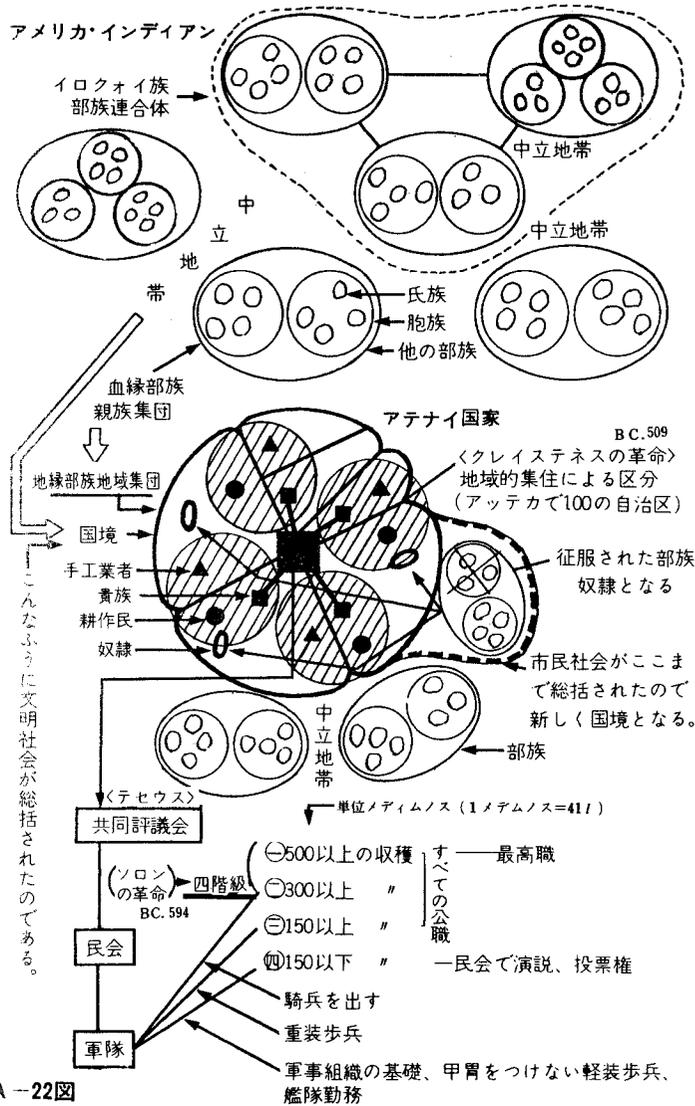
わが国を攻撃し砂糖のわけ前を持ち去つた時、——そして後で他人にわけたのだが——それはラテン・アメリカのゴリラ政府どもを悪事に加わらせるためだつたのだという事を。今、やつらは再び同じことをやっているのだ。やつらは問題のあるときはいつも、砂糖のわけ前や、同様の物を持ち去るためにおどしをかけるのだ。

我々は、我々の外交政策の原則にもとづいた路線に従うので、チリやペルー人民の天然資源防衛の闘争の中での要求、立場、意見を支持する。彼らは排外的漁業権を二〇〇マイル区域と言っているが、我々は彼らの立場を支持する。

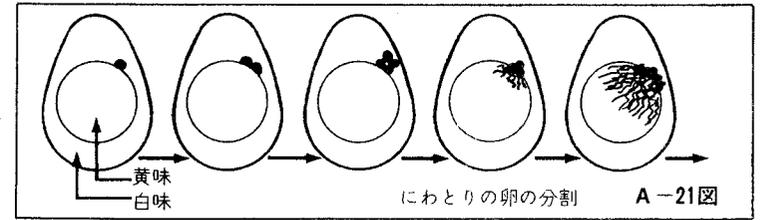
しかしながら、我々はそのここではそれを支持し、こちらでは別の立場を維持するということは出来ない。我々は首尾一貫した路線を持たねばならない。もし他の国が制限を広げると、我々はそれを考慮しなければならなくなるだろう。あるケースでは、我々の舟がそこで漁業をしているのでそうしたこともあつたが、それは、我々に対する敵対行動であつた。これは別のラテン・アメリカの国がやつたのだが、それは今問題の本すじではない。

この点に関しては、我々は一貫して、最も貧しく、最も発展の遅れた、最も資源のない国の利益になる立場をとつてきた。ラテン・アメリカの他の国——とりわけ民族解放の道を進んでいるラテン・アメリカの国との連帯から、——我々は彼らの立場を支持するのである。

だから、我々は合衆国の作る権利について語っているのではないのだ。一二、二〇、四〇、何マイルだと決めよう——たとえ二〇〇マイルと決めてさえ——制限を。もしある日そんなことをすれば、我々はこれらの海洋を真二つに割るだろう。我々は二〇〇マイルもはなれた所にはいないんだからへ



A-22図



〔米国からキニーバまでのこと〕我々はやれる事は何でもやるだろうし、セイル
フィッシュ（うばぎめなど、大きな背びれを有する魚類）、ソードフィッシュ（ヘ
ードは刀）、ブルー・マリン（青い、二子よりの細綱のような魚）等々をとるだ
ろう。これが我々の立場だ。

我々は、我々の立場が何であり、なぜその立場をとるのかについてはつきり理
解していなければならぬ。我々は民族的利益にのみとなく立場をとってはな
らない。長い過程では、我々は、我々の最良の利益は、反帝解放闘争を闘う人民
の利益のことであると考える。ラテン・アメリカの全人民の利益をもたらずもの
こそ、それが何であれ、我々自身に利益を最もよくもたらすのだ。（拍手）

このカストロの演説は、現代過渡期世界における国家、および国境についての
興味ある問題を含んでいる。

未開の下位段階で、まだ国家のなかったころの事について、エンゲルスは次の
ように言っている。「ところで、アメリカのインディアン部族を特徴づけるもの
は何であろうか。一、独自の領域と独自の名前。各部族は、その現実の居住地の
ほかに、なお狩猟と漁撈のためにかなりの領域を占有していた。その外側には広
大な中立地帯があつて、これは隣接部族の領域にまでたつし、言語の近い部族間
ではやや狭く、言語の遠くない部族間ではやや広かつた。これは、ドイツ人の境

界林、カエサルにでてくるスエウイ族がその領域のまわりにつくった荒野、デンマーク人とドイツ人とのあいだの Jarnholt (デンマーク語では Jarved)、[ラテン語では] Jimes Danicus [ドイツ人の境界]、ドイツ人とスラヴ人とのあいだのザクセンの森と、ブランデンブルクの名の由来する Branhor (スラヴ語で防衛林の意味) にあたるものである。このように不確定な境界で区分された領域は、部族の共有地であつて、隣接諸部族からもそのようなものとして認められ、この部族自身がそれらを侵害から防衛した。境界が不確定なことは、たいていは人口が大いに増加したばあいにはじめて、實際上不利なものとなつた。」と。

原始以来、この「広大な中立地帯」は、徐々になくなり、国家が生み出されるや、国境として、線のみが残されて、今では全地球上の南極大陸を除く全陸地は分割され尽した。だが、まだ、大洋が残っている。海は、今日でも、領海と公海にわかれていて、公海とは、まさしく「広大な中立地帯」である。ところで、この広大な公海が、今や狭められつつある。そこで、我々は、国境とは何か、という事を歴史的に考察する中から、国家とは何か、現代過渡期世界における国家とは何か、更には、これらの国家はどうなるのかについて見てみよう。

ところで、国家による地球上の分割は、どのように進行して来たのであろうか？それは、例えてみれば、にわどりの卵の分割のようなものである。図示すれば、A—21 図のようになる。

エンゲルスは次のように言っている。「文明の発端をなす商品生産の段階は、経済的にはつぎのもの導人によつて特徴づけられる。すなわち、(1) 金属貨幣、それとともに貨幣資本、利子、高利貸付、(2) 生産者間の仲介的階級としての商人、(3) 私的土地所有と抵当、(4) 支配的な生産形態としての奴隷労働。

文明に照応し、文明とともに確定的に支配的となる家族形態は、単婚であり、男性の女性にたいする支配であり、社会の経済的単位としての個別家族である。文明社会を総括するものは国家であり、この国家は、標準的な時期にはいつも例外なく支配階級の国家であり、どんなばあいにも本質的には、抑圧され搾取される階級を抑圧するための機関であることに変わりはない。文明に特徴的なものは、そのほか、一方では、全社会的な分業の基礎としての都市と農村との対立の固定化であり、他方では、財産所有者がその死後にも自分の財産を自由にできるようにする遺言制度の導入である。」「(起源)」

「文明社会を総括するものは国家」だが、にわどりの卵の分割で見たように、文明社会は地球上で等しく発展するのではなく、一ヶ所から徐々に地表を被っていくのであり、まだ文明社会でない未開野蛮社会を総括しない時期がある。国境とは、では何か？まさに、文明社会を国家が総括するその総括の及ぶ範囲のことである。その総括は、支配階級が行なつており、階級支配の道具としての国家権力によつて総括しており、その総括の仕方は、(1)(2)(3)(4)などを基礎とした階級支配として総括されているのである。

文明社会を国家がいかにかに総括したのか、先ずこのことを未開からの移行の中で見てみよう。

A—22 図のアテナイ国家について、図だけではちよつと説明不足なのでエンゲルスの言う事で、簡単に見ておこう。

「氏族制度の諸機関は、一部が變形され、一部が新しい諸機関の割り込みによつて押しつけられ、そしてついに真の国家官庁によつて完全に置きかえられた」

「英雄時代には、アッティカにいたアテナイ人の四部族は、まだ離ればなれの領域に住んでいた。

それらを構成する十二の胞族でさえ、ケクロプス（アッティカ部族の伝説上の祖先）の十二の都市にまだ別々の居所をもっていたようである。その制度は英雄時代のもの、すなわち、民会・民衆評議会・バシレウスであった。（注、この三つについては、第四章ギリシャの民族で分析しているが、そこでの部族や部族団の制度である。常設の機関は評議会。元来はおそらく氏族の首長たちで構成されていたらしいが、のちにその数が多くなりすぎてからは、選出によることとなり、それが、貴族的な要素の形成と強化に機会を与えた。民会。イロクオイ族では、民衆が男も女も会議の集会をとりまいて秩序ある仕方でも議論に加わり、こうしてその決議に影響を与える。ギリシャでは、この民会は、重要事項を決定するために評議会によって召集され、男子はだれでも発言することができた。この決定は窮極的に最高のもの。バシレウス。軍指揮者。軍事的職権のほかに、なお補官と裁判官の職権をもっていた。）書かれた歴史がさかのぼりうるかぎりでは、土地はすでに配分されて私有財産に移つていったが、これは、未開の上位段階の末期ごろにすでに比較的発展していた商品生産とこれに照応する商品取引に、適合したものである。穀物とならんで、ぶどう酒と（オリーブ）油がつくられており、エーゲ海での海上貿易では、ますますフェニキア人の手から奪われて、大部分がアッティカの手に歸していった。所有地の売買によって、また農耕と手工業との、商業と航海との分業の進展によって、種々の氏族・胞族・部族の所属者たちはたちまち交錯して、胞族や部族の区域は種々の住民を受け入れざるをえなかったが、それらの住民は、同じ民族のものではあつても、これらの団体には所属していなかったもので、自分の居住地にいながら、よそ者であつた。なぜなら、各胞族や各部族は、平時にはその関係事項を、アテナイの民衆評議会やバシレウスに送りこまずに、みづから処理していた。とこ

ろが、胞族または部族に所属しないでその領域に住んでいたものは、とうぜんこの行政にまったく参加することができなかつたからである。

このため、氏族制度の諸機関の規則的な運営は混乱におちいり、すでに英雄時代にその救済が必要となつた。テセウスによるといわれる制度が採用された。その変更の要点は、なによりもまず、アテナイに中央行政機関が設置されたこと、すなわち、これまで部族が自主的に処理してきた事項の一部が、共同のものであると宣言されて、アテナイにある共同評議会に移管されたことである。これによつてアテナイ人は、アメリカのどの原住民族よりも一歩前進した。すなわち、となりあつて住む諸部族のたんなる連合体にかわつて、それらの単一部族団への融合が生じた。これによつて、部族や氏族の法慣習に優先する、アテナイの一般的な部族法が生まれた。アテナイ市民は、異部族の領域においても、アテナイ市民として一定の権利と新たな法的保護を得ることとなつた。しかしそれとともに、氏族制度の掘り崩しへの第一歩が踏みだされた。なぜなら、それは、アッティカのどこにいても異部族者であつて、これまでもアテナイの氏族制度のまったく外部にいたものを、のちに市民として認めるようになる第一歩だつたからである。テセウスによるといわれる第二の制度は、全民衆を、氏族・部族・胞族にはかかわりなく、エウパトリダイすなわち貴族、ゲオモロイすなわち耕作農民、デミウルゴイすなわち手工業物、の三階級に区分して、公職就任の排他的権利を貴族に付与したことであつた。なるほどこの区分は、貴族による公職就任を除けば、効果なしに終つた。それが、これ以外では階級間に権利の差を設けなかつたからである。しかしそれは重要である。というのは、それは、ひそかに発展してきた新しい社会的諸要素をわれわれに提示しているからである。それは、氏族の公職

に一定の家族が慣習的に就任していたことが、すでにその公職にたいするこれらの家族のほとんど争う余地のない要求権にまでなりきっていたこと、そうでなくとも富によって有力なこれらの家族が、その氏族の外部で独自の特権階級に結束しはじめたこと、そしてようやく芽ばえたばかりの国家が、この越権を神聖化したことを示している。さらにそれは、農民と手工業者との分業がすでに十分強化されていて、氏族や部族による古い編成にたいして、社会的意義における優位を争うまでにいたったことを示している。最後にそれは、氏族社会と国家との両立しがたい対立を宣言している。国家形成の最初の試みは、各氏族の成員を特権者と被冷遇者とに、そして後者をさらに二つの職業階級に分け、こうして相互に対立させることによって、氏族を引き裂くことにある。」

「この制度は、氏族制度を二重に攻めたてた。第一には、それが、武装した民衆の総体とはすでもはやそのままでは一致しない公権力をつくりだしたことによって、そして第二には、それがはじめた民衆を公的的目的のために、親族集団によらずに地域的集住によって区分したことによって。それが何を意味することになったかは、のちに示されるであろう。」

「評議会は、その成員が各部族から百人ずつで、四百人にされた。したがって、ここでは部族がなお基礎であった。しかしそれはまた、古い制度が新しい国家団体にとり入れられた唯一の側面でもあった。なぜなら、その他の点ではソロンは市民を、その所有地とそこからの収穫によって四つの階級に区分したからである。すなわち、五〇〇、三〇〇、一五〇メデムノス（一メデムノスは約四一リットル）の穀物が、はじめの三階級についての最低収穫量であった。所有地がそれ以下または全然ないものは、第四階級に属した。すべての公職には上位の三階級のものだけが、最高の公職には第一

階級のものだけが就任することができた。第四階級は、民会で演説し投票する権利をもっただけであるが、しかしすべての公職者はここで選挙され、彼らはここで報告をしなければならず、すべての法律はここでつくられ、そして第四階級はここで多数派をなしていた。貴族政的特権は、富の特権という形態で部分的に更新されたが、しかし民衆が決定的な力を保持していた。さらに、第四階級は新しい軍事組織の基礎をなしていた。はじめの二つの階級は騎兵をだした。第三階級は重装歩兵として勤務しなければならなかった。第四階級は、甲冑をつけない軽装歩兵として、または艦隊に勤務しなければならず、そのばあいにはおそらく給料も支払われたらしい。」

「商業と、奴隷労働をつかっていますますます大規模にいとなまれる手工業および工芸とが、支配的な営業部門となった。人びとはヨリ開明的になった。当初の残酷な方法で自分たちの同市民を搾取するかわりに、主として奴隷とアテナイ外部の顧客とを搾取した。動産、すなわち貨幣の富と奴隷や船舶の富は、ますます増加したが、しかしそれは、いまではもはや初期の偏狭な時代におけるように、所有地の獲得のためのたんなる手段ではなくて、自己目的となっていた。それにつれて、一方では、古い貴族勢力にたいして富んだ手工業者の、新たな階級が競争して勝利をおさめるまでに成長し、しかし他方ではまた、古い氏族制度の遺物が最後の基盤を奪われた。」

「貴族は以前のその特権を奪還しようと試み、一時はふたたび優位を占めたが、ついにクレイステネスの革命（紀元前五〇九年）が貴族を最終的に転落させた。だが、それとともに氏族制度の最後の遺物をもまた。」

クレイステネスは、その新制度において、氏族と胞族にもとづく古い四つの部族を無視した。それ

らにわたって、すでにナウクラリアで試みられたような、たんなる居住地による市民の区分にもとづき、まったく新たな組織が現われた。もはや血縁団体への所属ではなしに、居所だけが決定した。民衆ではなく領域が区分され、住民は政治的には領域のたんなる付属物となったのである。

アッティカ全域は百の自治区、デモスに分けられ、そのおのおのは自治行政をおこなった。各デモスに居住する市民（デモテス）は、彼らの首長（デマルコス）と財務官、ならびに小さな係争事件について裁判権をもつ三十人の裁判官を選出した。彼らはまた、自分たちの神殿と守護神または英雄をもち、その神官を選挙した。デモスでの最高権力はデモテスの集会にあった。それは、モーガンが正しく指摘しているように、アメリカの自治的な市町村団体の原型である。近代国家がその最高の完成において達成するのと同じ単位をもって、成立しつつあるアテナイ国家ははじまったのである。

この単位すなわちデモスが十で一つの部落を形成したが、これは古い血縁部族と区別するため、いまや地縁部族とよばれる。この地縁部族は、自治的な政治団体であるばかりでなく、軍事団体でもあった。

以上がA—22図のアテナイ国家のおおまかな説明である。

「国家は市民社会の総括」と一言で言うが、じつは、これほど複雑なわけである。アテナイ国家はまさに文明社会を以上のように総括したのである。

さて、ところで、社会を国家が総括するその総括の及ぶ範囲が、国境であると言ったが、それは、現在どのような問題を含んでいるのであろうか？総括の内容と国境とは密接不可分である。国家は、

池に石を投げた時出来る波の輪が、除々に拡大する、輪の内側にくみこまれた所が国家で、内部が文明社会で、外側が未開社会で、輪が国境である、といったぐあいに単純に地表を分割してはいけなかった。文明社会の総括の仕方にも、大きくわけて四つ、即ち、奴隷所有者が奴隷を抑圧するという仕方、社会を総括する古代国家、貴族、封建領主が農奴・隸農的農民を抑圧するという仕方、社会を総括する近代代議制国家、そして労働者階級解放のためにその目的のために社会を総括するプロレタリアート独裁国家である。このような、総括の内容と共に、国境も当然変化した。しかもそれは、一元的にはなく、多面的に、即ち、多くの国々が、互いに他の国々と戦争をくりひろげながら、ある国は滅亡し、ある国は分割され、ある国は拡大しながら、である。

ここで、現代過渡期世界における国境についての観察をして、そこから、将来のプロレタリアート独裁国家は、社会をいかに総括していかねばならないかについて考えてみよう。

★1 分裂国家といわれる国家の国境の分析について

東西ドイツ、南北ベトナム、南北朝鮮の国境は、決して両分裂国家の総括の及ぶ範囲としての国境ではない。東西ドイツの分割は、第二次大戦末期のソ連軍のスターリングラード攻防戦後の戦略的反攻がソ連軍のベルリン進攻にまで及び、東欧の人民民主主義革命を誘発しながら進んだことと、他方、米軍がノルマンディー上陸を行なって以後、西欧を自己のヘゲモニーで再編していったことの、この二つの世界的関係の結果であり、その直接的表現は、NATOとワルシャワ条約である。NATO軍

とワルシャワ条約軍の対峙の結果、これが東西ドイツにあらわれているのである。三八度線は、朝鮮の抗日バルチザンと、中国の援朝義勇軍、ソ連の軍事援助など対、朝鮮の資本家、地主等、日帝の植民地支配の残り、日帝にかわる米帝、その米帝へ軍事協力する日帝（朝鮮特需）、といった、国際的対立の結果である。一七度線も、抗日↓抗仏革命戦争、それへの中国、ソ連の援助対、ベトナムの資本家、地主、反動、仏帝の植民地支配の残り、仏帝にかわる米帝、そして今日では、この米帝に、更に衛星国が加わった（韓国、オーストラリア etc.）、国際的な対立の境界なのである。

我々は、今日、世界には、単なる民族国家の国境以外の、全く質を異にする分裂国家の存在するという事実から、次のような結論を導かねばならない。これからの社会の総括は、世界的な総括でなければならぬ。分裂国家の片方は、日米安保とか、NATOとかSEATOとか、国際革命同盟が形成されており、このような国際革命同盟がこの片方を総括している。もちろん、のつべらぼうにはなく、その内部には、民族国家としての市民社会の総括の仕方を含んだ、複合的、立体的なものである。これに対して、もう一方の方も、プロレタリア国家という形での市民社会の総括と、プロレタリア国家とプロレタリア国家の同盟、援助関係、等によって複合的、立体的な形での総括が行なわれている。我々は、この世界的な革命勢力の、世界一国的な複合的、立体的構造を、世界プロレタリアート独裁として総括し、目的意識的に形成して行かねばならない。

しかしながら、今日、プロレタリア人民の戦列は、決してこのような目的意識性につらぬかれてはいない。それは、マルクス・レーニン主義の国家論が、過渡期世界において止揚されておらず、ブルジョア国家の権力奪取とプロレタリア権力の樹立以後は、このプロレタリア国家には何の意識性も与

えられず、国家死滅についての過渡期のオシャベリの袋小路しかなく、この袋小路からの脱出も、自分自身に自覚的ではなくて、敵に規制された考え方であり、強い敵に対する団結した力として、プロレタリアートの世界的連帯以上のもではない。レーニンが、四月テーゼで、人民は自分自身に無自覚なので、「全権力をソヴィエトへ」のスローガンの下に、人民の作った新しい国家ソヴィエトの意義を理解させるようにしたが、今日でも、この方法論的意義は同じである。味方自身の論理を目的意識的に追求する事が今日ほど要求されている時はないのだ。

★2 民族国家の国境について（資本主義国中心）

分裂国家の国境の行き来が、ほとんど全く出来ないのと比べて、普通の民族国家の国境は今日、非常に出入りがはげしい。我々は、この出入りのはげしい国境について見てみよう。

アテナイ国家の成立過程は、「氏族制度の諸機関は、一部が変形され、一部が新しい諸機関の割り込みによって押しつけられ、そしてついには真の国家官庁によって完全に置き代えられた」といった形だった。これは、そのまま、現在の民族国家から、新しい、世界プロレタリアート独裁国家への発展過程の論理としても通用しないだろうか？即ち、民族国家の諸機関は、一部が変形され、一部が新しい諸機関の割り込みによって押しつけられ、そしてついには真の世界プロレタリアート独裁国家によって完全に置き代えられる」といった具合に。このような発展過程で、現在は、一部が変形され、一部がまだ新しい諸機関の割り込みによって押しつけられてはいないが、そういった割り込みは始まっている段階である。

この事を、出入りのはげしさとの関係で見えてみよう。

A—22 図の説明のエンゲルスの文を見て欲しい。「アテナイの四部族は、まだ離ればなれの領域に住んでいた」のだが、「分業の進展によって、種々の氏族・胞族・部族の所屬者たちはたちまち交錯して」しまった。今日の民族国家も、分裂国家の国境以外の所では、プロレタリア国家、資本主義国家のいかんをとわず、ただし圧倒的に資本主義国家の国境において、この「たちまち交錯」にあたる、出入りのはげしさを見ることが出来る。氏族制度は、この交錯を解決するいかなる能力をもたなかったたので、まさに、この交錯—階級対立の非和解の産物として国家（古代国家）が形成された。交錯を解決するために、「アテナイに中央行政機関」が設置されたのである。ところが、今日においても、政治は主に民族国家の内部で行なわれており、交錯によって生じる問題は、せいぜい民族国家の外交として処理されるにすぎない。だが、このように、民族国家の仕事の一部が、外交としてとび出し、外交と外交の共同機関が、民族国家の諸機関の変形として形成されるや、それは、それ独自の論理を持って展開する。

第一次大戦のように、もまやブルジョア民族国家とブルジョア民族国家の交錯が強盗戦争という交通形態にまで発展し、一国では解決しえないことを告白するようになるや、世界的な機関として、国際連盟が出来た。第二次大戦後は、国際連合が。それに、いくつかの地域集団も、NATO、安保、ワルシャワ条約、EEC、等々、国際的機関は無数である。

ここでは、国連をとりだしてみよう。この国連は、圧倒的に古い民族国家の論理に、まだ、作用されている。だから、国連という新しい機関でありつつ、古い米軍が、朝鮮や、コンゴに侵略活動にお

もむいたりした。イスラエル国家を、パレスチナ分割の上にデッチあげたのも国連であった。

民族国家では解決しえないが故に、国連が生まれたとしても、生まれた国連がそれを解決しうるものであるとは限らない。アテナイの共同評議会といえども、生まれた当初はほとんど氏族制度にのっかっていたのであり、ソロンの革命や、クレイステネスの革命などによって、何回も、「一部が変形」されて、古代国家になったように、国連も、まだ、ほとんど民族国家にのっかっていて、国連の性格も、変わっている。かつて、米帝は朝鮮、コンゴへ、国連軍の名で米軍を送ったが、そのような事は出来ず、ベトナムの反革命を国際的幻想で正当化することが出来なくなり、米軍は米軍として反革命に登場し、単にこのような価値感におけるヘゲモニーの低下のみならず、戦場での敗北は、米帝にのっかった国連の性格を変えざるをえない。そして、中国の国連参加で、それは一層促進される。

僕は今、ここで、国連を変形して、それで世界国家を作ろうなどということのための処方箋を書いているのではない。世界を、民族国家で総括することが増々出来なくなりつつあること、そして、では、この「交錯」という、民族国家をはみだしたものを、どう総括して行かねばならないのか、ということを考える材料を、今は考えているだけである。少なくとも、世界を世界として総括しなければならぬという事が、ブルジョアジーにとっても、プロレタリアートにとっても問題になっているという事を示しただけなのである。しかし、この問題は共通だが、解決の仕方、それが違うのである。ブルジョアジーは、古代社会、封建社会、近代代議制国家という一貫して私有財産を守るとい

から抜け出しえず、プロレタリアートは、その止揚として、全く異なった社会の総括の仕方を考え、進んで行くのである。今は、その交差が起りつつある事をしっかりと把握していればいい。アテナイ国家は、生まれてまもなく滅んだように、かつての国際連盟も滅んだし、今の国連も滅びることもあるのだし。ただ、アテナイ国家は滅んでも、以後、国家は生長して行ったように、それとは全く内容はちがうとはいえ、やはり、現在の国際的機関、世界的機関は滅びても、世界プロレタリアート独裁として世界を総括する機関は形成されるであろうし、我々は、それをこそ追求すべきである。

では、この、新しい機関のわり込みは、何によって、どう行なわれて行くのか？その一部は、分裂国家の国境の分析の方からやってくる。ブルジョア民族国家とブルジョア民族国家の国境の出入りがはげしく、分裂国家の国境の方がほとんど出入りがない（三八度線などそんなことがあればすぐ銃殺される）、という事は、今日、前者の国境よりも後者の国境の方がより国境的であるし、又、前者の国境は後者の国境よりも国境としての意味をもたなくなりつつあるという事だから、より国境的である所にあらわれる新しいもの、そこに目をむけるのが一番科学的である。

それは何か？

ベトナム—インドシナの革命戦争、国境を越えた革命戦争を最先鋒とする世界革命戦争である。

さて、今までは、メモ—（国家の形成過程と、物語に登場する英雄兵士達の位置の概観図）|| A 図の、四、過渡期世界と国家までの数コマをワンカットごとに、ちよつとずつ見て来たわけである。

これから、五の世界革命戦争と国家に入るわけであるが、これからは、世界史の過程的な構造をな

がめるといふより、赤軍兵士という一つの場所に立って、場所を確定して見てゆくの、今までの論理展開と全く、ことなってくるため、Aシリーズはここでストップする。

メモーII

世界革命戦争と国家

エンゲルスは、『起源』において、文明の特徴として、「全社会的な分業の基礎としての都市と農村との対立の固定化」ということをあげている。

ところで、今日のマルクス・レーニン主義において、この都市と農村という問題については、わずかに毛沢東の「農村から都市へ」という戦略があるだけであり、それ以外には、ほとんどたいしたものはないといっている。僕は、毛沢東の「農村から都市へ」を、戦争のやり方一般としてではなく、もっと深いものとして歴史的に再考する必要があるのではないかと思う。

資本主義が全世界を被い尽くす過程までは、いわば、都市の論理が（ヨーロッパ⇄世界の都市）、世界の農村に浸透して行ったものである。古代国家、封建国家、近代代議制国家と、発展してきた国家こそ、都市の論理を主としたものだった。この二千数百年にも及ぶ都市の論理こそ、「新しい文明的な社会である階級社会を導き入れるものは、もつとも低級な利害——いやしい所有欲、獸的な享楽欲、さもしい貧欲、共有財産の利己的な略奪——である。古い無階級の氏族社会を掘り崩して倒壊させるものは、もつとも恥ずべき手段——窃盗、暴行、奸計、裏切りである。」（『起源』）といったものだった。これに対する革命が、逆の過程、即ち、世界の農村から世界の都市へと作用すること、この中で都市

と農村の対立が止揚されて行くというのは、全く正しいし、事実、ロシア⇄中国⇄キューバ⇄第三世界の革命と、今日の革命は、世界の農村が世界の都市を包圍して形成されているのである。

今日の、この意味を、歴史的に深くほりさげて見よう。

★

過去、農村が都市に対して勝利した時、いつたい、いかなることが起っているか？ 先ず、古代古家（アテナイに典型的な都市国家、奴隷所有者の国家）を滅ぼした野蛮人、未開人であるゲルマン（ドイツ人）の民族大移動を見てみよう。農村⇄都市の中で、家族についてみよう。

「単婚家族を対偶婚から区別するものは、婚姻紐帯のいっそうの強固さであり、いまではこの紐帯はもはや双方の意のままには解消できない。いまでは原則として夫だけが、それを解消して妻を追い出すことができる。」

「この家族形態がまったくの苛酷さをもって現われるのは、ギリシャ人のばあいである。マルクスが指摘しているように（『古代社会ノート』）、神話にでてくる女神の地位は、女性がまだヨリ自由なヨリ尊敬される地位を占めていた昔の時代を示しているのに、英雄時代には、女性はすでに男性の優位と女奴隷の競走とによっていやしめられているのがみられる。『オデュッセイア』で、テレマコスがいかに自分の母のことをしりぞけて黙らせるかを読むがよい。ホメロス（の詩）では、強奪された若い女たちは勝利者の情慾にゆだねられる。指揮官たちは位階の順に一番の美人を選びだして自分のものにする。周知のように『イリアス』の全編は、このような一人の女奴隷をめぐるアキレウスとアガメムノンとの争いを中心にして展開される。ホメロスのえがく重要な英雄では、その一人一人に

ついで、彼が天幕と寝床をとにもする囚われの娘のことが述べられている。これらの娘はまた、アイスキュロス〔の劇「アガ멤ノン」〕でカッサンドラがアガ멤ノンによつて連れ去られるように、彼らの故国に、しかもその正妻のいる家に連れてゆかれる。このような女奴隷とのあいだにできた息子は、父の遺産の小部分を受け取り、完全な自由民とみなされる。テウクロスはテラモンのこうした庶出の息子であつて、父の姓を名のことを許される。正妻は、これらのことをすべて甘受し、しかもみずからは厳格な貞操と夫への忠実をまもることを期待される。英雄時代のギリシャの妻は、なるほど文明期の妻よりは尊敬されているが、しかし結局のところ、彼女は夫によつて、彼の相続者である嫡出子の母であり、彼の家政婦長であり、また彼が意のままに妾にすることができし実際にもそうする女奴隷たちの監督者であるにすぎない。単婚とならぶ奴隷制の存在、その身にそなえたすべてをあげて男のものになる若い美しい女奴隷の存在、これこそが、単婚にはじめから特殊な性格を、すなわち、妻にとつてだけの単婚であつて、夫によつての単婚ではないという性格を、押印するのである。

「アテナイに代表されるイオニア族では」娘たちは、糸紡ぎ、機織り、縫い物、それにせいぜいわずかばかりの読み書きを習つたにすぎない。彼女たちは監禁されているのも同然であつて、ほかの女たちとだけ交際した。女部屋は家のなかの隔離された部分であり、階上か後屋にあつたが、そこには男、とくに外来者は容易にはいれなかつたし、また家に男の訪問客があるときには、彼女たちはそこに引きががった。妻は女奴隷をつれてでなければ外出しなかつたし、家では本式の監視をうけていた。アリストパネスは、姦夫を威嚇するために飼われたモロシア犬の話をしているし、またすくなく

ともアジアの諸都市では、妻を監視するために去勢者が雇われており、これは、ヘロドトスの時代にはすでにキオス島で商売用に生産されていたし、ヴァクスムートによれば、それはたんに蛮族〔地中海世界以外の民族の総称〕用だけではなくた。エウリピデス〔の劇〕では、妻は *oikurena* すなわち家政のための物（この言葉は中性である）とよばれており、そして子供を生む仕事を別とすれば、妻はアテナイ人によつて女中頭以外のなものでもなかつた。男には体操や公的な討議があつたが、女はそれらから排除されていた。そのうえ男は、しばしば女奴隷たちを意のままにすることができたし、またアテナイの盛時には、国家によつてすくなくとも庇護された大規模な売春制度をもつていた。スパルタの女性市民が気品の点でそうであつたように、才気と芸術的嗜好の点で古代女性の一般的水準を抜く、無比のギリキヤ婦人氣質が発達したのは、まさにこの売春制度を基礎としてのことであつた。しかし、女になるためにはまずヘタイレにならなければならなかつたこと、これこそは、アテナイの家族にたいするもつとも峻烈な判決である。

「これが、古代のもつとも文明的な、もつとも高度に発展した民族についてたどりうるかぎりでの、単婚の起源であつた。単婚はけつして個人的性愛の果実ではなく、これとは絶対に無関係であつた。というのは、婚姻は依然として便宜婚だつたからである。それは、自然的条件ではなく経済的条件に、つまり本源的な自然発生的な共同所有にたいする私的所有の勝利にもとづく、最初の家族形態であつた。家族内での夫の支配と、彼の子であることに疑いがなくて、彼の富の相続者に定められている子を生ませること——これだけが、ギリシヤ人があからさまに公言した一夫一婦制の唯一の目的であつた。」

「それはともかく、個別家族は、いづどこでも、ギリシャ人にみられたような古典的な苛酷な形態で現われるわけではけつしてない。将来の世界征服者として、ギリシャ人より繊細ではないにしても広い見識をそなえていたローマ人のあいだでは、女性もつと自由で尊敬されていた。ローマ人は、妻にたいする生殺与奪の権によって貞操が十分に保証されるものと信じていた。ここでは妻もまた、夫と同様に自由意志で婚姻を解消することができた。しかし、一夫一婦制の発展における最大の進歩は、ドイツ人の歴史への登場とともに決定的に生じた。それというのも、彼らのあいだでは、おそらくはその貧困の結果、単婚が当時まだ対偶婚から完全には発展していなかったと思われるからである。われわれはこれを、タキトゥスが述べている三つの事情から推論する。すなわち、第一に、婚姻が大いに神聖視されていた——『彼らは一人の妻で満足し、女たちは貞潔の垣に囲まれて生活する』、『ゲルマニア』にもかかわらず、貴人や部族の指揮者たちには一夫多妻制がおこなわれており、したがってその状態は、対偶婚がおこなわれていたアメリカ人の状態に似たものであった。そして第二に、母権制から父権制への移行は、その直前によくおこなわれたものと思われる。なぜなら、まだ母の兄弟——母権制によれば、男のなかでもつと近い氏族親族——のほうが、自分自身の父よりも近い親族だぐらいに思われていたからである。これもまた、アメリカ・インディアンの立場に照応するものであり、マルクスは、しばしば述べていたように、われわれ自身の原始時代を理解するための鍵を、このインディアンのうちに見出したのである。そして第三に、ドイツ人のあいだでは女性が大いに尊敬され、公事にも影響力をもっていたが、これは、単婚制的な男性支配とはまっこうから対立するものである。これらのほとんどすべては、ドイツ人がスパルタ人と一致（※同じギリシャでもアテナイ

とちがってスパルタは女性が尊敬されていた）する点であるが、後者にあつても、すでにみたように、対偶婚はやはりまだ完全には克服されていなかった。このようにして、ドイツ人の登場とともに、この点でもまったく新しい一要素が世界を支配するようになった。いまやローマ人世界の廢墟のうえに諸民族の混合から発展した新しい単婚が、男性の支配をヨリ緩和した形態でつつみ、女性には、古典古代に知られていたものよりも、すくなくとも外見的にははるかに尊敬される自由な地位を認めた。これによつてはじめて、単婚から——事情に応じて、あるときはその内部で、あるときはそれと並行して、あるときはそれに対立して——単婚のおかけである最大の道徳上の進歩が展開されうる可能性が与えられた。この進歩とは、以前の世界がすべて知らなかった近代的な個人的性愛のことである。しかし、明らかにこの進歩は、ドイツ人がまだ対偶婚家族のうちに生活していて、それに照応する女性の地位をできるかぎり単婚につぎ木した、という事情から生じたのであつて、けつしてドイツ人が伝説的な、驚くほど道徳的に純潔な素質をもっていたために生じたのではない。

「ドイツ人が民族大移動のときまで氏族に組織されていたことは、疑いのないところである。」

「征服したローマ属州への移住でさえ、なお氏族ごとにおこなわれたようである。」

「まさに死滅にひんしていた母権制のもう一つの遺物をなすものは、ローマ人にはほとんど理解できなかつた、女性にたいするドイツ人の尊敬である。高貴の家柄の処女は、ドイツ人との契約のさいにもつとも拘束力のある人質とみなされていた。自分たちの妻や娘が捕虜や奴隷の身となるかもしれないという思いは、彼らにとつて恐ろしいことであつて、戦闘のときに他のなにもにもまして彼らの勇気を振るいたたせる。彼らは女性のうちに神聖な予言者のなものをみとめ、もつとも重要な事項

についても女性の忠告に耳を傾けた。事実、リッペ河流域のブルクテリ族の巫女ウエレダは、バタウイ族の全蜂起の精神的推進力であつて、この蜂起でキウイリスは、ドイツ人とベルギー人の先頭に立つて、ガリア〔現在のフランス〕におけるローマ人の全支配を震撼させたのである。〔起源〕

★

次に、国家を持たなかつた蛮族がローマ帝国という国家を滅ぼすことによつて、どんな事が起つたかを見てみよう。

「五世紀末には、ローマ帝国は衰弱し、血の気も救いもないままに、侵入してくるドイツ人に門戸をあけはなしたままであつた。

さきにわれわれは、古代ギリシャ・ローマ文明の播籃のわきにいた。ここでわれわれは、そのひつぎのわきにいる。地中海盆地のすべての国々にたいして、ローマの世界支配という平準化のかんながかけられてきた、しかもそれが数世紀にもわたつて。ギリシャ語が抵抗したのを除けば、すべての民族言語は、くずれたラテン語に席をゆずらなければならなかつた。もはや民族的差異はなく、〔フランスの〕ガリア人も、〔スペインの〕イベリア人も、〔北イタリアの〕リグリア人も、〔オーストリーの〕フリウム人もなく、彼らはすべてローマ人となつた。ローマの行政とローマ法とが、いたるところで古い血縁団体を解体させ、これとともに、地方的および民族的な自発性の最後の遺物をも解体させてしまつた。できたてのローマ人という地位は、それにかわるものをなにも与えなかつた。それは、いかなる民族性をも表現しないで、民族性の欠如を表現するだけであつた。新しい民族の諸要素はいたるところに存在していた。種々の属州のラテン語方言はますます分化した。以前にイタリアやガリ

アやスペインやアフリカを自立的な領域にしていた自然的境界は、なお存在していたし、なお痛感されもしていた。しかし、これらの要素を新たな民族に総括するだけの力は、どこにも存在しなかつた。発展能力や抵抗力は、いわんや創造能力は、その形跡さえまだどこにも存在していなかつた。この膨大な領域の膨大な人間大衆は、自分たちを結束させる紐帯を、ただ一つしかもたなかつた。ローマ国家がそれであつた。そしてこれが、時とともに、彼らの最悪の敵となり、抑圧者となつたのである。」

「ローマ国家は、もつぱら臣民を搾取するための、巨大な、複雑な機構となつていた。各種の租税や国家賦役や貢納は、住民大衆を圧迫してますます深い貧困におとし入れた。この圧迫は、総督や収税吏や兵士の強奪によつて、耐えがたいまでに増大した。それらこそ、ローマ国家がその世界支配によつてなしたとげたところのものであつた。ローマ国家はその存在権を、対内的には秩序の維持、対外的には蛮族にたいする防衛のうえに築いていた。しかし、その秩序は最悪の無秩序よりもなお悪く、またローマ国家が市民をそれから保護すると称した当の蛮族が、市民たちから救済者として待望されたのである。」

社会状態は、それに劣らず絶望的であつた。すでに共和政の末期以来、ローマ人の支配は、征服した属州の容赦ない搾取を目ざしていた。帝政は、この搾取を廃止したのではなく、逆に規則化した。帝国が衰微すればするほど、租税や貢納はますます高まり、官吏はますます恥しらずに略奪し強奪した。商工業は、諸民族を支配するローマ人の仕事ではけつしてなかつた。ただ高利貸付においてのみ、彼らはその先人および後人のすべてを凌駕していた。商業のうち以前から存在し維持されてきたものも、官吏の強奪のもとで没落した。これをなおきりぬけた商業は、帝国東部のギリシャにあるが、こ

れはわれわれの考察の範囲外である。全般的な貧困化、交易・手工業・芸術の後退、人口の減少、都市の衰微、農耕のヨリ低い段階への逆転——これが、ローマの世界支配の最終結果であった。」

「属州の様相も、これにまさることはなかった。われわれがもっているのは、大部分がガリアからの報告である。ここでは、コロマスとならんで、まだ自由な小農民がいた。彼らは、官吏や裁判官や高利貸の迫害から身をまもるために、しばしば一人の有力者の保護・庇護に身をゆだねた。しかし、たんに個々人がそうしただけでなく、諸共同体がまとまってそうしたので、皇帝はそれについて禁令を四世紀にしばしば発布したほどであった。だが、保護を求めるものたちにとって、それはなんの役に立ったであろうか。庇護主は彼らにたいして、彼らがその土地の所有権を彼に譲渡し、そのかわりに彼は彼らに終身その利益を保証する、という条件をだした。——この策略は、聖なる教会が記憶していて、九世紀、十世紀に神の国と教会自身の所有地とを増大させるために、心ゆくまで模倣したものであった。もちろん当時、四七五ごろ、マルセイユの司教サルウィアヌスは、まだこのような盗みにたいく憤激して、つぎのように語っている。ローマの官吏や大領主の圧迫があまりにもひどくなつたので、多くの『ローマ人』は、蛮族がすでに占拠している地方にのがれ、そこに定着したローマ市民は、ふたたびローマの支配下におちいることを何よりも恐れているほどである、と。当時、親が貧困のためにしばしばその子を奴隷に売ったことは、これを禁ずるために発布された法律が証明している。」

ドイツの蛮族たちは、ローマ人を彼ら自身の国家から解放してやったかわりに、彼らから全土地の三分の二を取り上げて、それを自分たちのあいだで配分した。この配分は氏族制度に即しておこなわれた。征服者の数が比較的すくなかつたので、きわめて大きな地域が配分されないまま、一部は全部族団の、一部は個々の部族や氏族の所有に残された。各氏族のなかでは、耕地と採草地が抽籤で個々の世帯に等分に割り当てられた。当時、分割がくり返しおこなわれたかどうかは、わからないが、いずれにしてもローマ属領では、それはやがてなくなり、個々の持ち分は譲渡可能な私有財産、自由私有地となつた。森林と放牧地は、分割されずに共同利益のために残された。この利益ならびに分割耕地の耕作方法は、古い慣習と全体の決議によって規制されていた。氏族がその村落に住むことが長ければ長いほど、そしてドイツ人とローマ人とが徐々に融合することが多ければ多いほど、この紐帯の血縁的性格はますますすれて、地縁的性格が現われてきた。氏族はマルク共同体のうちに姿を消したが、むしろそこには、成員の親族関係に起源をもつことの痕跡がなおきわめてしばしば目にとまる。こうして、ここに氏族制度は、すくなくともマルク共同体が維持されていた国々——北フランス、イギリス、ドイツ、スカンデナヴィア——では、気づかないうちに地縁的制度に移行し、これによって国家に適應する能力を獲得したのである。だがそれにもかかわらず、この地縁的制度は、全氏族制度を特色づける自然発生的な民主的性格を保持し、こうして、のちにその変質を強制されたときにさえ、氏族制度の断片を、したがってまた被抑圧者の手中に武器を、現代にいたるまで生き生きと維持したのである。」

「ローマ属州の主人となつたドイツ諸部族団は、この彼らの征服地を組織しなければならなかつた。しかし、ローマ大衆を氏族団体に受け入れることも、またこの氏族団体をつうじて支配することもできなかつた。さしあたり大部分が存続していたローマの地方行政団体の頂点には、ローマ国家にか

わるものを据えなければならなかったが、これは別の一国家でしかありえなかった。こうして、氏族制度の諸機関は、国際機関に転化せざるをえなかったが、これは、事態の切迫に応じて、きわめて急速であることを要した。だが、征服部族団の当面の代表者は軍指揮者であった。征服領域を内外にたいして守るためには、彼の勢力の強化が必要であった。将帥職の王位への転化の時期が到来していた。その転化が遂行された。」

「第一に凋落しつつあったローマ帝国の社会的編成と財産配分は、当時の農耕および工業の生産の段階に完全に照応したものであり、したがって不可避的なものであったこと、そして第二に、この生産段階は、その後の四百年間に本質的に低下もせず、本質的に上昇もせず、したがって同じ必然性をもって、ふたたび同じ財産配分と同じ住民階級を生み出したこと、これである。都市は、ローマ帝国の最後の数世紀間に、農村にたいする以前の支配を喪失し、ドイツ人の支配の最初の数世紀間にはそれをとり戻していなかった。」

「この四百年がいかにも不生産的にみえるにしても、それは一つの偉大な産物を残したのである。近代的な民族性、きたるべき歴史のための西ヨーロッパ人の改造と編成が、それである。事実、ドイツ人はヨーロッパを新たに活気づけた。」

「ドイツ人は、とくに当時は、天分のゆたかなアーリア部族であり、活動的な発展のまっ最中であった。しかし、ヨーロッパを若返らせたものは、彼らの特殊な民族的特性ではなく、たんに——彼らの未開性、彼らの氏族制度だったのである。」

「彼らは、すくなくとも最重要な国々の三つ、ドイツ、北フランス、イギリスにおいて、純粹な氏

族制度の断片をマルク共同体の形態で救いだして封建制国家のうちにもちこみ、これによって、被抑圧階級である農民たちに、もつとも苛酷な中世の農奴制のもとにおいてさえ、古代の奴隷も近代のプロレタリアも既製のものとしてはもちあわせなかつたような、地域的結束と抵抗の手段とを与えたのであるが——それは、彼らの未開性、彼らのひとえに未開人的な血族ごとの定住様式に負うものでないとすれば、いったい何に負うのであろうか。」

「ドイツ人がローマ人世界に植えた、活力のあり活気をもたらずすべてのものは、未開性であった。事実、未開人だけが、瀕死の文明に悩む世界を若返らせることができるのである。」(「起源」)

★

瀕死の文明に悩む世界——都市——ローマ帝国に対して、蛮族は、それにとってかわる、世界を若返らせる総括の仕方を、氏族社会の中の戦争指揮者を中心に行なつたのであるが、この事は、現代過渡期世界にとって極めて重大な内容を示してはいないだろうか？

当時の戦争指揮者の行なつた事は、古代国家↓封建国家という、国家の形成過程であつたことと、今日の我々は、近代代議制国家↓プロレタリアート独裁国家という、国家を死滅へたとき込むための最後の国家の形成——世界プロレタリアート独裁、という違いはあるとしても、そこで果たす、戦争指揮者の役割には、全く逆の方向を向いていても、全く共通の社会的地位が与えられる。

今日の都市——世界の帝国主義を見よノかつてのギリシャの苛酷さ、ローマ帝国の瀕死の状態が、より大規模、より複雑に、しかしそっくり再現されているのではないか。ゴミ戦争、交通戦争、老人の自殺、恐慌よりもよりひどい生産の破壊——過剰生産のスペンディングとしての軍需産業、産軍複合体によ

る反革命戦争（二一世紀のスポーツは人殺しだ、など）、公害による海や山、それに人間までも、瀕死の文明に悩む世界そのものではないか。ヨーロッパの資本主義Ⅱ都市が世界にむかつて押しつけたこのようなものに対して、今や、世界の農村は、革命戦争に起ちあがっているのだ。まさに、戦争指揮者Ⅱゲリラ戦士Ⅱ世界赤軍兵士Ⅱ無名の英雄兵士たちこそ、現代過渡期世界の主人公なのだ。中国人民解放軍、ベトナムーインドシナの人民解放武装勢力、キューバ革命軍、ラテン・アメリカ、パレスチナ、アフリカ、全世界のゲリラ。

氏族社会がローマ帝国にとつてかわつて世界を総括する能力はなく、ドイツ人のローマ人の融合の上に氏族社会の戦争指揮者があらたに世界を総括したように、現在の世界の農村がすぐ世界の都市Ⅱアメリカ帝国主義、ヨーロッパ帝国主義、日本帝国主義にとつてかわつて世界を総括することは出来ないであろう。農村は一端プロレタリア国家へ転化し、戦争指揮者を頂点とする社会の再編成にされるならば、そこからなら、世界を総括しうる。中国は、既に部分的にそういう位置にあると言えよう。しかし、中国がそれを意識的にしようとしているかどうかは、わからない。キューバは、ラテン・アメリカ規模で、それをやりはじめている。さとうきび刈りということにむかつて、全世界からブリガード（旅団）を編成して、生産の世界的、国境を越えた再編をやっている。

氏族は、最も安定した時は、「氏族は、その酋長（平時の酋長）と酋長（戦争指揮者）とを選出する。」（起源）のであるが、これでは新しく社会を再編・総括出来なかつたのであり、戦争指揮者が前面に出ねばならなかつた。英雄は兵士だつたのであり、軍事が中心であり、酋長Ⅱ政府は後景にしりぞいている。中南米のゲリラが、議会ー政府をめざす行動しない党を批判し、ゲリラを中心に主張す

るのも、なんとかつての農村↓都市の時代と一致している事か。しかし、党が軍からなり、軍と一致している所では、（典型はベトナム人民革命党）そういうことはない。

新しく世界を再編するには、立派な戦争指揮者を持たねばならない。キューバが、大きな意味を持つのは、まさに、立派な戦争指揮者、カストロ、ゲバラを持っていたからである。ゲバラが、国境を越えて、ボリビアのゲリラ戦争におもむいた事、この事によつて、ラテン・アメリカという農村が、キューバを根拠地に、社会の再編の能力形成へ大きく前進しえたのである。このような力が全世界で大きく前進する時、米帝にとつてかわつて、世界を総括する戦争指揮者による国家Ⅱ世界赤軍の軍事独裁Ⅱ世界プロレタリアート独裁が実現されるであろう。

この軍事独裁による社会の再編、総括は、かつてドイツ人がヨーロッパを単に若返らせたようなものではない。高度な資本主義社会の産業を、エゴとエゴの対立社会から解放し、生産関係を組織しなおす、共産主義社会へ進むようなものである。

従つて、ここでの軍隊は、生産にも従事する。かつての氏族時代の戦争指揮者もそうであつた。井上光貞『日本国家の起源』に、次のような文がある。「英雄時代とは何か」の章に、「日本における英雄時代の問題が本格的にとりあげられはじめたのは、一九三〇年に高木市之助氏が書いた『日本文学に於ける叙事詩時代』であろう。高木氏は記紀のいわゆる来目歌は、英雄叙事詩的な性質をもっていることを指摘した」と言つて、「みつみつし久米の子等が垣下に植えしはじかみ口ひびく吾は忘れじ撃ちてしやまむ（神武記）」という歌の説明をしている。その説明文のメモをしておかなかつたので、この歌を充分うまく僕は説明出来ないが（自分だけなんとなくわかつていただけなので、だいた

い、こういうことだ。「はじめ」というのは、しょうがのことであり、「口ひびく」というのは、味がヒリヒリするということである。そこで、全体の意味は、「久米の子等が垣下に植えたシヨウガの味がヒリヒリする。吾は忘れないぞ。撃つてやるぞ」というもの。「吾は、撃つてやるぞ」という戦闘歌謡なのである。そこへ、なんで、シヨウガの味が出てくるのか？戦闘が、生産と結びついてきたからである。

「日常卑近の経験をもって比喩としている。それは、花鳥風月の観念の世界に遊んだ後世の和歌とはまったく性質を異にし、あまりに生活に即しているというべきではあるまいか。」「ヨーロッパにおける叙事詩の研究者の多数は、叙事詩または叙事詩的文学は、英雄時代という特殊の風土においてだけ生れる文学であるとしている。」「これを史家の立場から発展させたのは、一九四八年、石母田正氏の書いた『古代貴族の英雄時代』であった。英雄時代とは、石母田氏によれば、原始社会から国家・階級社会へと発展する過渡の段階である。」「中臣とか蘇我などの『うじ』の構成は、よしそれが遠い昔のこととして語られているにしても、結局、編纂当時の観念を反映しており、先の系列の『氏族』の様態を示すにすぎないであろう。しかし、来目歌にみられる英雄としての族長は、もう一つ前の、氏族集団の族長とみてよいのである。なぜなら、来目歌の族長は氏族の長とし族員をひきいながら、しかも氏族員と同じ農耕生活をいとなみ、氏族全体の意志を代表して戦闘を指揮しているからである。」「八世紀以後の古代貴族は龐大な数の鍬を禄として官給されながら、鍬の使い方さえ知らなかったのであるが、古墳時代の族長たちは、その墓の中に刀子・のみ・斧・鎌・紡錘車などの日常の生活や生産に必要な道具やその模造品をおさめた。この時代の族長たちは、これらの道具が現実に使われてい

る社会、その気風や慣習や道徳の全体的な世界のなかでまだ生々と呼吸していたのである。およそこれらの諸事実は、四・五世紀が、族制的体制の固定する以前の時代であること、それはかえって英雄時代にふさわしい世界であったことを物語っているのである。」「(『日本国家の起源』)

カストロが、またかつてゲバラも、砂糖きびを刈っている。宣伝のためのポーズではない。宣伝のために五〇日も六〇日も刈る必要はない。ベトナム解放戦線の戦士を見よ。銃をがっちりにとぎり、解放区で農業をやっている。これこそ、英雄であり、われわれのような世界の都市に瀕死の文明に悩む世界は、彼らによって救出されねばならない。

「ドイツの蛮族たちはローマ人を彼ら自身の国家から解放してやったかわりに、彼らから全土地の三分の二を取り上げて、それを自分たちのあいだで配分した。』ように、このような戦闘と生産を結びつけている英雄たちによって、我々世界の都市の全財産の三分の二はやはり、取り上げられねばならないであろう。そうでなければ、自力では、この都市は救出出来ない。世界の都市は、第三世界人民に自己の財産を渡さねばならない。

農村、農村という、お前いつからプロレタリア党をやめて農民党に左翼エス・エルになったのだ、といった批判がはねかえってきそうである。それに、もう一つ、都市が自力では救出不可能というのなら、いったい、都市のプロレタリア人民は、革命にむかって何をすればいいのだ、農村からの救いを座して待つだけなのか？といった。

世界の農村に世界の都市と比べているからといって、プロレタリア党をやめたわけではない。世界の都市にとってかわって、世界を総括することは、かつて、氏族が氏族のままでは出来なかったよう

に、農民が農民のままでは出来ない。農村↓都市という事を、単なる形而上学としてとらえてはならない。かつての都市↓農村（ローマ帝国時代）、農村↓都市（ゲルマン民族移動）、都市↓農村（ヨーロッパ）による地理上の発見以後の資本主義の世界支配、植民地支配）とへて、今日、農村↓都市となつてはいるのだが、その間の農村↑都市の内容は常に変つていっているのである。今日、第三世界の戦争指揮者は、すべてプロレタリア党である。今日の都市、それを否定する媒体は、私有財産制度を全的に否定しうる、肉体以外に財産のない無産階級、プロレタリアートである。だが、都市を否定し、それより上位の社会として社会を総括し、新しい社会を組織して行く過程は農村↓都市であり、従つて、今日の農村はプロレタリア党の、しかも戦争指揮者によつてのみ指導されるのである。

ところで、こういう世界史的過程の中で、都市の場所にいるものは、何をすべきか？座して待つのか？否である。

では、どうするのか？それは、章をあらためて後述することしよう。

ここで一つだけつけ加えておこう。日向派などが中国やベトナムを一国社会主義でダメだ、世界革命戦争とは何の関係もない、みたいなことを言っているが、それは農村と都市の世界史的把握も、従つて、共産主義の綱領もなにも持たないきちがい小ブルのわめきを示しているにすぎないということである。

「『連合赤軍』は、プロレタリア世界革命を、スターリン主義を乗り越えた文字通り単一の世界革命として闘いとらなくてはならないという観点を喪失している。彼らは、現代的に推進されている世

界各地（就中後進国）の武装闘争を、ただ武装闘争という形態だけを抽出して、その内容を捨象してしまう。あらゆる闘争が、武装闘争、軍事闘争という尺度だけで、それが世界革命戦争の具体化の過程として描かれてしまうのである。」「戦旗」こういう言い方がそれを示している。「内容を捨象」だつて!?君達は歴史的、世界的に世の中を深く洞察したことがないということを示しているだけである。プロレタリア人民は、こんなアホーの言う事をきくべきではない。

中華人民共和国政府は、最近外交活動をはなばなく展開している。その外交活動の基準としては、平和五原則（主権と領土保全の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干渉、平等互惠、平和共存）にもとづいている。ところで、この平和五原則について、共産党はいかなる考えを持っているのだろうか？

たとえ中国のようなプロレタリア国家であれ、地球上の一部を分割し、私的所有することとは、共産主義の原則に反する。主権と領土保全の相互尊重とか、相互不可侵とか言うのは、すべて地球を国家として分割し、領土として地球の一部を一部の国民が私的所有することである。今までの国家がそのように形成されて来たこと、それを否定する革命がまだ地球上の一部でしかないこと、それ故、この一部が自己を解体することは、残りの国家による侵略をもたらすので、今は、解体させてはならない、そういう意味で、現在、プロレタリア国家の外交政策として許しうるとしても、将来は、それは許されてはならない。ところで、共産党とは、遠い将来まで見通していなければならぬはずであるが、中国共産党は、この見通しをどのようにたてているのか？

相互尊重とか、相互不可侵とか、すべて、帝国主義の持つ性格と対立する概念である。そういう

意味で、帝国主義に反対するという意味では意味があるが、世界のプロレタリア人民がどうするとう味方の目的意識は一切含まれていない。それは、過渡期世界では不十分なのである。なぜなら、過渡期世界とは、帝国主義にとつてかわってプロレタリア人民が能動性を持ち、資本主義から社会主義へと世の中を変える時代であり、敵に規定されない味方の独自の意識性が最も必要だからである。

レーニンの民族自決権についても、ロシア革命後、分離の自由がウクライナ等で、反動に利用されてしまったが、主張の重点を分離の自由↓結合の自由へと移したし、分離の自由にせよ結合の自由にせよ、民族自決という民主主義の要求はプロレタリアートの利益に従属させられるものとしてあったのだし、中国共産党の平和五原則は、レーニンの民族自決と同じものと考えてよいと思うが、反動に転化しないように、より意識的にプロレタリアートの利益を主張すべきと思われるが、現在それが全くないように思える。

中国の国連での合法的権利の回復についても、ニクソン訪中にしても、又は、日本の大独占資本との貿易についても、左翼の中から一定の不満をもってむかえられている。それは、もちろん反革命ではない、しかし革命の意識性が欠除しているからである。国連加盟でも、米日の惨敗はいいとして、国連が朝鮮・コンゴに反革命軍を送り、パレスチナを分割したような機関であった以上、単なる米、日帝批判だけでなく、国連そのものも批判されるべきであり、このことは、言いかえれば、それにとつてかわる独自の万国のプロレタリア団結の指針を提起すべきなのに、それが無い。

ところで、現在、世界プロレタリア人民の利益とは何か、という事をまじめに考えるなら、それは平和五原則と矛盾してくる。

中国共産党は、レーニンの、ポーランド進攻や、ゲバラのボリビア・ゲリラについては、どのような考えを持っているのだろうか？これは、明らかに、革命の側からの「侵」であり、「内政干渉」であり、「不平和共存」である。帝国主義は国境を越えて気ままに侵略・反革命をやっているのであり、それに対するプロレタリアートの利益を自国の国境から帝国主義を追い出すだけにとどめるというのは、全くの日和見主義である。ポーランドまで進撃したように、又は、ソ連が二次大戦末期にベルリンまで進攻したように、国境を越えて、即ち、国境を侵かして、ろこつに内政に干渉し反革命を批判し革命を援助すべきである。

かつて、毛沢東はソ連にむかつて、「ソヴィエト—ロシア・中国」として、ロシア、中国を結合する提案をしたそうであるが、現在、そういう内容を、より発展させて、世界プロレタリアート独裁として提起すべきである。世界的機関なしに、現在の民族国家のまま、それが個々にプロレタリア国家にかわって、あとは国家死滅にむかうなどということはありえない。生産の世界的な組織化をその上で共産的になどということはありえない。

共産主義的に世界を組織しなおすには、我々にはどうしても世界的中央機関が必要である。それは、現在の民族国家の個々のプロレタリア国家への転化の上での代表連合機関という国土という私有財産を認めた上ではありえず、それと闘い、共産主義的に世界を改造するものであり、従って、この国土という私有財産制との闘いを残す社会での機関だから、どうしてもプロレタリアートの独裁が必要であり、世界的中央機関であつてかつプロレタリアート独裁とは、世界プロレタリアート独裁にほかならない。ある国には石油があり、ある国には鉄があり、ある国には全くない、こうしたことを、古い

民族国家を残したまま、相互互恵でプロレタリア国際主義の世界貿易で止揚すればよいというふうにはいかなないであろう。世界人民の計画に従って分配すべきであつて、貿易とか援助とか言つた交換的性格の私有財産的性格をアイマイに放置すべきではない。

民族国家のプロレタリア国家への個々の転化と世界プロレタリアート独裁の関連、および、そこからの国家死滅、過渡期社会、社会主義、共産主義社会への発展過程については、我々には今、考える材料がないので、詳しくはわからない。

しかし、すくなくとも、マルクスが『共産党宣言』で述べているように、「共産主義者は、ただ次の点で他のプロレタリア諸党と区別される。すなわち彼は、一面では、プロレタリアの各種の国民闘争において、全プロレタリアートの、その国籍とは関係のない共通の利益をかかげて、それを貫徹し、他面では、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争が通過する各種の発展段階において、つねに運動全体の利益を代表する。」という事を実現しなければならぬ。中国共産党が後者の面で、過渡期世界の発展段階の階級闘争に赤軍を持つて持久的革命戦争をもつて大きく貢献してきたこと、この事は偉大なことであるが、そうであるが故に、より前者の面が期待されるというものである。

だが、その面が世界の左翼にとつて全く満足させられるようなものでなく、不満をもつてむかえられるようなものではないのである。これには、マルクスやレーニンのインターナショナルについての考えを聞いて見なければなるまい。スターリンが第二次大戦が起つたので、まさにこの時こそ万国のプロレタリアが団結すべきなのに、帝国主義に屈服し、インターナショナルを解散させたこと、こういう誤つたことがあつたので、朝鮮労働党のように、今共産主義の世界的センターは必要でない

といった態度をとるのは正しいのだろうか？世界的センターが不必要というのなら、マルクスもレーニンも極左空論主義者だったということなのか？

もう一つ、今日のプロレタリアートの世界的団結は、一般的なプロレタリア国際主義なる精神的なもの、または援助なる経済的、又は武器的なものでは不充分なのであり、戦士と戦士の共産主義的団結でなければならぬと思うのだが、そういったことを身をもって示したゲバラについて、中国共産党はどう考えているのだろうか？

ゲバラはアルゼンチン人だった。しかし、キューバの革命兵士になり、又、ボリビアの革命兵士になり、世界の革命兵士になった。エンゲルスは、『起源』でアメリカのインディアンの氏族の風習の中の第七として、次のようなことを言っている。「氏族は族外者をその養子にし、これをつうじて彼を全部族に受け入れることができる」と。世界共産党や世界赤軍が、あらゆる国籍の人を迎え入れるのは当然であるが、一国の民族的共産党でも、当然この氏族程度の事は意識的になすべきではなからうか？とりわけ、プロレタリア国家は、かつて薩長雄藩の軍が政府軍になったように、将来の世界統合の軍隊の中核たるべきであり、ボリビアへ行ったゲバラのような革命兵士を全世界に送り、かつ、全世界からの革命兵士を、キューバのように迎え入れ、鍛え世界革命戦争の根拠地にならねばならないと思う。

こういった問題について、中国共産党がどう考えているのか、全世界のプロレタリア人民に示してくれる事を望む。我々は、日本帝国主義強盗国家内部のほんの取るにたらないような勢力としての世界革命戦争派でしかなく、まだこういった課題に充分と組む能力はない。だが、中国共産党なら出

来るはずである。我々は、中国共産党には、そういうことを期待しつつ、我々は独自の道を自主独立として歩む。こういった問題で一致すれば、単一の組織、しかしその戦列は世界と一国、一国内でも正規軍、地方軍、ゲリラ等々、複合的、立体的構造をもつて、世界革命戦争の道を歩むであろう。世界共産党、世界プロレタリアート独裁、世界革命戦争を、のつぱらぼうなものとして考えてはならないことは、A-15図で既にその根拠を示している。ヨーロッパの資本主義が世界に普遍化したこと、これに対する止揚としての世界的共通性と、にもかかわらず、それほどの自生的多極化の時代を通じての社会の総括のしかたの違いという特殊性の止揚の同時的、しかし複合的、立体的、多元的構造をプロレタリアートの戦列がとらなければならないことは言うまでもない。自主独立と世界共産党の統一。

農村↓都市ということば、いつまでも農村の場にいることを意味しない。既に第三世界の革命戦争は、都市にまで波及している。我々は、この都市を廢墟と化し、その上に、農村と都市の対立を止揚した新しい社会を作りあげなければならないのである。都市をいかにして廢墟へと化すか、この問題に入ろう。

都市の論理とは、次のようなものであった。

「英雄時代のギリシャの制度のうちに、古い氏族組織がまだ生き生きとした力をもっていたのをみるが、しかしまた、すでにその崩壊の端初をもみるのである。すなわち、父権制と子への財産の相続、これによって家族内での富の蓄積が支援されて、家族が氏族に対立する一個の力となったこと。富の差が、世襲の貴族および王位の最初の萌芽を形成することによって、その制度に反作用をおよぼしたこと。奴隷制が、さしあたりはまだたんに捕虜をもちいた奴隷制にすぎなかったのに、すでに自己の部族員やさらには自己の氏族員をさえ奴隷化する展望をひらきつつあったこと。昔の部族と部族との戦争がすでに変質して、家畜・奴隷・財宝を獲得するための陸上や海上での組織的な略奪に、正規の営利源泉になりつつあったこと。要するに、富が最高の善として讚美され尊敬されて、古い民族秩序

が富の暴力的な略奪を正当化するために乱用されたこと、これである。だが、一つだけがまだ欠けていた。個々人が新たに獲得した富を、氏族秩序の共産制的伝統にたいして保証したばかりでなく、また以前にはあれほど軽視されていた私有財産を神聖化し、この神聖化をあらゆる人間共同体の最高目的だと宣言したばかりでなく、あいついで発展してくる財産獲得の新しい諸形態、したがって不斷に加速される富の増殖の新しい諸形態に、全社会的承認の刻印をおした一つの制度が。はじまりつつあった社会の諸階級への分裂を永遠化したばかりでなく、有産階級が無産階級を搾取る権利や、前者の後者にたいする支配を永遠化した一つの制度が。

そして、この制度は出現した。国家が発明されたのである。」

「発展しつつあった貨幣経済は、分解力をもつ硝酸のように、ここから、自然経済にもとづく古来の農村共同体の生存様式のなかへと浸透していった。氏族制度は貨幣経済とは絶対に向立しない。アッティカの分割地農民の零落は、彼らを保護しつつとりまく古い氏族紐帯の弛緩と同時に生じた。債務証書や土地抵当（というのは、アテナイ人はすでに抵当権をも発明していたから）は、氏族をも胞族をも顧慮しなかった。そして古い氏族制度は、貨幣も前貸も金銭債務も知らなかった。それゆえ、ますますはびこる貴族の貨幣支配は、債権者を債務者から保護するために、貨幣所有者による小農民の搾取を神聖化するために、新しい慣習法をもつくりあげた。」

「売った地所の代金が債務の弁済にたりなかったり、この債務が抵当による保証なしになされていたりしたときには、債務者は債権者に弁済するために、自分の子供を外国に奴隷として売らなければならなかった。父による子の身売り——これが、父権制と単婚制の最初の果実であったノそして吸血

鬼がそれでも満足しないときには、彼は債務者自身を奴隷として売ることができた。これが、アテナイ人での文明の心地よい曙光であった。

以前、民衆の生活状態が、また氏族制度に照応していたときには、このような変革は不可能であった。そして、ここにそれがやってきたのであるが、とれがどうしてであるかは、わからなかった。われわれはしばらく、わがイロクオイ族にたち戻ろう。いまやアテナイ人に、いわば彼らの関与するところなしに、また確実に彼らの意志に反しておしつけられたような状態は、イロクオイ族では考えられなかった。そこでは、生活資料を生産する様式は年々歳々同じままであって、けつして外部からおしつけられたこのような抗争や、富者と貧者、搾取者と被搾取者の対立を生み出すことはありえなかった。イロクオイ族は、まだどうい自然を支配するところではなかったが、しかし彼らにあてはまる自然の限界の内部では、自分自身の生産を支配していた。彼らの小園圃での不作や、彼らの湖や河に在る魚や彼らの森林に住む野獣の枯渴を別とすれば、彼らは自分たちが働いて生活資料を獲得するやり方から何が生ずるかを知っていた。生ずるにきまつていたものは、貧弱であれ豊富であれ、生活資料であった。だが、けつして生ずるはずがなかったものは、思いもかけぬ社会的変革であり、氏族紐帯の寸断であり、たがいに対立し闘争しあう諸階級への氏族員や部族員の分裂であった。生産はきわめて狭いわくのなかでおこなわれていた。しかし——生産者は自分たち自身の生産物を支配していた。これは、未開期の生産のすばらしい長所であったが、文明の開始につれて失われてしまった。これをとり戻すこと、だが、人類がいまや達成した強力な自然支配と、いまや可能となった自由な協力関係とを基礎としてとり戻すことは、つぎの諸世代の任務であろう。

ギリシャ人のばあいは、これとは異なる。畜群や奢侈品での私有の発生は、個々人のあいだの変換を、生産物の商品への転化をもたらした。そしてここに、それ以後の全変革の萌芽がある。生産者はその生産物をもはや直接に自分で消費しないで、交換のために手放すようになるやいなや、彼らはそれにたいする支配を失った。生産物がどうなるかを、彼らはもはや知らなかった。そして、生産物がいつかは生産者にたいして、その搾取と抑圧のためにもちいられる、という可能性が与えられた。したがって、個々人のあいだの交換を廃止しない社会は、それ自身の生産にたいする支配と、その生産過程の社会的諸結果にたいする統制を、長期にわたって保持することはできないのである。

しかし、個々人のあいだの交換の発生後、そして生産物の商品への転化につれて、生産物が生産者にたいする支配をいかに急速に發揮するかは、アテナイ人が経験するところとなった。商品生産につれて、個々人による自分の計算での土地耕作が生じ、これにつれてやがて個々人の土地所有が生じた。さらに貨幣が、すなわち、他のすべての商品にたいして交換できる一般的商品が生じた。しかし、人間は貨幣を發明したとき、自分たちがこれによってまた一つの新しい社会的な力を、すなわち、そのまえでは全社会が頭をさげなければならぬ普遍的な力をつくりだしたのだとは、思いもしなかった。そして、当の生みの親が知りも望みもしないうちに突如として躍りだしたこの新しい力こそ、その青春の獣性のかぎりをつくして、その支配をアテナイ人に感得させたところのものであった。

「未開の中段段階では、遊牧民族のばあいに、畜群があるていど大きくなると、家畜がすでに自分たちの必要をこえて剰余を規則的にもたらす財産になっていたことが見出されるが、それと同時に、遊牧民族と畜群をもたないおくれた部族とのあいだの分業が、したがって二つの並存するあい異なっ

た生産段階が、したがってまた規則的な交換の条件が生じていたことが見出される。未開の上位段階では、農耕と手工業とのあいだの分業の進展がもたらされ、したがって労働生産物のますます大きな部分が直接に交換のために生産され、したがって個別生産者たちのあいだの交換が社会の死活の必要事にも高められるようになる。文明はこれら既存のすべての分業を、とりわけ都市と農村との対立を激化させることによって（このばあい、古代におけるように都市が農村を経済的に支配することも、または中世におけるように農村が都市を支配することもありうる）強化し増進し、それに第三の、文明に特有な、決定的に重要な分業をつけ加える。すなわち文明は、もはや生産には従事しないで、生産物の交換にだけ従事する一つの階級——商人を生み出すのである。それまでの階級形成の萌芽はすべて、なおもつばら生産と関係をもっていた。それらは生産に関与する人びとを、指揮者と実行者となし、あるいは大規模生産者と小規模生産者とは分けはした。ここにはじめて、生産にはすこしも関与しないのに、全体として生産の指揮権を獲得して、生産者たちを経済的に従属させる一階級が現われる。これは、それぞれ二人の生産者のあいだの不可欠の仲介者となって、その両方を搾取する。生産者たちから交換の労苦と危険とを取り除き、彼らの生産物の販路を遠隔の市場にまで拡大し、これによって住民のうちでもっとも有益な階級になる、という口実のもとに、寄食者の、純然たる社会的寄生動物の階級が形成される。この階級は、ごくわずかな実際の仕事にたいする報酬として、国内・国外いずれの生産からも甘い汁を吸い、急速に巨大な富とそれに照応する社会的勢力とを獲得し、まさにそのゆえに、文明期をつうじてたえず新たな栄誉と生産にたいするますます大きな支配とを認められ、あげくのはては、みずからもまた独自の生産物——周期的商業恐慌をさらけだすことになるのである。

この当面の発展段階では、若い商人層は、たしかにまだその前途にある大事についてはなんの予感もいだいていない。しかし、彼らは形成されて不可欠のものとなる。それで十分なのである。だが、彼らとともに金属貨幣すなわち刻印のある鑄貨が形成され、そして金属貨幣とともに、生産者とその生産にたいする非生産者の支配のための新たな手段が形成される。他のすべての商品をひそかに自己のうちに含む商品のなかの商品、なんでも望ましい望みの物に任意に自己を転化できる魔法の手段が、発見されたのである。それをもつものは生産の世界を支配したが、だれがとりわけそれをもっていたか。商人である。彼の手中では、貨幣崇拜は疑いなしであった。すべての商品が、したがってすべての商品生産者が、いかに貨幣をあがめてひれふさざるをえないかが明らかになるように、商人は配慮した。この富そのものの化身のまえでは、いかに他のすべての形態の宝がそれ自身ではたんなる仮象にすぎないものとなるかを、彼は実際に証明した。貨幣の力が、その青年期におけるほどに原始的な粗暴さと暴虐さをもつて現われたことは、またとなかった。貨幣と引き換えでの商品買いについて、貨幣の前貸しが現われ、これとともに利子と高利貸付が現われた。そして後世のどんな立法も、古代アテナイと古代ローマのそれほどに、債務者を高利貸的債権者の足下に容赦なく無慈悲に投げ出したものはない——しかもこの両立法は、経済的強制以外の強制はなしに、自生的に慣習法として成立したのである。

商品および奴隷の富とならんで、貨幣の富とならんで、いまや土地所有の富も現われた。
「いまや土地は、売却され抵当に入れられる商品となることができた。」

「文明とは、前述したところによれば、分業とそこから生ずる個々人のあいだの交換、そしてこれら両者を総括する商品生産が、十全な展開をとげ、それ以前の全社会を変革するような、社会の発展段階である。」

それ以前のすべての社会段階の生産は、本質的に共同の生産であり、同様に消費もまた、大小の生産制の共同体の内部で、生産物の直接的な分配のもとにおこなわれていた。この生産の共同性は、きわめて狭い限界の内部でおこなわれていたが、しかしそれは、その生産過程とその生産物とにたいする生産者たちの支配をともなっていた。彼らは、生産物がどうなるかを知っている。すなわち、彼らがそれを消費するのであって、それが彼らの手を離れることはない。そして、生産者がこのような基礎のうえでいとなまれるかぎり、それが生産者たちの手に負えなくなったり、生産者たちに対立する妖怪じみた外的な力を生みだしたりするようなことはありえない。文明期には、そうしたことが規則的に不可避免的に生じるのであるが。」

「商品生産とともに、すなわち、もはや自分の消費のためではなくて交換のための生産とともに、生産物は必然的にその持ち手を変えざるを得ない。生産者はその生産物を交換に手放し、もはやそれがどうなるかを知らない。貨幣が、そして貨幣とともに商人が、生産者たちの仲介者として現われるやいなや、交換過程はもっと複雑になって、生産物の最終的な運命はもっと不明確になる。商人は大勢いるし、そのなかのだけれども、他人のやることは知らずにいる。商品は、いままではすでに手から手へ渡るばかりでなく、市場から市場へも渡る。生産者たちは、彼らの生活圏の総生産にたいする支配を失い、しかも商人はそれを受けつがなかった。」(「起源」)

生産者たちが、彼らの生活圏の総生産にたいする支配を失った結果は、一体何だろうか？私有財産が最高目標とされ、消費のためではなくて交換のための生産が行なわれると、一体何が起るだろうか？

日本の繊維産業を例にしてみよう。交換でもうけるためにのみ生産されているので、アメリカの輸入制限をくらえば、操業短縮、倒産である。人間は、もっと繊維を作る能力があるのに、そして消費を要求する人々はたくさんいるのに、消費のために、計画的に生産が熟考されることはない。もうけるために、という論理のはたらくものである。「他のすべての商品をひそかに自己のうちに含む商品のなかの商品、なんでも望ましい望みの物に任意に自己を転化できる魔法の手段」――貨幣を廃止してしまつて、世界の人民の消費のために、たんに分配しさえすればなんとすばらしいことだろう。作る能力があるのだから、作つて、世界の農村へ無料で渡しさえすればいいのである。そんなことしてたんじゃあ、原料の購入もできなくなるし、労働者の給料もなくなる、というだろう。そんな事はない。今みたいに原料を安く買って、加工品を高く売りつけて、ガッポリもうけるといどろぼうをやめて、加工品は無料で世界の農村に渡し、原料を無料で分配してもらえばいいのだ。労働に給料なんて必要ないのだ。人はかねを食つて生きていくのではない。繊維労働者は、自分では食料は作つてないのだから、今までは給料で、世界の農村で作つた食料を買つていたのだが、そんなことせずに、無料で、分配してもらえばいいのだ。

このようにすると、仲介者という、「寄生者、純然たる社会的寄生動物の階級」は必要なくなるのだ。社会のダニ、寄生虫がうじょうじよいるので、都市が生産にたいする支配を失うだけではない。

農村もそうなのだ。漁村もそうなのだ。第一次大戦後、世界恐慌がおこった時、世界農村では、コーヒーや小麦を海に捨てた。コーヒーや小麦が、「消費のためではなくて交換のために」生産されていたからである。恐慌で、売ってももうけにならないので、捨てて、価値を高めて、それで高く売ろうというのである。他方では、パン、パンとさげふ飢餓状の人民がうじょうじよいるというのに。彼らの消費は人民の幸福のために生産されているのではないから、寄生虫がふとるために役に立たねば、海へ捨ててしまふのだ。北海道の港では今サバが豊漁で一匹一円もしないのに、町や地方では一匹が百円近くにもなる。農村にいけば、畑に売っても一文にもならず買ったたかれるのがアホらしくて、キャベツがくさるほどころがっているというのに、都市では、一個五十円の六十円のと、高い値で売られ、消費者はそれを買わされる。ピアフラヤパキスタンでは、飢えた人々があふれているというのに、他方では物があふれている。

都市には、なんとダニが多くいることだろう。ダニ社会を守るためにはすべてがなされ、人民の幸福のためにはすべてがなされない。銀行で働く人間。こんなダニが必要だろうか？人間はかねをくって生きるのではない。物で生きるのだ。物と物は交換というやっかいなことをしなくても、消費のために計画的に分配しさえすればいいのだ。農民は、銀行で働くダニをやしなっているわけだ。労働者は、銀行のダニに、建物を建ててやったり、服をやったりしているのだ。だが、銀行のダニは、農民や労働者に何をしてくれるか？何もしてはくれない。金というどんなものとも交換できる魔法を使って、農民や労働者の作ったものをドロボウして行くだけだ。警察官。こんなダニが必要だろうか？農民や労働者は彼らを養ってやっているのに、警察官は何も生産しない。のみか、ブルジョアジーとい

うダニどもの社会を守るために、悪い事ばかりする。自衛隊。裁判官。等々、あまりにもダニが多すぎる。農民や労働者は、なんとばかな事をしていることだろう？ダニを養うために生きているのだ。「生産に対する支配」を失ってしまえば、こうなるのだ。ダニを殺ろして、自分の幸福のために生きるべきだ。

ゴミ戦争、公害、こういった自然破壊は、まさに「生産者たちが、彼らの生活圏の総生産にたいする支配を失った結果」を如実に示している。交換ももうけるために生産がされており、人民の幸福にもとづく共同で熟考した計画で生産が規制され支配されていないからである。

我々は、このような、「瀕死の文明に悩む世界」に都市の大手術をしなければならぬ。大手術によつて獲得するものは、「生産者たちが、彼らの生活圏に地球での総生産にたいする支配をとりもどすことである」。

その手術はどのようにやるべきか。まず、「寄食者、純然たる社会的寄生動物の階級」にダニどもを一掃することである。そして生産と分配を統制することである。ところで、貨幣の存在を認めたままでの生産と分配の統制は、すぐブルジョア寄生虫をわかすので、日本ではただちに貨幣の廃貨を実現すべきである。世界の農村では、まだ貨幣を残しているも、まず、我々は、生産に対する支配をとりもどすために、「富そのものの化身」から自己を解放し、「富そのもの」を「富そのもの」としてあつかうようにすべきである。外国貿易も、そうすれば今までのように、「富そのものの化身」で世界の農村の人々をバカしてドロボウしていたようなことはなくなる。そのかわり、ドロボウできなくなるので、今までのドロボウ生活とはガタおちの貧しい生活にならざるを得ない。この貧しさを救っ

てくれるもの、それがなければ、やはり、ドロボウにも三分の理とかいって、ドロボウをやらざるをえない論理が働く。このことがあるので、都市は自力では救出不可能だと言ったのだ。世界の農村に助けてもらわねばならないのだ。そして、今、助けてやろうという世界の農村がある。中国を中心とするアジアの諸労働者国家群である。我々は廃貨を実現し、物と物とで、即ちバーター制度で、ドロボウ商業をやめて、カタギの生活を送ればいいのだ。そして、世界中も、やがてはすべて廃貨となり、世界の生産者が地球での（又は宇宙での）総生産にたいする支配をとりもどして行くのだ。

世界的なレベルにおいて、いまや廃貨は現実的な問題である。「富そのものの化身」にも、いろいろとバケかたがあつた。だが、だんだんとバケの皮がはがされざるをえないところに追いつめられている。

金本位制から、交換をへて紙きれを強制通用させる不換紙幣になり、完全な管理通貨制度になつたのだが、この国際管理通貨制度にガタがきてしまうところになつてきているのだ。今までは、まだ国際通貨は1オンス＝35ドルの金と交換可能だつた。今では、それさえ出来ず、ドルを持っていても、紙きれ一枚のねうちしかなく、廃貨をつかまされているようなものである。もはや、貨幣が、あらゆる商品にバケル神通力がガタおちになつてきているのだ。もはや、人間は、「富そのものの化身」は信用せず、「富そのもの」しか信用しなくなる直前にまできているのだ。

バケの皮をはがし、大手術をしなければならぬ！

大手術は、だれがするのか？全世界の生産者が、自己を革命兵士として鍛え、世界党―世界赤軍―世界革命戦線の戦列をもつて大手術を貫行するのだ。都市に、三種の軍隊を組織し、無数の革命戦争

を組織し、都市を廢墟と化し、廢墟の上に、農村との統一した、新しい社会、生産者たちが生産を支配する社会を実現するのだ。大手術は、兵士による、ダイナミックな活動力、機動力、組織力、忍耐力、等々をフル回転させてのみ可能である。社共は、かぜねつましの薬をのめば直る（議会主義）と言ひ、新左翼は薬ではダメだダメだといひながら手術をする事を知らない！

都市をハリ麻睡にかけよ！

赤軍が手術してやる。

都市病が二度とおこらぬように、貨幣をとりのぞいてやる。

さて、ここで、赤軍のM作戦について若干述べておこう。M作戦は赤軍の軍資金集めという即時的なものはもちろんあるとしても、それ以外に、全階級的な意味で、非常に重要な意義を持つている。ニクソンの新経済政策発表後、私有財産が人類最高の目標とされているこのブルジョア社会で、諸階級・諸階層が独自の利害をあぐどく追求しはじめている。医者、殺人的値上げ、私大の値上げ。タクシ―の値上げ。交通事故損害賠償費の高騰。離婚と慰謝料。……。数えあげればきりがなし。こういう、エゴとエゴのむき出しの対立する社会、その悪の根源は、「富の化身」の支配である。ここを襲い、バケの皮をはがして行くこと、それは、極めて革命的である。商品経済は、革命戦争で解体し、人民は新たに生産と分配を統制・支配する。そういう時代へむけての夜明けを全人民に知らせたもの、それがM作戦だつた。

これから、社会がせちがらくなり、エゴとエゴのむき出しの対立があらわれるようになると、プロ

レタリア人民は、ますますがっちり団結してたち上らなければならない。ベトナム人民が、「米倉を襲え！」というスローガンをかけたように、我々も、全人民にむかってやがて「銀行を襲え！」と言うような時代をむかえるだろう。四〇五人ではムツカシイことでも、一〇〇人も五〇〇人もが襲えば、カタナシである。日本には米騒動の革命的経験がある。我々は、それをより革命的にやるために、人民への革命戦争の政治の大担を持ち込み、政治教育、武装、兵士の組織化をより一層意識的にやらねばならない。

4 地下の兵士

国家と革命兵士の関係を革命兵士の立場から見た場合、革命兵士はどんな活動をしなければならぬか。日本の場から見よう。

① 地下活動

革命兵士は、日本ブルジョア独裁国家と全人格的に対立する。従って、ちよつとのスキは、即、死、または敗北である。まだ、力の弱い革命武装勢力は、敵にスキを見せないよう、敵に判断の材料情報を与えないように、全面的に地下活動に重点を置かねばならない。

地下兵士の組織化のための活動は、合法活動に顔を出さねば出来ないが、その場合の合法活動は、組織された合法活動Ⅱ半合法に限らねばならない。半合法と大衆との関係は、全面的合法、開かれたものである。

地下活動とは、この三重構造の中の地下なのである。この事をはっきり確認しておく必要がある。こういった地下活動にも、二つの形態がある。一つは、まさに全く地下のみの活動を、全国を潜行しながら行うもの。もう一つは、潜行しないで、警察にもほとんどスケスケレルクのような場において、全国を行き来でなしに、地域に定着しており、活動のみを全くわからないようにやるもの。前者は、

人も活動も地下。後者は活動だけ地下。この二つの形態の地下活動を結びつけて、全国―地方にわたる広範な組織を作りあげねばならない。

全国―地方、地下―半合法の間には、それぞれ、連絡体系を形成しなければならない。レーニンの場合は、全国政治新聞をその媒介としていた。連絡内容によって、連絡体系は工夫しなければならない。連絡員という人間のみを使う場合、連絡員をばぶいて、電話、手紙を使う場合、連絡員に文書を渡す場合、等々。この連絡体系の意識的形成こそ、指導・被指導の組織面における中心である。全国の細流を革命の大河へ合流させる環である。

現在、古い組織（八派）が解体し、全国に、地域的な地下サークル・グループが、誕生し、ゲリラ戦争をやりはじめている。これらの組織は、まだ、ほとんど、本場にブルジョア独裁国家とは何かを知るほどのめにあっていないので、政治面で合流へむけての指導を行ないつつ、組織面では、一線を画し、彼らがほんとうに苦しい中で堪えきれぬというふうに判断出来るものについては、党の地区地下活動に組織統合し、そうでなくて、苦しい中で敵に屈して活動をやめたり、逮捕されたものが自供するような分子が組織の中にもぐり込まないように注意すべきである。

自供は、にくむべき反革命である。有能な戦士を敵に売り、アジトを敵に売り、組織に対する人民の信頼を壊し、党を解党する反革命である。従って、地下兵士への政治教育の第一は、もし万一逮捕されても絶対に自供しないようにするには、こうやって完黙するんだ、という黙秘の仕方である。ところで、今は、黙秘だけでは不十分だ。権力は、三鷹事件、下山事件、松川事件みたいに、犯人であれ、犯人でなくても、とにかく面子のために犯罪をデッチあげる事があるからだ。デッチあげられて

からの粉碎のための消耗な裁判は革命の有利とはならない。デッチあげを許さぬ先行的攻撃を味方の側からかけるべきである。それは、逮捕されたものの完全黙秘と、外の救援組織の働きかけの二重作業によつてのみ可能である。革命家は、弘前の殺人事件の犯人が時効になってあられ、その間に一五年もムシヨに入っていた無実の罪の人間みたいなことになってはならない。

こうしたことが守られて、はじめて人民の革命武装勢力は、強力な三種の軍隊（中央軍主力部隊、地方軍部隊、ゲリラ部隊（遊撃民兵軍十自衛民兵軍））を作りうる。これが全人民総蜂起にむかつて正規の攻囲を形成して行く革命戦争の発展の具体的内容であつて、画一的なへんな（正規軍）で、これが正規の攻囲と思うのは（戦旗の日向 etc.）じつは、正規の攻囲でもなんでもない。

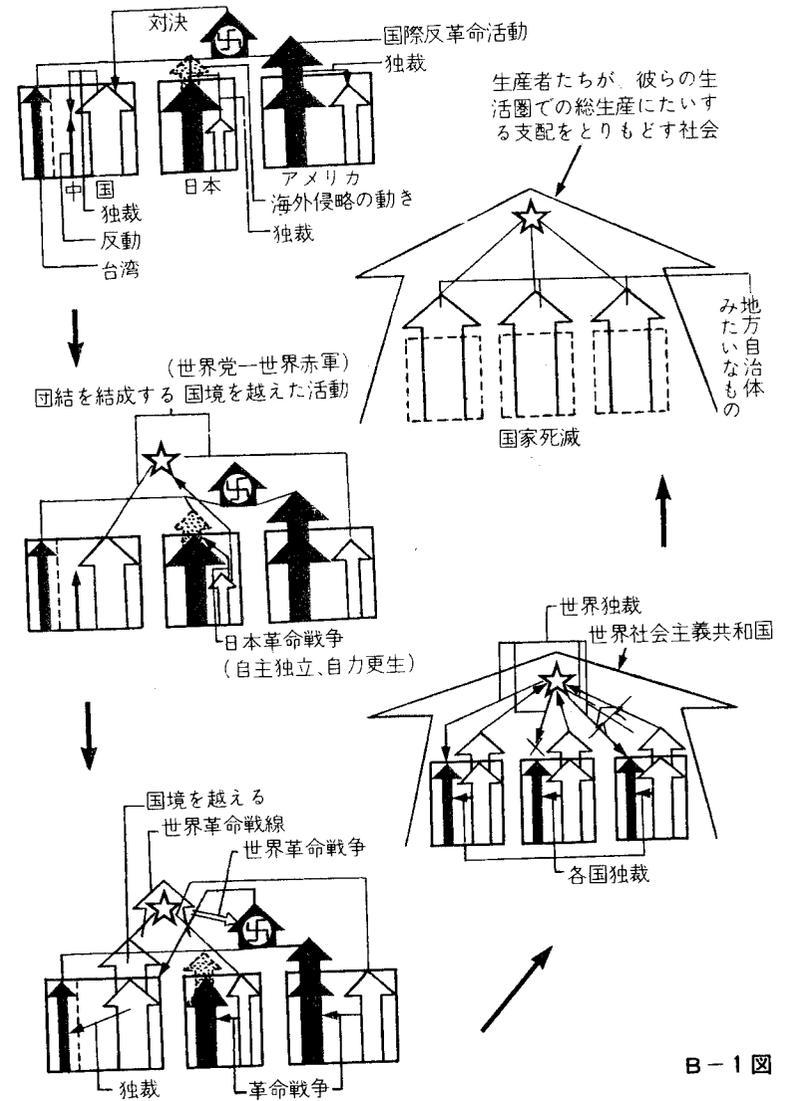
② 自主独立と世界共産党、日本革命戦争と世界革命戦争

我々は世界革命戦争を今、主要に日本の場で日本革命戦争として闘っている。ここで、地下兵士が日本での自主独立の党としての活動と、同時に、世界共産党建党と世界革命戦争全体の利益のための活動をどのように現在の場所から発展させるべきかを述べよう。A―17 図の過渡期世界と国家を単純化して、モケイ的に図にしてみれば、次のようになる。（B―1 図）

③ 兵士間の共産主義的団結について

地下活動のきびしさの中で、団結をつよめて行くには、隊内があたたかい共産主義的人間関係で運営されねばならない。あたたかい心と冷鉄な殺人機械としての肉体の統一。

こういったことについては、ボート・グエン・ザップ、毛沢東等が、三大民主主義（政・経・軍）な
 どとして詳しく述べている。ここでは、二つの問題だけ述べる。
 逮捕されたものの中に、自供したものがいるが、こうした非階級的行為を行なったものでも、戦線
 に再び復帰させるのは、医者が病人を直してやるやり方でやるべきで、すぐ反革命であり従って復帰
 はみとめない、とすべきではない。しかし、復帰に際して、本当に自供にあらわれる反革命的病気が
 直っているかどうかを、復帰を望むもの自ら示すように条件を付さねばならない。病人と健康な人は
 団結すると健康な人の方へ病気がうつるので、共産主義の健全な体は常に病気が治療する。そうでな
 ければ団結出来ない。では病気が直っているかどうか、健全な体に病気が感染しないという保証を示
 すもの、それを示さねばならない。それは先ず、最も困難な任務を志願させ、その任務をやるか
 どうかを判断の材料にするとか、自供の結果波及した味方の損害をとり返すような任務を与えるとか、
 いろいろ隊内の討論で決めるべきである。このような配慮なしに、逮捕前に相当な幹部だったから、
 というようなことで無原則なことをすれば、その組織はやがて病気の感染でダメになる。革命戦争に
 命をかける時代である。そういう時代に、自供者を出すような組織をだれが信頼するだろうか？ 残念
 ながら赤軍派の最高指導者の中にさえ、自供者がある。こんな組織は信用されるはずがない。こうい
 う組織は徹底的に治療し、手術しなければならぬ。外の今の赤軍派は、こういう病気はもっていない。
 米子の四兵士なんか、その事を立派に証明している。警視庁が六・一七明治公園の爆弾事件で
 デッチあげ起訴をまくるんだが、完全黙秘で、そういうのを粉砕した。人民は外の赤軍派を信用して
 よい。



B-1 図

路線をめぐる論争とか、そんなのは、共産主義的原則さえ組織的に蓄積されておれば、いつでも正しく解決しうる。

もう一つは、男と女の問題である。人類最初の革命、「人類が体験したもつとも深刻な革命」の一つ、それは、母権制の転覆Ⅱ「女性の世界的な敗北」であったが、このことについては、既に前述している。そして、家族について、単婚家族までは、いろいろな所で述べてきた。ここでは、それ以後の今日までの問題と、共産主義社会での家族制度の廃止へ致る問題について簡単にしておこう。

ドイツ人の歴史への登場とともに、単婚のおかけである最大の道徳上の進歩の可能性Ⅱ近代的な個人的性愛の展開が問題となったところまでを今までに述べている。では、それは、いかに以後発展したのか？

「単婚がすべての既知の家族形態のうちで、近代的性愛を発展させることのできた唯一のものであったとしても、それは近代的性愛がもつばら、あるいは主としてであれ、単婚のなかで夫婦相互の愛として発展したことを意味するものではない。男性の支配下にある強固な一夫一婦制というその本性が、それを排除した。すべての歴史的に能動的な階級、すなわちすべての支配階級では、婚姻締結は、対偶婚以来のものそのままであり、親がとりきめる便宜の問題であった。そして性愛が情熱として、しかもすべての人間（すくなくとも支配階級の）にわく情熱として、性的衝動の最高の形態として——これこそがまさに性愛の特殊な性格をなす——歴史上に現われる最初の形態、すなわち、中世の騎士の恋愛は、けっして夫婦愛ではなかった。反対である。その古典的な姿では、すなわち〔南フランスの〕プロヴァンス人においては、それはまっしぐらに姦通へとつき進み、当時の詩人はこれを讃

美する。プロヴァンス恋愛詩の精華はアルバ(Albas)、ドイツ語でいえば Tagelieder (後朝の歌)である。それは、まばゆいばかりの色彩で、騎士がその愛人——他人の妻——と寝床に横たわり、他方、戸外には見張りが立っていて、最初の曙光(alba)がさすやいなや、かの騎士が人目につかずに逃げられるように声をかける、という情景をえがく。このあと、別れの場面がクライマックスをなすのである。』(『起源』)

わが赤軍兵士は、中世の騎士のような恋愛を讃美すべきではない。それは、男性による女性の支配でしかありえない。女性は、もし男性兵士がこの種の行為をしようとするとするなら、それを粉砕しなければならぬ。中世以前、女性がまだ尊敬されていたころは、女性はちゃんとことわっている。日本の万葉集でみてみよう。「春の夜の夢ばかりなる手枕に、かひなくた、む名こそ惜しけれ」(どうせ、あんたは一時の遊びでしょ、悪いウワサばかり立つなんて、いやだわ)と。

当時は、女性の力が強かった。天皇でも恋人のところをたずねていく。江戸時代の将軍みたいに町から家来にかつさらってこさせてやるといったことはしない。トン、トン、トン、あけておくれよ、オマエチャン。共寝をしよう、と言うと、家の中の娘は、「隠口の泊瀬小国によばひせすわが天皇よ奥床に母は寝たり外床に父は寝たり」(わが天皇よ、奥の寝床にはオツカチャンが、戸口にはオトツチャンが寝てる)と言う。母が先で、父が後。「起き立たば母知ぬべし出で行かば父知りぬべし」(わたしが起きていったら、オツカチャンに、出ていったら、オトツチャンにわかっちゃう)、「ぬばたまの夜は明け行きぬ」。コケコッコ、万事休す。「幾許も思ふ如ならぬ隠夫かも」(思うようになりません)

「性愛が女性にたいする関係で真の原則となっており、またなることができるのは、わずかに被支配階級において、したがって今日ではプロレタリアートにおいてだけである。——この関係がいまや公的に認められているかいないかには、かわりなく、しかしここでは、古典的単婚のすべての基礎もまた取り除かれている。単婚と男性の支配とは、まさに財産の保全と相続のためにこそつくりだされたのであるが、ここではその財産がまったく欠けており、したがってここでは、男性の支配を主張する動機もまたまったく欠けている」。

「大工業が女性を家庭から労働市場へ、工場へと移し、彼女をきわめてしばしば家族の扶養者にするようになって以来、プロレタリアの家では、男性の支配の最後の残りかすまでもが、そのすべての基盤を失った。——単婚の採用以来広まった、女性にたいする虐待の一部がまだ残ってでもないなければ。こうして、プロレタリアの家族は、夫婦双方のもっとも情熱的な愛情やもっとも堅固な貞操にもかわからず、またおよそどんな宗教的および世俗的な祝福にもかかわらず、もはや厳密な意味での単婚家族ではない。したがって、単婚の永遠の同伴者である娼婦制と姦通も、ここではほとんどあるかないかの役割しか演じない。妻は離婚の権利を実際にとり戻すにいたり、夫婦仲がうまくゆかなければ、むしろ別れることを選ぶ。要するに、プロレタリアの婚姻は、言葉の語源的な意味では単婚であるが、その歴史的な意味ではけっしてそうでないのである」。

「多くの夫婦とその子供たちを包含した昔の共産制的世帯では、女性にゆだねられた家計の管理は、男性による食料の調達と同様に、一つの公的な、社会的に必要な産業であった。家父長制家族の出現とともに、またそれにもまして単婚制個別家族の出現とともに、事情は変化した。家計の管理はその

公的な性格を失った。それはもはや社会とはかわりをもたなかった。それは一つの私的奉仕となった。妻は筆頭女中となり、社会的生産への参加から駆逐された。現代の大工業がはじめて、女性に——それもプロレタリアの女性にだけ——社会的生産への道をふたたび開いた。だがそれは、彼女が家庭の私的奉仕でその義務を果たせば、公的な生産からは排除されて、一文も稼ぐことができないし、また公的な産業に参加して自主的に稼ごうとすれば、家庭の義務を果たすことができない、という具合である。そして女性にとっては、医師や弁護士にいたるまでのすべての職業部門において、事情は工場におけるのと同様である。近代的個別家族は、妻の公然または隠然の家内奴隷制のうえに築かれており、そして近代社会は、個別家族だけをその構成分子とする一つの集団なのである」。

「女性の解放は、全女性が公的産業に復帰することを第一の前提条件とし、これはまた、社会の経済的単位としての個別家族の属性を除去することを必要とする、ということがわかるであろう」。

「生産手段の共同所有への移行とともに、個別家族は社会の経済的単位であることをやめる。私的
家計は一つの社会的産業に転化する。子供たちの養育や教育は公的な事項となる。嫡出子であろうと私生児であろうと、一様にすべての子供の世話を社会がある。これによって、今日、娘が恋人に思いきって身をまかせるのを妨げる、もっとも本質的な社会的——道徳的ならびに経済的——要因をなし
ているところの、『結果』にたいする心配がなくなる。このことは、いっそう無遠慮な性交を、した
がってまた処女の誇りや女の恥についてのいっそうルーズな世論を、しだいに生じさせるのに十分な
原因となるのではなからうか」(『起源』)

こういっただことは、全社会的なことであって、今すぐのことではない。ところで、革命兵士た

ちは、一応そういった社会的関係を見通し、その上で、現実の問題を正しく解決してゆく努力をすべきである。

男性兵士はおおいに女性を愛すべきである。一人の女性さえ愛せないで、どうして全人民を愛すことができようか。「夫は家族のなかでブルジョアであり、妻はプロレタリアートを代表する」(『起源』)社会なのだし、男性兵士は女性を愛し、その中でプロレタリアートを代表する彼女にしごかれて自己のブルジョア性を克服し、真の革命家、共産主義者にならねばだめだ。女性兵士は男性を愛し、その男性のブルジョア性をしごくべきである。

兵士と兵士、兵士と人民、兵士でも三種の軍隊によって、男女の考えうる組合せはいろいろあるが、それは、兵士の立場から解決すべきである。ゲバラのように、ゲリラ兵士とそうでない妻との関係では、一時、妻を捨てることもおこるし、カストロみたく、愛した女性にふられることもある。カストロは結婚していたのだが、奥さんがバチスタの役人と仲よくなり、モンカダの時、友達に「想像していなかった苦しみにたえて行かなければならない」と言っていたそうだ。ハバナに入った時、奥さんが「フィデル私はあなたをまっていた」と言ったそうだが、「自分をうらぎった君はゆるしてやるが我々の思想をうらぎった君はゆるせない」と言ったそうだ。

ブラジルのVPR(人民革命前衛)のカルロス・ラマルカは、つい先ごろ殺されたが、カルロス・ラマルカは妻子をキューバに置き、ブラジルでもう一人好きになり、その愛人と連絡をとるルートを権力につかまれて殺されることになったのだが、兵士は、革命戦争の冷酷な法則を十分考慮し、その立場から、性愛を発展させるべきである。

「われわれのいう性愛は、古代人の単純な性的欲求、すなわちエロスとは本質的に区別される。第一に、それは、愛されるものがわにも、それに答える愛情のあることを前提とする。そのかぎりでは、女性も男性と平等であるが、しかし古代のエロスでは、女性の意向はけつしていつも問われたわけではない。第二に、性愛はある程度の強度と持続性を持ち、いっしょになれなかつたり別れたりすることが、双方にとって、最大ではないにしても大きな不幸と考えられるものである。たがいにいっしょになれるためには、彼らは大きな危険をおかし、生命までもかけるが、こうしたことは、古代ではせいぜい姦通のばあいのみられるだけである。そして最後に、性的交渉を判断するための新しい道徳上の尺度が成立して、たんにその交渉が婚姻上のものか婚姻外のものか、というだけでなく、それが相互の愛情から生じたものであるかいかいなくも、問題にされる」(『起源』)

④ 真の革命党を建党してゆくために

この問題は、国家論(家族、私有財産の問題を含んだものとしての)レベルの問題とは、別であり、ここでは、全面展開をするわけではない。①で、地下活動の二つの形態について述べたけれども、その事を補足するだけである。

プロレタリア人民の圧倒的部分は、日々の労働のため、自己の活動範囲はどうしてもある特定の地域に限定されざるをえない。そうすると、どうしても、地下活動のあり方は、顔は地上、活動は地下とならざるをえず、顔も地下、活動も地下とはなりにくい。これに対して、学生は、生産からきりはなされているので、顔も活動も地下の活動でも、わりとやりやすい。そして、今までの日本の階級闘

争の特殊な構造に規定されて、日本における革命党の建設は、次のような特長をもっている。日本が帝国主義であり、その内部で労働者が自発的に闘いを起こす契機はかぎられており、帝国主義としての日本を世界的構造の中で位置づけて批判しうるインテリゲンチヤ、学生運動がどうしても先行するので、学生共産主義者の影響をうけざるをえなかったということ。歴史的に見れば、労働者の闘いが革命にむかつて組織された時代は戦後革命の一期期であり、この時の闘いが組織され継承されることなく解体して以後は、小ブル的平和運動と去勢された労働運動しかなく、それが六〇年安保以後、新左翼諸党派として成長してきているのだが、この党派は、学生を中心にしており、労働者も一部分に限定されていること。

こういった中で、圧倒的な労働者大衆は、階級的に解体され尽しており、全く無防備といつてよい。ところで、今、日本帝国主義は、労働者の即自的闘争をも激化させざるをえない局面にようやくいたりつつあり、今後、階級闘争への圧倒的労働大衆の登場は不可避である。この労働大衆の中に、不拔の武装した革命党を組織して行く事、この事を真剣に考えないならば、今までのインテリ党では革命の役にたたなくなる。では、いかにして不拔の地下武装革命労働党を建設してゆくのか？

それは、今までの歴史に規定されて、赤軍派でも、地下活動が、顔も活動も地下、に限定されざるを得なかった構造を、より発展させて、労働者大衆の中へ武装を持ち込む活動としての、顔は地上、活動は地下という活動スタイルの持ち主「カードル」を育成し、顔―活動地下全国組織と顔―活動地下地方組織と顔地上―活動地下の地方―工場・学園組織を作りあげる組織戦略を確立することである。学生・インテリがだめだと言っているのではない。彼らは、力的手段でたたかおうという組織性、

規律性よりも、論証の助けによって、個人の信念で武装する、といった傾向を持っており、それだけでは、力になりきれないのである。いつもオシャベリをするヒマが多いので、反政府的サークルを作つて、デモをやることは容易である。全国的活動もやりやすい。その中で、論争と論争の渦の中で、智恵を持った共産主義者は形成されてくる。智恵は今、力をもたねばならない。力とは、組織の事である。圧倒的労働者大衆の中に、武装という智恵を持ち込み、真の革命党を建設する時、力が形成される。ブルジョアジー独裁を粉々に打ち壊す力が形成される。

顔は地上、活動は地下の組織のあり方については、いろいろ工夫して考えうるであろう。今、全国で、そういう事を考えているゲリラ・サークルみたいな組織は生れている。彼らの細流を、そのまま、ではなく、組織性、規律性を厳格にして、全国的革命党へまとめあげ、建設して行く事、この事をどうしてもなしとげねばならない。

あとがき

文中、自供問題などで、外の赤軍を信用してよいなどと言っていると思う。これは、連合赤軍の諸事件によって、事実によってウソである事となった。申しわけないと思っっている。こういったことがあるにもかかわらず、提起している全体的な問題は、それなりに多くの事を語っているはずである。このメモで述べたかった事は、毛沢東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」「人間の正しい思想はどこからくるのか」「党内のあやまった思想の是正について」「党の作風を整えよう」「党八股に反対しよう」「……」などに典型的な、内因問題ではなく、国家論が中心なのだから、若干のウソがあつた事については許していただきたい。そのへんのことを考慮した上で、全体を判断し、批判をよせていただくならありがたい。団結―批判―大団結、と、批判を媒介に、更に団結の内容を高次化して行きたいと思っっています。

一九七二、四、一〇東京拘置所にて

この英雄兵士の物語は、一九七一年十一月に東京拘留所の中で書いたものです。私は、当時赤軍の内部で、反米愛国云々をめぐっているいろいろな論争がされている中で、これに対してちゃんとした国家論の展開をしないとイケないと感じていました。同志花園をはじめ反米愛国病に多くが感染し、それへの批判でも、同志塩見の国民革命批判の中などには、社会主義的愛国とか、感染した批判が出たりして、ピンチだと思っていたからです。

拘留所で、枚数制限外記載願いを出して獄外に送ろうとしたところ、東拘の所長命令で、その不許可、及び七枚づつに分けて発送することも禁止するという弾圧をくらった。これに対して、公判の席上で問題としたところ、東拘は、弁証法的唯物論の立場からマルクス主義国家論を述べており、又、朝鮮戦争当時の法務省矯正局長通達に該当しないから不許可にすると露骨な思想弾圧とメチャクチャな獄内行政処分を行ってきたが、論破し抜いて、闘いの結果ようやく獄外に出す事が出来たのです。この本では、僕は、国家論について、及び過渡期世界というものについて、非常に多くの問題提起をしているつもりです。この文章を書いて一年数ヶ月たっているわけですが、その間に感じた点について簡単に触れておきたいと思います。

一つは、高松塚古墳とアイヌ問題です。日本や朝鮮の氏族社会の階級社会への分解過程について、分析を万葉集とか古事記などの書物からでなく、現実にモーガンのインディアン研究などと同じようにやれるものがあつた事について無知で、アイヌ問題について全くふれていないこと、しかし、古墳

の分析からの戦闘と生産の結合の問題などは、現在の過渡期にも多くの問題を投げかけるものと思つていきます。

次に、現在の政治との関係で問題にするとすれば、ベトナム平和と米帝のドル切下げ、日帝の円切上げ問題などが、これからますます社会深部に独自利害の対立のうずを作り出すけれども、そこで最も要求されるのがやはり国家論であり、その意味では、この本で述べた内容は、これからの日本のプロレタリア人民の闘争にとって非常に大切な事を述べていると思つています。日共の民主連合政府構想に対して、新左翼のすべてが、独自利害の対立のうずの中で対立を尖鋭化はさせなくても政府―権力構想へと人民を組織する政治内容を持っていない。経済問題での円切上げなどに対し、物価値上げ反対をいかなるバク口で闘い、いかなる社会革命の方向で闘い、この闘いの中でそれを個別闘争におわらせる事なく、権力闘争へ首尾一貫して領導する大まかな骨格、それは何か、を明らかにしなければならぬが、本書は、直接そういった闘いの路線へと具体化されてはいないとはいえ、それに役立つ多くの内容を語っているはずである。

過渡期世界の動的構造を明確に把握しうること。その構造の社会的分析も、貨幣の廃止まで含むラディカルな社会革命の内容と深く結びあわせて提起しているので、一見図だけ見れば、形態的政治学といったふうにも見えてもそうならずに全体をトータルに把握する内容を持つていること。こういった点で、本書は独特の内容を持つているが、この点に関して、読者の皆さんからの批判をうけ、論争を高め、団結を高めて行きたいと思つています。

一九七三年二月十四日

われわれが、この『英雄兵士の物語』と題された大部の原稿を受けとつてから、既に多くの時の経過があつた。いま、雑誌『査証』の既刊号を繰ってみると、昨4月末に発行された「3号」からその出版予告が出されているから、すでにこの書物の発行は一年になんなんとする遅れともあることになる。そうした出版の遅れは偏えにわれわれのいたらなき、出版に関する不備以外のものではあり得ないが、〈連合赤軍〉以降、この一年間というものの重さ、急激な政治的变化に照らされる時、われわれはそのことの〈犯罪〉を、深く自己批判しなければならぬ。とりわけ、数多くの書店に対してこの書物に関する問い合わせを寄せられた、これもまた数多い読者諸兄に対して深くお詫びを申し上げる。

われわれのそうしたいならなき故の一年間という〈遅れ〉の中で、この書物は幻の書としての〈神話〉を生みつつ、一方、わずかにコピーされた原稿によって、公刊され得ぬまま、いくつかの論争に立ちあわねばならなかつた。このことは何よりも、著者たる上野勝輝氏にお詫びしておかねばならない。

2 内容に関して云々する資格は、われわれには無いが別なところで著者自身が述べているようにこの書物の前半部分は主として、その論理的基礎をエンゲルス『家族私有財産および国家の起源』、田中二郎『ブッシュマン』^(註2)に負っている。そして更にそれらの論理的脈絡に立脚しつつ、現代過渡期世界論に即して〈世界〉の全体像を再構成しようとする〈試み〉が、本書であると言えるだろう。

もとより、ひとつの〈試論〉、ひとつの〈覚え書〉——著者の言葉に従えば、「固くて、つぎはぎだらけのメモでしかない。」(序)のだが、誤解を恐れずに言えば、エンゲルスの『起源』に対してモルガンの『古代社会』^(註3)がもつた役割にも似たものを、著者は田中『ブッシュマン』に見いだしつつ、自己の〈国家論〉

を發展させようとしている、と言えるだろう。

廣松渉は、田中『ブッシュマン』に対する〈書評〉の中で次のように述べている。「ブッシュマンといえ、最も未開な人間として、従つてサルからヒトへの進化を考察するにあたり、また、原始の人間生活を復元するにあたり、文化人類学的アプローチの極点に位置するものとして知られている。ところが、諸般の悪条件のため、本格的な調査研究がおこなわれるようになったのは僅々ここ数十年のことであり、本書以前の調査研究の殆んどは、周辺のバントゥ諸族の文化的影響を受けている部分を対象とするものであつた。二、三の先駆的業績がないわけではないが、田中氏の研究は、実質上、前人未踏といつてよいものの如くである。……田中氏の所説は、今西学派の一連の業績、とりわけ、そのホミニゼーション論との総体的連関のもとに受納すべきものといえよう。……本書は文化人類学の一専門書、フィールド・ワークの一記録として書架に納めらるべきではなく、人文科学および社会科学の全般がこぞつて糧とすべきものであると信ぜられる。」^(註3)

詳しくふれるには既に紙数が尽きているがそれは別の機会に譲るとして(雑誌『査証』8号誌上に於いて上野氏の再論、および読者からの寄稿のための頁がとられる筈である。)この書物は、これまで左翼陣営の中で、ほとんど問題視されなかつた(今西錦司——今西学派の業績に理論的根拠をおく理論展開とはじめての出合いである。一九六九年、全共闘運動——大学闘争のバリケードの中で、今西錦司の論文が読まれたことが唯一例、記録されているがそのことをわれわれはふたたび東京拘留所の独房の中に見出す。この書物は、その〈読む〉^(註4)と、著者自身の国家論のコンテキストに従つた〈書く〉^(註5)という作業との緊張の産物であるといえるだろう。

註1 上野勝輝(パンフレット)「革命の暗黒を吹き飛ばし、反動の嵐に勝ち抜ける赤い火をもちよ」1972.3 (後に「序章」8号に再録)

註2 田中二郎「ブッシュマン」1971 思索社

註3 廣松渉「書評—「ブッシュマン」——人類起源論に曙光」1971.5 日本読書新聞(5月3日号)

註4 川那部浩哉「書評—今西錦司著「生物社会の論理」——対決する人を動かす力をもつ」1972 「思索社書評集」所収

上野勝輝 (うえの・かつき)
現住所—京都市左京区—乗寺塚本町65
白銀荘11号室

英雄兵士の物語
—国家論の発展のために—

著 者 上野勝輝
初版発行 1973年4月28日
発行者 査証編集委員会
発行所 査証出版
定 価 650円



定価650円